

ふわっといずデス？

とりなんこつ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

藤堯×切歌を読みたいという（脳内）リクエストに応じて書いてみました。

ちよつとした破綻や矛盾は勘弁して下さい。てへぺろ。

※アフターストーリーズは、次世代オリキャラ注意です。

目次

第1話	1
第2話	26
第3話	47
第4話	59
第5話	76
第6話	87
第7話	98
第8話	107
第9話	121
第10話	132
第11話	140
第12話	153
第13話	164
第14話	179
第15話	191
アフターストーリーズ	
その1	202
その2	205
その3	210
その4	215
その5	221
その6	227

## 第1話

その日、飲み物を求めて自販機コーナーへと向かった藤堯朔也が、  
暁切歌と出会ったのは誓って偶然である。

自販機の横のソファアの端っこで膝を抱えて座る少女。丈の短いスカートから剥き出しの太腿はえらく健康的に見えたが、それだけだ。

藤堯にとつて、リアルJKがどうこういうよりも、装者自体がアンタツチャブルな認識である。

心象心理を具現化し、シンフォギアとして身にまとう装者のメンタルケアには細心の注意が払われていた。

ゆえに専門性のスキルを持たない藤堯としては、事務手続き等の会話をした記憶しかない。

それだけでなく切歌はレセプターチルドレンの一人である。

最近、高校生活に馴染んできたとの話は耳にはしているが、FISとして活動する以前は正規の教育を受けてきたとは言いがたく、情緒的にも、同じ年代の少女に比し、やや不安定であると藤堯は分析していた。

しかし、顔を見てしまった以上、ここで回れ右して戻るのも変な話である。

努めていつものように振る舞い、個人用端末を使ってキャツシユレスで缶コーヒーを購入。

がちちゃん！ と思つたより大きな音と一緒にコーヒーが吐き出され、切歌がビクツと身体を震わす。

そして、目が会った以上、声をかけないのも不自然だ。

「…えーと、切歌ちゃん、どうしたのかな？」

「藤堯…さん」

大きな目がたちまち潤み始めた。

なんか面倒臭そうだぞ、と直感したが、決して表情には出さない。

大人だってやせ我慢をするのだ。

「とりあえず、温かいものでも、どう？」

藤堯は手に持った缶コーヒーを差し出して言った。

「調が…調が…」

コーヒーの湯気で涙腺が緩んだのか、鼻水と涙をズビズビさせながら切歌は繰り返す。

「うん、調ちゃんがどうしたのかな？」

ポケットティッシュを差し出しながら藤堯は促す。

結果として、予感は的中。そして話も良くある内容。

些細なことで喧嘩になり、互いに言い争い。

その流れで、切歌は思わずこう切り返してしまったという。

『アタシの方が調より少しだけお姉さんなんだから、言うことを聞くデースー！』

確かに切歌の方が一年ほど年長になる。

調にしては、自分ではどうしようもない埋められない差で言い返されたのだから溜まったものではない。

『お姉さん？ 切ちゃんはどっちかというと妹だよ』

『そんなことないデースー！ アタシがどれだけ調のことを守ってきたか…！』

『おさんどんは私より下手でしょ？』

噛みあわない上にすれ違う互いの主張は、止めるマリアも居なければ際限なくエスカレート。

そしてとうとう、

『だったら切ちゃんも年上らしいところを見せて!』

『わかったデス! しっかりれ淑女らしいところを証明してみせる  
デース!』

『淑女らしく、つてなに?』

『そ、それは…素敵な男性にエスコートされる大人の女性ということ  
デース!』

『そんなの切ちゃんには絶対無理だよ!』

『そんなことないデスツ!』

互いに言い捨てて、喧嘩別れ。

家を飛び出した切歌は、他に行く宛もなく、S・O・N・G・本部  
まで戻ってきたという。

「アタシは、どうしたらいいんデス?」

「……………」

そんな目で見られても、その、困る。

しかし、困惑をおくびにも出さず、藤堯は微笑んで見せた。

内心では死ぬほど面倒臭くなったと溜息を連発している。

だいたいこの年頃の女の子の扱い方など知らない。

淑女の定義はともかく、素敵な男性つてなにさ?

まあ、夢に夢見るお年頃なんだろう、と分析しては見たが、何の解  
決にもなっていないかった。

とりあえず、これは司令たちに下駄を預けたほうが良さそうだ。

そう判断したものの、濡れた瞳で見上げてくる少女の前から何も言  
わずに去るわけにも行かない。

「そう…だね。一度、男の子とデートでもして見せたらいいんじゃない  
かな…?」

後日、この発言は迂闊かつ無責任だったのでは、と藤堯は大いに反  
省することになる。

「でーとデスとツ!?!」

一転、切歌は瞳を輝かせた。

「あ、あの、男の子と遊園地で遊び放題、おやつもご飯も食べ放題なデート…ッ！」

何かおそろしく認識にズレがあるような気がする。

しかし、もはやこの時点で藤堯は限界だった。

「それじゃあ、オレからも司令たちに相談してみるから…」

身を引きながらそろそろと後ずさり。

「是非お願いするデスッ！」

ああ、真つ直ぐな眼差しが胸に痛い。

「ほう、切歌くんがデートとな？」

藤堯の報告を聞いた風鳴弦十郎が実に面白そうに言う。

「なるほど、色を知る歳か…」

失礼しますと一礼し、そう呟いた弦十郎の頭を、すぱこーん！と

友里あおいが丸めた書類で叩く。

「司令。あの年頃の女の子は、夢に夢を見るものなんですよ」

彼女の言は、奇しくも藤堯の認識と一致していた。

オレの判断は間違っていないなかったと藤堯はそつと胸を撫で下ろす。

「さりとて、夢は醒めて現実へと落ち着くものだろうか？」

「今はまだ夢のまま満足させて上げればいいのではないのでしょうか」

弦十郎と友里は良く分からない会話を交わしている。

オレの役割は終わったとばかりに自分の仕事に邁進していた藤堯だったが、直後の弦十郎の声にディスプレイにコーヒーを思い切り噴き付けてしまう。

「おい、藤堯。おまえ、いっちよ切歌くんとデートしてこいッ！」

「は、はあッ!? 何いってるんですかッ!?」

だばだばと口からコーヒーを零しながら慌てる藤堯に、弦十郎は太

い指を折々話かけてきた。

「まず第一に、切歌くんにご飯を御膳立てするにしても、迂闊な人間を立てるわけにはいかない。組織に関係ない第三者などもつての他だ」

「ま、まあ、そりゃそうでしょうね」

「第二に、いくらプライベートであれ、護衛が必要だ。しかしデート相手がずぶの素人では、警護対象が二つに増えてしまう。結果として予期せぬ危険を招きかねん」

「……」

「最後に、切歌くんが頼ったのは藤堯、おまえだ。そこは大人として最後まで対応すべきだろう?」

「そんなの、司令が相手してあげればいいじゃないですかッ!」

苦し紛れにそういうと弦十郎は大きく苦笑する。

「さすがに相手が俺みたいなおっさんでは、切歌くんも納得せんだろうよ。外見的にもな」

護衛としては無二だろう。だが弦十郎の言うとおり、客観的に見れば、弦十郎と切歌二人並べたとして、親子以上に見られることはまずあるまい。

「そ、そうだ。緒川さんに頼めば……ッ!」

「残念ながら翼さんのツアーで一緒に国外よ」

藤堯の足掻きを、友里が冷静に突き放した。

「…そうはいいいますけど、オレだって彼女と一回りくらい歳が離れますよ?」

「だが、見た目的にはそれほど悪くない取り合わせだと思っぞ。俺と違っつてな」

弦十郎はそういつて笑った。

「大人として、しっかりエスコートして上げればいいじゃない」

友里も笑っている。

気づけば完全に外堀が埋められつつある。

背中に冷や汗を流しながら、それでもどうにか藤堯はやせ我慢。

ああ、オレの貴重な休日が…。



唇を震わせないようにしながら訊いた。

「もしかして、二人とも面白がってませんか…?」

「そんなことはないぞ。おまえを男と見込んでのことだ」

「そうそう。切歌ちゃんのを夢を壊さず満足させて上げれば、装者のメンタルケアの観点からも望ましいわ」

二人揃ってそう言われては、さすがにそれ以上拒否するわけには行かない。

まったく、すまじきものは宮仕え、というやつだ。

半ばやけくそ気味に叫ぶ。

「わかりました。今度の日曜日ですネッ!」

「ああ、なんなら時間外と代休を申請してもいいぞ? 本部の車も自

由に使ってくれて構わん」

「保安部にしっかり映像資料を提出するよう言っておかなきゃ」

「…絶対に面白がってるでしょ?」

そして日曜日。

駅前の公園で、藤堯は切歌と待ち合わせ。

チノパンにTシャツとベストというカジュアルな格好で、藤堯はベ  
ンチの前に佇む。

…よもや、まさか本当にデートをする羽目に陥るとは。

しかも相手はリアル女子高生。

それはそれで貴重な体験かも知れないが、司令はちゃんと地元警察  
にも根回ししてくれているんだろうな…?

未成年保護条例で引つ張られたりしたら目も当てられない。

「お待たせしたデース…ッ」

待ち合わせ時刻の丁度五分前。

顔を紅潮させた暁切歌が現れた。

そしてその姿を見て、啞然とする藤堯がいる。

「どうしたの、その格好」

「え？ 変…：デスか？」

ヒラヒラのサテン生地ワンピースに、ともあればよろけそうなほど高いピンヒール。

「デ、デートに相応しい格好ってことで、色々調べたんデスけど…」  
確かにデートの装いではある。

しかしそれは、どちらかと言えば夜にしつぽりと行われるデート用の格好だった。

おまけにしている化粧も、何で覚えたのか濃いグロスをべったりとつけている。

やはり知識に偏りがあるようだ。

そう分析した藤堯は、苦笑を通り越して脱力してしまう。

正直、全くの予想外。

「とりあえず、そのブティックへ行こうか」

「え？ え？」

困惑する切歌の手を引いて、駅前のブティックへ。

店員に可愛らしいコーディネートを依頼して、切歌を押し付ける。

奥の試着室へ引っ張られていった切歌は、ものの15分ほどで姿を現す。

紺色のブラウスに純白のフレアスカート。足もとは編み上げのブーツで、全体的にシックかつカジュアルにまとめられている。

「うん、似合ってるじゃないか。可愛いよ」

とりあえず、女の子は可愛いと褒めるに限る。たいがいオレも擦れてるね。

「そ、そうデスか…？」

満更でもない切歌を横目に、クレジットカードで支払いを済ませた。絶対に経費で落としてやると心に誓う。

着てきた服は紙袋にまとめてもらい、藤堯が持ってブティックを出た。

すぐそばのパーキングに、本部から借りてきたSUV車が留まっている。

紙袋を後部座席において藤堯は訊いた。

「さて、切歌ちゃん、どこか行きたいところある？」

切歌は目を白黒させ、

「で、でーとは男性がエスコートするものデスと本には…」

「うん、そりやそうか。そうだね。出発するよ」

あつさりと認め、藤堯は車をスタートさせる。

切歌に敢えて尋ねたのは、藤堯自身がデートという意識が薄いことの表れだ。

どつちかというと、親戚の子供をどつかに遊びにつれていく感覚に近い。

それでも切歌が望むのであれば、それなりにデートの体裁を整えなければならぬだろう。

車を走らせること数十分。とある建物の駐車場で車を止める。

「…ここは？」

怪訝そうな顔つきの切歌を、藤堯は建物へと誘う。

中に入るなり、切歌は感嘆の声を上げた。

ここはお洒落な外観の水族館。

天井まで張り巡らされた巨大な水槽の下を歩き、エスカレーターで地下へと降りる。

「み、見たこともないお魚さんがこんなにいっぱい…!!」

感動し、同時に喜んでいる切歌に、藤堯もホッと一安心。

デート先の候補に対し、他には動物園、美術館、遊園地なども考えていた。

しかし動物園は臭いが気になるし、美術館は展示内容によっては退屈だ。

遊園地ではしゃぐには、藤堯ほどの年齢になると少々辛いものがある。

よってセレクトしてみた水族館だったが、どうや図は当たったようだ。

巨大な水槽の中でキラキラと鱗を輝かせながら渦巻く小魚の群れなどは、十分大人の鑑賞に耐えるものがある。

はしやぐ切歌を半歩遅れてついて回りながら、それでも気分は遠足を引率する先生に等しい。

「見て見て、藤堯さん！ あのマンボウさん、まるで響さんみたいデース！」

「ほう、どれどれ？」

言われてみれば、なるほど、クリスに叱られて頬を膨らませる響にどこか似ている赤マンボウだった。

他にもペンギンコーナーや、ヒトデなどの海産物に直接触れるコーナーではしやぐ切歌。

「すごく楽しいデース！ 今度調もつれてこなきや…！」

無意識の想いが声に出たのだろう。藤堯は敢えて聞かないふりをする。

仲違いしても、本心はお互いを思いやっている。まったく可愛いもんだ。

「うわ、凄いデスね、ここの…」

そんな切歌が一番大きな歓声を上げたのは、壁付された巨大なヒョウタン型の水槽にびっしりと浮かぶクラゲの群れ。

照明を押さえられたそのエリアでは、まるで無数の雪が舞うような幻想的な光景を演出していた。

「そうだね、凄いな」

賛同の意を示しつつ、水槽を眺め、藤堯は生来の分析癖を發揮している。

この水槽の容量に対し、クラゲ一匹あたりの占有面積は…。

「…藤堯さん？」

すぐそばで心配そうな表情で見上げてくる切歌がいる。

「ん？ いや、ごめん、少しぼーっとしてた」

誤魔化すような答えは、切歌の表情を完全に晴らせなかった。彼女なりに気づいたのだろう。

自分のはしやいでいるけれど、果たしてエスコートしている藤堯は楽しいのかと。

やれやれ、こんな子に気を使わせちゃったか。

藤堯は微笑んで、近くの売店を指さす。

「ところで、クラゲソフトクリームってあるんだけど、食べる？」

「ぜひ食べてみたいデース！」という切歌を水族館のイトインコーナーのベンチで待たせ、藤堯は売店でソフトクリームを購入。自分のぶんのアイスコーヒーと一緒にお盆に載せてそろそろと戻れば、何やら切歌が二人の少年に絡まれている。

「ちよつと、止めてくださいデスッ！」

「いいじゃん、遊びにいいこうぜ？」

「一人でいてもつまらないでしょ？」

「あ…ッ」

嫌がる切歌の胸元からこぼれたギアペンダントが、少年の一人に鷲掴みにされ、ネックレスごと引き千切られる。

「なんだこれ？ 変な形だな」

「か、返してくださいデースッ！」

「返して欲しけりや、少しおれ達に付き合ってくれよ。な？」

藤堯は歩きながら溜息。

「まったく、保安部はなにやってるんだ？」

同時に、少年二人の振る舞いに怒りを覚えずにはいられない。

「はい、そこまで。ストロップ」

それでもいきなり怒鳴りつけないのは、大人の矜持だ。

少年二人は怪訝そうに藤堯を見て、すぐに下卑た声を上げた。

「なんだよ、おっさん？ お呼びじゃねーぞ？」

「ひよつとしてこの子の彼氏だったのか？ やべー、ロリコンだろ、さ  
ては」

…そのロリコンの相手をナンパしているおまえらは何なんだ？

藤堯はそう思う。

自分でも線の細い方なので見損なわれるのは仕方ない。だが、二十歳そこそこのガキに笑われるのはともかく舐められるのは我慢できない。

「はあー、と藤堯は溜息。

それから、挑発的な笑みを浮かべている二人のガキどもに最終通告。

「さっさとそのペンダントを置いて帰れ。今なら見逃してやる」

「はあ？ なにイキってんだよ、おっさん…」

少年の一人が言い終わらないうちに、藤堯の右足が跳ね上がる。鋭すぎる前蹴りは的確に鳩尾を貫いた。

悶絶し嘔吐しようとする少年の顎先を、すかさず左ひざがカチ上げる。

あろうことかペンダントを持って逃げ出そうとするもう一人の背中へ向けて、藤堯の腕が翻った。

フリスビーのように飛んだお盆は狙い違わず後頭部を直撃。

転倒する少年の腕を背中から捻りあげ、腹とアゴを押さええて悶絶しているもう一人のところまで引つ張ってくる。

折よく、目のエレベーターが開いた。

エレベーターの中には黒服サングラスの男たち。二課所属の本日の護衛部隊がおつとり刀で駆けつけてきたらしい。

そんな彼らのいるエレベーター内に、ガキどもを放り込む。

黒服たちと軽くアイコンタクトをし、エレベーターの扉は閉まる。

あとは連中が上手く片付けてくれるだろう。

「さて、と」

藤堯は取り返したペンダントを切歌に差し出す。

「災難だったね。でも、大切なものなんだから、二度と取られちゃだめだよっ。」

適合者も、ペンダントを取り上げられれば只の人か。

そんなことを思いながら切歌を見れば、ただただ彼女は茫然としていた。

「…藤堯さんってこんなに強いんですかッ!？」

藤堯は苦笑する。

この程度の護身術など、S・O・N・G・職員としては必須能力だ。

まあ、確かに身近にいるのが超人揃いで、自分は目立たないかも知れないけれど。

「強さでいえば、とても君たちには敵わないよ」

ノイズや錬金術師と戦う彼女たちと比べればどうということはない。

一般人のチンピラをぶちのめしたところで、なんの自慢にもならないだろう。むしろ大人として少しやりすぎた感もある。

「あちや、クラゲソフトクリーム駄目になっちゃったね。もう一度買ってこようか？」

床に散らばったコーヒーと一緒に拭きながら言う。

「う、うん、結構デス。もうお腹いっぱいデス……」

遠慮するようにそういつた瞬間、切歌の腹が派手な音を立てた。

赤面する切歌に、藤堯は笑う。

「そうだね、そろそろいい時間だ。お昼にしよう」

車に戻り、後部座席からバスケットを取り出すと、切歌が意外そうな顔をする。

どこかへ食べに連れていってもらえると考えていたなら、少し気の毒だなと藤堯は思う。

もつとも日曜の真昼間となれば、どこの飲食店も混雑している。

ならば予約すればと言われるかも知れないが、混みあった店内で食事をするのは藤堯の趣味ではなかった。

だから、切歌に申し訳ないと思いつつ、藤堯は公園の外れにある東屋のような一角に彼女を誘う。

以前も来たことがあるから知っていたが、そこは意外と穴場で、日曜なのに人影も少ない。

そのベンチにシートを広げ、バスケットを開く。

「ほあああッ!？」

切歌の感嘆の声は、バスケットの中身を目の当たりにしたから。カリカリのクロワッサンで作られたオープンサンドに、チキンのチューリップ揚げ。

丸いカップに盛られたのは桃と生ハムのサラダで、野菜スティックには三種ものディップソースが添えられていた。

「も、もしかして、藤堯さんが作ったんデスか？」

「ほんの手遊びみたいなんだけどね」

肯定すると、心底驚いた顔で見られた。

懐かしい。昔付き合った女性も、みんなそんな顔してたっけ。

「い、いただきますデス」

「はい、おあがりなさい」

「!! お、美味しいデスッ!」

目を丸くしてパクつく切歌。

モリモリと食べながら、思い出したように顔を上げて言う。

「調の料理と比べても、すっごく美味しいデス!」

…いちいち面白い子だな、この子は。

もつとも褒められて悪い気はしないけれど。

ふむ、今日の出来はなかなかだ。

自分もサンドイッチを摘みみながら、藤堯は自画自賛。

その間も切歌は遠慮なく食べ続け、バスケットの中身はあつという間に殲滅。

「ぶはー、サイコーに美味しかったデス♪」

上機嫌に感想を漏らした切歌だったが、たちまちその顔は真っ赤に染まる。

どうも藤堯より多量に食べてしまったことに、今さら気づいてしまったらしい。

…本当にいちいち面白い子だ。

藤堯はそんな感想を抱きつつ、バスケットの奥底からタッパーを取り出す。



「デザートもあるんだけど、どう?」

「で、でも…」

「生憎と、オレは甘いものは苦手だね」

「…それじゃ、ひよっとして藤堯さんは、アタシのためだけに作ってき  
てくれたんデスか?」

「デートだもの。そんなの当たり前でしょ?」

まあ、初デートで自分の手作り弁当を食べさせる男なんていないだ  
ろうけどな。

藤堯はそんなことを思いながらタッパを切歌に向けて差し出し  
た。

一方、切歌は顔を伏せてタッパを受け取ると、

「…ありがたく、いただきますデス…」

小声でぼそぼそつとと言うと蓋を開けた。

「…ッ…」

顔は伏せられたままだが、息を飲んだのは分かる。

タッパの中身一面は、茶褐色のココアパウダー。

その下は、芳醇でまろやかな甘みのチーズクリームが広がる。

スプーンで一口頬張り、切歌は顔を上げる。目はキラキラと輝いて  
いる。

もぐもぐゴクンと咀嚼すると、頬を紅潮させたまま叫ぶように言  
う。

「こ、この美味しいものはなんていうんデスカッ!」

「これはティラミスってんだけど…食べたことない?」

「こんな美味しいもの食べたの、生まれて初めてデース!」

そんな大袈裟な苦笑する藤堯の前で、切歌は興奮状態。

わっしわっしとスプーンを頬張る様子は一生懸命という言葉は相  
応しい。

まあ、それだけ喜んでもらえりや冥利につきるけど。

にしても、ちよつとばかりオレンジキュラソーが足りなかったかな  
?

漂ってくる甘い匂いにそう分析していると、ほっぺたに遠慮なくマ

スカルポーネチーズをつけたまま切歌は呟いた。

「藤堯さんとでーとすると、毎回こんな美味しいものが食べられるんデスカ…」

「おいおい」

藤堯の突っ込みはまるで無視して、切歌は真剣な眼差しを向けてくる。

「なのに、どうして藤堯さんに彼女さんはいないんデス？」

精神的にも、肉体的にも、半歩ほどぐらつく藤堯。

それでもどうにか平静を装い、切歌に問いかける。

「ははは、切歌ちゃん、そんなこと、誰から聞いたのかな？」

「友里サンが言っていたデス」

…友里おおおツツ！ オレの個人情報ハダダ漏れすんのかよツ！

「まあ、女性ってのはね、自分より女子力の高い男は敬遠するもんなのよ」

同僚への怒りをおくびにも出さず、藤堯はそう答える。

もつともこれは事実の半分ほどだ。

原因の大半は、藤堯の持つ分析癖による。

かつて付き合った女性の中で結婚を考えた人もいた。

しかし、深く付き合い合えば付き合うほど、分析してしまう。

その人の嗜好や性格、その変遷の可能性。

将来的な収入と支出、それに伴う環境の変化。

いずれも己の中で完結させたもので、決して相手に伝えたことはない。

だが、女性とはそういう視線には非常に敏感な生き物のようだ。

貴方はなんでも見透かそうとするのね。

そんな風に別れを告げられたのはまだいい方で、自然消滅したことも多い。

「そうなんデスカ…？」

不思議そうな顔で見ってくる切歌。

「そうなんですよ」

ポットの紅茶を口に含み藤堯。

「でも、友里サンとかお似合いだと思っくん德斯けど」  
「ぶおっ!?!」

藤堯は咽る。

友里あおいは同僚で、確かに一番身近な女性ではある。

詳しくは聞いてないが、本部の女性陣の間ではそんな噂もあるようだ。

「残念だけどね、オレは職場恋愛はしない主義なの」

このポリシーに由来はない。ただ何となく嫌なだけだ。

他に、例の分析癖を働かせれば、仮に友里と結婚しても尻に敷かれる未来しか想定できなかったこともあるか。

自身のそんなクセを、時折疎ましく思う。

そもそも今日の切歌のデートを比較的あっさり承諾したのも、司令の言い出したことにいくら逆らっても無駄だと分析した結果である。そういう意味においては、オレは諦めの良い男なのかも知れないな、ははは。

「…ふーん德斯」

「まあ、切歌ちゃんもそのうち分かるよ」

「そのうちって、どれくらい德斯か?」

思いのほか食い下がってくる。

「そりゃあ…好きな男の子が出来たくらい、かな?」

藤堯の見たところ、暁切歌と月読調は、立花響と小日向未来のような関係にある。

同性同士と眉を顰めるような潔癖さは持っていないが、そんな彼女たちも異性との付き合いは、また違う実感があるのではないか。

「それじゃあ…」

切歌が少しだけ躊躇してから、

「アタシ、藤堯さんのことを好きになっってみていい德斯か…?」

その訴えに、藤堯はあんぐりと口を開けて固まってしまった。

不覚にもハングアップして、ようやく再起動。

まず頭に浮かんだことに、今度はお茶を含んでなくて良かったとしみじみ思う。

間違はなく咽てしまったことだろう。

「あ、あのね、切歌ちゃん。人は好きになるもんで、好きになってみるもんじゃないと思うよ?」

論すように言い返したのは一般論にしては少し弱いかも知れない。おまけにちと冷たいか?

「でも、アタシは男の人、好きになったことないデスし…」

切歌の呟きは、彼女の過去を知れば至極納得できるものだ。

レセプターCHILDレンとして、マリア姉妹に月読調と肩を寄せ合い生きてきた。

フロンティア事変を経て二課に参入後、高校に通うようにこそなったがリディアンは女学院。

FIS時代に唯一接点があつた男性と言えば、あのウエル博士だけというのも色々と救われない。

「だったら、調ちゃんを好きになったときのことは憶えている?」

「わからないデス。調のことは気が付いたら好きになっていたから」

「じゃあ、男の子に対してもそうじゃないかな。気づけが好きになっていると思うよ、きつと」

我ながら無責任というか力づくで収めようとしている気がしないでもない。

だが、同時にこれが限界でもあつた。

ハイティーンの恋愛感にこの歳で共鳴するのは、なかなか辛いものがある。

「そういうものなんデスか…」

「そういうものです」

言い置いて、そそくさと藤堯はバスケットの片付けに入る。

時刻もちょうど昼下がり。

初デートの終わりにはちょうど良いかな? 調に対するアリバイ作りも成立しただろうし。

そんな考えはどうやら態度に出ていたようだ。

「藤堯さん」

切歌が継るような目で見て来たので、藤堯は次の言葉を予想する。

『今日はこれで終わりデスか?』

「次はどこに連れていってくれるデスか?」

一転して切歌が微笑んだので、藤堯は驚いてしまう。

予想と違う台詞は元より、彼女の小首を傾げる様子は、いきなり大人びて見えたからだ。

全く、この年頃の女の子はよく分からないな。不思議だ。

思わず、はい。と頷いてしまったオレも。

取りあえず、考えてきていたデートプランは弾切れだったので、適当にショッピング街をぶらつくことにする。

「普段は藤堯さんは何をして遊んでいるんデスか?」

「大人はね、あんまりおおっぴらに遊ばないの」

そんなことを言いつつ連れてきたのはバッティングセンター。

「ここは企業戦士たちのストレス解放の場なんだ」

世の中のサラリーマンの三割くらいからは支持を得られそうな自説を披露する。

野球のルールも良く知らない切歌にヘルメットを被せ、バッター席へと放り込む。

ろくにバットの握り方すらわからず、次々と飛んでくる白球に驚いていた彼女だったが、そこはイガリマの装者。

間もなく大根切りでぶった斬るように球を打ち返し始める。

「なかなか楽しかったデスね〜」

上機嫌の切歌と入れ替わりに藤堯もバッターボックスへと立つ。

結果として、全ての球を打ち返し、一つはホームランゾーンへと命中。鳴り響くファンファーレ。

「今日はまあまあだな」

眩きつつ、ホームラン賞の景品であるジュースを切歌に渡せば、軽く尊敬の目で見られてしまった。

もつとも藤堯にしてみれば、球を打ち返すたびに切歌が大はしやぎで応援してくれたのが目立ってしまって、周囲の好奇の目が痛い。

逃げるようにバッティングセンターを後にする。

「次はどんな大人の遊び場デスか？」

「そうだなあ。あとはカラオケくらいかな？」

「知ってますデス！ クリス先輩たちと行ったことあるデス！」

そうは答えはしたものの、藤堯の趣味は一人カラオケである。

他人の歌を聞くのはともかく、自分の歌は聞かれたくない。

しかし、どうも切歌は次はカラオケに連れていつてくれるのを期待しているようだ。

困った藤堯は、さてどうしようと視線を彷徨わせ、階層式のシヨツピングモールの吹き抜けから階下を見下ろす。

とあるものがあることに気づき、切歌の手を引いた。

「いいものがあつた。行こう」

「…いいものってこれデスか？」

一階の広場に設置されたグラランドピアノ。誰でもご自由に弾いて下さいというピアノは、全国各地に結構設置されている。

「でも、アタシはピアノは弾けないデスよ」

「いいからいいから」

切歌を椅子の端へ寄せて座らせる。

「この黒鍵と白鍵だけを、リズムにのって押して」

「は、はいデス…」

切歌が弾く、単調な二音が周囲に響き始める。これだけでは、さすがに注意を払う人はいない。

「よしよし」

切歌の隣に腰を降ろし、藤堯は指をほきほきと鳴らした。不安げに見てくる切歌を横に、一気呵成に鍵盤に指を走らせる。

「ふあっ!？」

切歌が驚くのも構わず、藤堯の指は止まらない。奏で上げられる音色に、周囲の視線がぐっと集まってくるのを感じる。

弾いているのはショパンの『木枯らし』。クラシックの名曲だ。

これも藤堯の特技の一つ。

趣味で始めたのか、仕事上の流れで出来るようになったのか、あまり良く覚えていない。

ただ、女の子を喜ばせるには結構役に立ったことを思い出す。

いつの間にか切歌は手を止めて見入っていた。

どっちかという喜びより、ひたすら驚いている様子。

「切歌ちゃん」

木枯らしを弾き終えて、藤堯は声をかける。

「は、はいデス!？」

夢から覚めたように切歌は背筋を伸ばした。

続けて藤堯が前奏を始めたのはクラシックではない。

見物に集まっていた若者たちから歓声が上がる。

「これは…」

思わず立ち上がる切歌に、藤堯は言った。

「君は唄うんだ」

藤堯が奏でる曲。

かつてのツヴァイウイングの名曲であり遺曲でもある『逆光のフリーユゲル』。

「…はいデスッ!」

躊躇わず切歌は唄った。

綺麗な歌声だと思う。

それを証明するかのように、場のボルテージは一気に上がる。

装者Ⅱシンガーというわけではないが、歌手なみの歌唱力を持つのも事実だ。

買い物客は足を止め、次々と新たな観客がやってくる。飛んでくるリクエストに藤堯が曲を変えれば、追隨して切歌が見事に唄い上げる。

結局、そんなミニコンサートは、一時間以上続けられた。

「はあく、楽しかったデス♪」

帰りの車の助手席で、切歌は満足そうにそう言った。

「そりや良かった。でも疲れてないかい？」

「いっつも訓練で鍛えてるデスから」

対して藤堯の指はボロボロだった。

若いって良いよなあ、としみじみ思う。

「…藤堯さん、ありがとうございますございましたデス」

「なんだい、急に改まって」

「本当に、今日は楽しかったんデスよ？」

「そりや良かったよ」

「だから、良かったら、また誘って…」

「……………」

その声に、前を見たまま藤堯は口をへの字にしてしまう。

今日は楽しくなかったと言えば嘘になる。

でも、こんなのは一般のデートと言えるのだろうか？

やはりもつと年齢の近い子と一緒に出掛けた方がいいのでは。

いやいやしかし、今回のデートが決して失敗だったというわけでもなくて…。

「…あの、切歌ちゃん？」

考えがまとまらず、何を言うかすら頭になく、藤堯はそう声をかけていた。

返事はない。

見れば、切歌はすいすいよすいよと寝息を立てていた。



赤信号で車を止めてから、はあくど溜息をついてハンドルにもたれる藤堯。

「チラリと助手席を眺めてから思う。

「まったく、電池切れたみたいにスツと寝るなんてやっぱり子供だな。にしても、こんな無防備な寝顔を晒すもんじゃないよ、全く…。」

「ほどなく車は切歌と調が共同で暮らすマンションへと到着。

「切歌の眠りは深く、揺すっても起きないため、おんぶして車から担ぎ出す。」

「手に着換えの入った紙袋を持って歩きだすと、きゅつと肩に回った手で抱きしめられた。」

「…藤堯さん…」

「その囁き声は、予期せぬほど大人っぽく響く。」

「柄にもなく緊張して立ち尽くす藤堯の耳に続きの音が。」

「…えへっ、えへ…。」

「もう食べられないデス…。」

「…なんだよ、緊張して損したぜ。がつくりと肩の力を抜き——あれ？　なんでオレ緊張なんかしているの？　なんて思いながら、マンションのドアのチャイムを押す。」

「驚いた顔の月読調が出迎えてくれた。」

「そう、切ちゃんのデートの相手って藤堯さんだったの」

「まあ、なんていうか成り行きでね」

「切歌はまだ起きない。」

「なので調に靴を脱がせてもらったあと、リビングへ運びソファアへと寝かせた。」

「それじゃあ、オレはこれで」

「そこで思い立ち、藤堯は釘を刺しておくことにする。」

「あ、それと、オレが切歌ちゃんとデートしたつてことはナイショにしてくれないかな？　立花さんたちに知られたりすると、説明するのがややこしいから」

「くすりと調は笑って、

「はい、分かりました。切ちゃんを送ってくれて、お疲れさまでした」

玄関で靴は履き、ふと藤堯は振り返って言った。

「実はさ、今日のデートの最中でも、ずっと切歌ちゃんを君のことを気にかけてたぜ？」

「え……？」

「なんで喧嘩しているかはわかんないけどさ、仲直りしてくれると嬉しいな」

今日のオレに免じて、なんて付けるのは蛇足だろう。

調は少し考え込むような顔をしたあと、頷いた。

「それじゃ」

軽く手を振ってマンションを出る。

木立の向こうにはユラユラと揺れる夕日。

ぴゅーつと冷たい風が一陣。

くしやみをして藤堯を思わず首を竦めた。

甘い少女の匂いと、ココアパウダーが仄かに香る。

後日談というか蛇足的な話として、翌日出勤した藤堯は、司令直々に良くやったと褒められた。

続いて、あんな場所で歌を唄わせて装者に注目を集めさせるヤツがあるか、と叱責も喰らった。

先日の筋肉痛に立つのも辛く、大人しく藤堯は称賛と叱責を受け入れた。

ピアノは結構足の筋肉も酷使するのである。

どうにか自席に帰りつき、溜まっている仕事の整理をしていると、友里がやってくる。

「昨日はお疲れ様。はい、温かいもの」

仏頂面でコーヒーを受け取り、そういえばオレの個人情報勝手に勝手に売ったなと文句の一つも言おうと思った矢先、どやどやと装者たちが

発令所へと雪崩こんできた。

「おい、みんな今日は学校は？」

弦十郎が尋ねれば、

「やだな、師匠、今日は開校記念日でお休みですよ」

ケラケラと響が答えている。

：だったら、何も日曜日にデートすることなかったじゃん。今日で良かったじゃん！

自席で一人悶絶する藤堯。

だが、もうオレの役目は終わった。無関係だ。

そう心に決め、モニターに向かい合っていると、例のデート相手がやってきた。

「：藤堯さん」

「ああ、おはよう切歌ちゃん」

「その、昨日はありがとうございました。なんか途中で寝ちゃったみたいで…」

「うん、大丈夫気にしてないよ」

一刻も早く会話を打ち切りたい藤堯に反し、案の定、カタパルトで勢いをつけたが如く、響が食いついてきた。

「なにになに？ 二人とも昨日、なにかあったの？」

「え…？」

戸惑う切歌に、そっぴや切歌自身には口止めをしていなかったことを思い出す。

頼みの綱は調だ。彼女の方から口止めをしていてくれれば…！

「：ううん。別に何も無い、デスよ？」

答える切歌。GJ!と調に親指を立てる藤堯。頷く調。

「そっぴなの？ 怪しいなあ？」

なお訝しげに見てくる響。

「ねえ、本当に何も無いの？ そっぴなの調ちゃん」

「ええ、何もありませんでした」

ゴホンと大仰そうに咳払いをして、月読調はこう続けた。  
「切ちゃんが藤堯さんに寝取られたくらいしか」



## 第2話

藤堯朔也の起床は規則正しい。

職務に従事したり、徹夜明けでさえなければ、どんな時でもきっかり6時に目を覚ます。

同衾したあとでさえその習慣は抜けず、彼女に呆れられたっけ。もつとも、あの頃はまだ官舎住まいではなかったけれど。

窓を開け、新鮮な空気を室内へ入れるのも、いつもの習慣だ。

ベランダで日光を浴びて自律神経を整える。

軽い頭痛を覚えたのは、夕べ久しぶりに司令に飲みに連れて行かれたから。

告白してしまえば、藤堯はそんなに酒は強くはない。

なのにペースを守れなかったのは、一緒に行った同僚のせいだ。

：まったく、あの蟒蛇うわばみコンビめ。

風鳴弦十郎が豪傑と呼ぶにふさわしい呑みっぷりを誇るのと言うまでもないが、彼の人より酒豪と思われるのが、友里あおいその人である。

乾杯からストレートのウイスキーな時点でどうかしているが、テキーラをがっばがっばと呑みまくった挙句、合コンに行っても誰もお持ち帰りしてくれない、なんて愚痴られても知らんがな。

まだ酒臭い呼気を、深呼吸して新鮮な空気で浄化する。

それから藤堯は自室を振り返る。

1LDKの官舎は広々とした間取りだ。一人暮らしにしては贅沢と思われるも知れないが、仮にも国際公務員だ。それなりの地位に相応しい待遇だと藤堯は自負している。

「さて、と」

まずは寢室の六畳間へ。ベッドのシーツとタオルケット、枕カバーを交換。

汚れたものはネットに入れて洗濯機のスイッチオン。

入れ替わりで取り出した、既に終わった洗濯物を手際よくベランダへ干していく。

それから寢室、リビング、キッチンでサイクロン掃除機をかけて行けば、ちょうどセットしたコーヒーマーカーから香ばしい匂いが漂ってくる。

ゴミを捨て、それからシャワーを浴びる。朝から髭を剃るのも忘れない。

ドライヤーで髪を乾かし、ようやく人心地がついた。

リビングでTVを点け、コーヒーカーップ片手にもう片方の手でタブレットを操る。

ニュース番組を耳で聞きながら、ネットのニュースサイトに目を通していく。

合間にメールなどのチェック、返信も行っている。

この手のマルチタスク作業はお手のものだ。

一通り終えれば、時刻はちょうど7時半。

うん、いつも通りだ。

いわばルーティンともなっている一連の朝の流れは、己の性分と自覚していても苦笑するしかない。新しい情報が飛び込んでくる前に、既存の情報を処理して万全の態勢を整えないと落ち着かないのだから仕方ない。

もつともその日課が果たされれば、あとは充足した自由な時間を堪能できる。

…ああ、いい天気だ。今日の休日は何をしよう？

藤堯がベランダから望める晴れ渡った青空に目を細めたときだった。

涼やかなチャイムの音が響く。

「…誰だ、こんな朝っぱらから」

正直、嫌な予感しかしなかった。

かつて弦十郎がジャージ姿で来訪し、いっちょジョギングへ行かないかッ！ と強引に誘われ、ほぼハーフマラソンを走破させられた苦い記憶が蘇る。

だからといって無視するのも後が怖い。

まあ、官舎の職員の誰かが用事があったてきたのだろう。

多分に希望的観測を込めて藤堯は来訪者の姿の映ったモニターを見た。

そこに映し出された光景は、軽々と藤堯の予想を超えている。

S・O・N・G・の誇る最年長装者にして世界的なスーパースター。

暁切歌、月読調両名を従え、サングラスをかけたマリア・カデンツァヴァ・イヴがそこにいた。

「おはよう。悪いけれど、家に上げてもらえないかしら？」

藤堯は、わけても装者の中でマリアが苦手である。

彼女の容色や性格が、という話ではない。

スポットライトを浴びて、万雷の拍手を受ける。

マリアという歌手の生き様がまぶしすぎるのだ。

藤堯自身は、日陰に憩う雪割草の如く、ひっそりと生きるのをモットーとしている。

単に自分と真逆の属性を持つ彼女に対し、コンプレックスを抱いているだけとの分析も出来るけれど。

そんな彼女がこんなに時間に、なぜ？

「済まないわね、朝早くから」

取りあえず玄関を開ければ、たちまちマリアはヒールを脱いで室内へ上り込んでくる。

藤堯が止める間もなく、そのままスケズケとリビングへと侵入。

「ちよ、ちよっと!」

後を追おうとする藤堯のシャツの裾をくいくいと引っ張るものがあった。

心底申し訳なさそうな顔をした切歌だった。

「ごめんなさいデス、藤堯さん…」

「切歌ちゃん、これは一体どういうわけ?」

「それは…」

問い質そうとするも、廊下の奥からマリアの声。

「来なさい、切歌!」

「は、はいデスッ!」

弾かれたように急ぐ切歌に、続く藤堯。

行った先には、ドアノブに手をかけるマリアがいる。

「あ、そこはオレの寝室…!」

「いい、切歌? 男の一人暮らしの寝床なんて、大抵むさくて散らかっているものなのよッ!」

おい、オレのプライベートだぞ?!

藤堯の止める間もあらば、マリアは勢いよく扉を開け放つ。

「…あれ? 綺麗に整理整頓されてるデスよ?」

切歌の指摘に、マリアも部屋を覗き込んで驚愕の声を上げる。

「…バカなッ!! こんな清潔そうな男性の寝室なんて…ッ!!」

「失礼にもほどがあるでしょ、君たち!」

思わずそう怒鳴る藤堯の横で、ちよちよこと動く影がある。

「ならば…調ッ!」

そのマリアの声に、藤堯の横にしゃがみ込んだ調は、廊下の壁につーつと指を走らせた。

指先を見つめることしばし。

「…合格」

「小姑かッ!」

藤堯の突っ込みも全く意に介さず、マリアと調は視線を交わし合う。



そのまま二人は示し合わせたようにキッチンへと移動。テーブルにまったく同じタイミングで腰を降ろすと、マリアが言った。

「申し訳ないけれど、私たち、朝食がまだなの」

一瞬呆気にとられた藤堯だったが、ジト目で問い返す。

「もしかして、オレに朝食を作れと?」

早朝に勝手に押しかけて家探し同然に上り込んだあげく、朝飯まで食わせろというのか?

普通なら、これはブチ切れていい案件だ。

だがしかし、相手は仮にもシンフォギア装者である。

今はプライベートの時間であるにせよ、藤堯には役人根性が染みついていていた。

ここで迂闊に彼女らの機嫌を損ねたりすれば、組織の利益に背反することに繋がらないか?

プライドと職務への意識の間で、怒りの天秤が右往左往している。

だが結局その天秤は職務へと傾いたのは、ひとえに切歌の声があったからだろう。

「藤堯さんは、とくつても料理が上手なんデスよー!」

無垢な賞賛にプライドを少しだけくすぐられた藤堯は、無言でエプロンを身に着けた。

「…大したもの是用意できませんよ?」

背後に放った台詞は、嫌味の親戚ぐらいの声音になる。

「構わないわ。それに、単純に男の人が作る料理に興味もあるしね」

そんなの、世間一般の飲食店の調理師は大抵男だろうに。

内心ではそう返しつつ、藤堯は冷蔵庫を漁る。

スモークサーモンとチーズがあるからこれをサラダにして。

スープは冷凍したミックスベジタブルのコンソメでいいだろう。

となると、メインは…。

藤堯は、大きなタツパーを引っ張り出す。

くそ、これはとっておきのつもりだったんだけどな…。

タツパを開けると、甘い匂いが立ち昇る。

中身は卵と牛乳などを混ぜた漬け汁で、そこには丸一日漬け込んだパンが入っていた。

特製のフレンチトーストである。

まずは鍋に湯を沸かし、コンソメスープを作る。適当なところでミックスベジタブルを投入。

その間に、サーモンとチーズ、それにアボガドを賽の目状に切り、薄口のドレッシングで軽く混ぜ合わせた。

最後に、不承不承、テフロ加工を施したフライパンで黄色く染まったトーストを焼いて行く。

甘い香りがたちまちキッチンに満ちる。

スープはカップに。大きなプレートにはサラダとトーストを盛り付けて、藤堯はテーブルにつく三人の前に運んだ。ナイフとフォークも配り、最後は食卓の真ん中にギャニオンのメープルシロップを置く。

「さあ、どうぞ」

どうだ、とばかりに藤堯は胸を張って見せた。

「すつごく美味しそうデース！」

「…美味しそう」

目を輝かせる切歌に調と違い、ただ一人マリアは無言でフォークを掴んだ。

高級なメープルシロップをたっぷりを使い、ふつくと黄金色に輝くフレンチトーストを切り分け、口に運ぶ。

歓声を上げながら食べ続ける二人と対照的に、終始無言でマリアは全てを平らげた。

上品に口元をハンカチで拭い、それからようやく藤堯を見てニヤリと笑う。

「調ッ！」

「はい」

マリアの声に、調はどこに持っていたのか、丁寧に包装された大きな箱を床に置いた。

その箱の前に、マリアと調はきちんと正座。

続いて、面食らっている藤堯に、ずずいと箱を押しやったあと、深々と頭を下げてくる。

「切歌のことをどうかよろしく…」

「はあッ!？」

いや、何がどうなって？

藤堯が混乱している間に、

「行くわよ、調ッ」

「い、いや何なの、ねえッ!？」

マリアと調はさっさと家を出ていってしまふ。

残されたのは、食卓についたままフォークをくわえる切歌のみ。

ゴクンとフレンチトーストの最後の一切れを飲み込み、食卓の少女は照れくさそうに言った。

「あの、おかわりはないデスか？」

自分のぶんとおかわりのトーストを二枚焼けば、作り置きはなくなってしまう。

「オレ一人で楽しむつもりだったんだけどなあ…」

甘すぎるのは苦手だから、チーズやベーコンを添えて。

さっぱりとしたビネガー系のソースをかけるのもアリだ。

シャーベットを載せてもいいよなあ。

しかしその目論見も、綺麗さっぱりマリアらの胃袋へ消えてしまった。

更に最後の一枚を切歌へ出せば、さっそく頬張っている。

実に幸福そうにほっぺたを膨らませている彼女を見ると、糾弾するのもバカらしくなってきた。

「で？ 何がどうなって、いきなりやってきたわけ？」

自分のトーストを乱暴に食いちぎりながら、藤堯は問う。

「あー、それはデスねー」

切歌が名残惜しそうに最後のトーストの欠片を口へ放りこみながら語るによれば、この間デートをしたことがマリアに知られた

という。

「そしたらマリアが、『切歌を任せるに値するか、私が査定してあげるわッ!』って…」

「…それが不意打ちの訪問に繋がるってわけか」

「デスデス」

コクコクと頷く切歌に、藤堯は先ほどの出来事を反芻し分析している。

おそらくマリアは全く準備できないであろう早朝に訪問することにより、男のだらしなさを指摘。

それを持って、切歌に幻滅してもらおう作戦だったのではないか。

というか、普通どんな男だって、起き抜けに女性に寝床なんぞ見られたくないと思う。

しかし藤堯の習慣は万全。おまけに潔癖症のきらいもあるものだから、隙を見せずに済んだわけだ。

…あれ? もしかして、オレはマリアさんの御眼鏡に適ってしまっただけ?

すると、切歌ちゃんをよろしくって意味は…。

だらり、と藤堯の額から冷たい汗が滴る。

「デス?」

と小首を傾げる少女は、現在の自身の状況を理解しているのだろうか。

切歌と調にとって、マリアは姉であると同時に保護者のようなものだ。

そんな保護者<sup>マリリア</sup>から、よろしくとお墨付きをもらったうえに、身柄を預けられてしまった。

藤堯は緊張にグビリと喉を動かす。

これって、据え膳ってやつじゃあ…?

慌てて藤堯は首を振る。

いくらなんでも飛躍しすぎだ。

「あの、マリアさんたちはどこに行ったの?」

鼓動を落ち着かせ、そう訊ねると、切歌は頬を膨らませる。

「マリアと調はデートだそうデス！ この間、アタシだけデートしたのがズルいつて。その間、藤堯さんに遊んでもらいなさいいつて…」

その答えに、ホツと胸を撫で下ろす藤堯がいる。

良かった。単にオレに子守りを押し付けていっただけなんだろう、きつと。

…いや、ちよつと待て。全然良くないぞ。

「しかし、遊ぶつて…」

先ほど胸を撫で下ろした通り、男女間の言うところの『遊び』のニュアンスはないだろう。

そうなれば、やっぱり子守りじゃないの、これ？

「あ、藤堯さん！ ゲーム持つてきたデスよ！」

そういつて切歌が出してきたのは、アナログなゲームだった。

大きなシートに、等間隔に色のついた円が記されている。いわゆるツイスターゲームである。

「この間、響さんたちとやって、とーつても楽しかったんデスよ！」

そう力説する切歌だったが、

「二人きりでツイスターゲーム…？」

藤堯はあくまで訝しげな声。

「つていうか、切歌ちゃん、その格好でこのゲームをする気？」

今日の切歌は、いつも通りのミニスカート。

指摘されて、初めてそのことに気づいたらしく、切歌はスカートの裾を押さえて狼狽。

「ででで、デスう!？」

…やっぱりどこかピントがずれてる気がするんだよなこの子は。

いそいそとゲームを片付ける切歌を眺めて藤堯は思う。

「そういえば、マリアさんたちは何を持ってきたんだらう？」

少しだけ躊躇ったあと、藤堯は差し出された箱の包装を開けてみる。

中身は、抹茶とお茶道具のセットだった。

…独身の男に贈るものがこれつて。

この子にしてあの保護者あり。

おそらく家族全員がどこかズレているのだろう。

まあ、あの三人ともまともな家庭環境で育ったとは言いがたい。

きつと日本文化に関して付焼刃なのだ。そこは同情して斟酌すべきことだろう。

「しかし、ゲームかあ…」

藤堯はバリバリと頭を搔く。

適当に遊ばせておけなら、ゲーム機を与えておけるのが手っ取り早い。

この時点で、一緒に遊ぶという発想は藤堯にはない。

何が悲しくて、休日の真昼間に女子高生とTVゲームに興じなければならぬのだ。

せつかくの休みである。大人であるからして、もつと知的で有意義な時間を過ごさなければ。

とはいえ当初の予定としては、ジムにでも行って軽く汗を流し、ゆったりと昼食を食べながらオンデマンドの映画を見るつもりだった。

そんな予定を実行できなくもないが、さすがに切歌を部屋に一人置いていくわけにも行かない。

かといって同行させて、他の装者たちの目に触れたりすればエラいことになる。

「むむむ…」

「藤堯さん、藤堯さん」

ちよいちよいと肩を叩かれる。

「なに、切歌ちゃん…」

振り向けば、切歌が両手を差し出している。

そんな彼女の指の間には赤い糸糸。

「あやとりか…」

しかも吊り橋から田んぼへと移行する二人あやとり。

なんともアナログな。

にぱーと満面の笑みを浮かべる少女には逆らい難く、藤堯も赤い糸をからめ取る。

「おお、さすが藤堯さん！ 知ってるんデスね！」  
「まあね」

首肯しつつ、これはネットなどで得た知識ではない。  
実は藤堯は婆ちゃん子で、子供の頃はよく遊んでもらった記憶がある。

しかしそれが今、こんなところで役に立つとは。

「マリアも得意で『銀河』とか作れるんデスよ！」

「へえ〜…」

互いに糸を取り合い、取り返しつつ、そんな会話を交わす。

「…研究所では、これくらいしか遊び道具がなかったデスから…」

「……………」

しんみりと言う切歌に、少し涙を誘われそうになる。

二人あやとりは無限ループだ。さすがに10回以上繰り返して飽きた藤堯は、自前のゲーム機を作動。

藤堯も全くゲームをやらないわけではない。

一時期、オンラインゲームにハマりかけたことがあったが、アップデートのたびに劣化するインターフェースと、バグでおかしくなっているアイテムのドロップ率の修正ファイルを匿名で運営に送り付けてから、お見限りである。

そういう意味でも御蔵入りしていたゲーム機だが、切歌にとってはすこぶる新鮮だろう。

「藤堯さん、これはなんデス？」

ゲーム機に接続されたバイザー型のヘッドセットを見て、切歌が不思議そうに言う。

「うん、いわゆるVRってやつだよ」

「へえ、これが『う』あーちやるりありていー』というやつデスか…」

S. O. N. G. 本部にある装者用の訓練シミュレーターに比べたら子供だましもいとところだが、現行、一般家庭が持てる中では最高レベルの代物だ。

切歌をソファアに座らせ、ヘッドセットを装着させる。

「んじや、行くよ」

「はい。ドキドキデスッ！」

ゲームが起動する。テレビ画面と、ヘッドセットディスプレイには、同じ動画が展開されている。

「ふあああああッ!？」

切歌が悲鳴を上げた。

テレビ画面の視界は、高層ビルの先端で、本人はそこに立っているという設定。

触感はないものの、ビュービューと耳に吹き付けてくる風の音はバイノーラルで、臨場感はかなりある。

ふらふらと切歌は立ち上がって、途端にまた悲鳴を上げた。

テレビ画面の中は真つ逆さまにビルを落ちていくところ。

「ふ、ふ、藤堯さん！ これ、無茶苦茶おつかないデスよ!？」

思わずヘッドセットを外して怒鳴る切歌。

「ふふふ、なかなかバカにしたもんじゃないだろ?」

「はい、楽しいデスねッ！」

…意外と物怖じしない子なんだな、この子は。

「んじや、ソフトも何本もあるから、好きに遊んでみるといい」

「はいデス！」

嬉々としてゲーム機を弄り回す切歌を、ただ眺めていてもしようがない。

藤堯はタブレットを手に取り、ネットサーフィンや今後の仕事の段取り、買い物検討などをすることにする。

その合間にちらちら見れば、完全にヴァーチャル世界に埋没したらしい切歌が、盛大に悶絶している。

細い手足が跳ね上がる姿に、藤堯は思わず背を向けた。

…み、見てない！ 縞パンなんか見えてないッ!!

「ふわあく、楽しかったデス♪」



小一時間以上遊んでいただろうか。切歌がそんな声を上げる。

「そう、良かったね」

「調にも自慢しなきゃ」

「それは止めて」

聞きつけられて、またマリア同伴で訪問されたらたまったものじゃない。

なぜデス？ とばかりに小首を傾げていた切歌は、やがて微笑んだ。

「じゃあ、アタシと藤堯さんだけの秘密デスね！」

…なんだろう。特に彼女は意味深なことを言っているわけではないのだろうけど、何か変なフラグが立ちつつある気がする…。

「あ、そろそろお昼デスね！ どうりでお腹が空いてきたわけデ…」

言いかけて、切歌は赤面。

どうやら無意識でお昼の催促をしてしまったことに気づいた様子。

朝にあれほど食べたでしょ！ と苦言を呈するほど藤堯も狭量ではない。

「そんじゃ、ちよつと早いけど、お昼の準備をしようか？」

そういつて、藤堯はエプロンを着用。

「切歌ちゃんも手伝ってくれる？」

「はいデス！」

さつそく冷蔵庫を漁り、買い置きのカリームチーズとヨーグルトを引っ張り出す。

続いてもらったばかりの抹茶も出してくれば、切歌もさすがにギョツとした様子。

「…あの、藤堯さん。お昼ご飯デスよね…？」

「ん？ ああ、ごめんごめん。お昼は簡単なものにするから、一緒に三時のおやつでも作っちゃおうかと思って」

「おやつデスと!？」

納得いったことと期待に切歌は目を輝かす。

「それじゃあ悪いけど、このクツキーを潰しておいて」

ジップロックにクツキーを数枚放り込んで、麺棒と一緒に切歌に手

渡す。

「どれくらいデスか？」

「んー、ほとんど粉になるくらいまで」

「了解デースー！」

その合間に、クリームチーズとプレーンヨーグルト、生クリーム、そして抹茶も順次で混ぜ合わせていく。

次はゼラチンを湯煎して溶かして、と。

おっとその前に、土台をつくらなきゃ。

「切歌ちゃん、どう？」

「これくらいでいいデスか？」

「うん、上手だね」

褒めておいて、ジップロックの中の粉々になったクッキーを小鉢へ開けた。そこにレンジで温めたバターを投入して混ぜ合わせる。

「ごわごわになったそれを、型の底に敷き詰めればこれで土台は完成。」

「んじゃ、型に流し込むよ」

溶かしたゼラチンを混ぜたタネを注いで、冷蔵庫に仕舞う。

「あとは二時間くらい冷やせば出来上がりさ」

「凄いデースー！」

切歌が尊敬の眼差しで見ってくる。藤堯にしてみれば、思いきり簡略化した手抜きレシピに近いものだから、少し背中がむず痒い。

「さて、お昼は簡単にパスタにしますか」

乾燥パスタは、一人暮らしの必需品だと藤堯は頑なに信じている。値段も安く応用範囲も広いので食べ飽きない。

さすがに切歌がいるので、グルテンフリーではなく普通のパスタを使う。

作る内容は、これまた簡単にペペロンチーノ。ニンニクなしの鷹の爪も控えめで。

「んんん〜！ これもとっても美味しいデースー！」

上機嫌で切歌は全て平らげてくれた。

その健啖っぷりに、若いつていいなあなんて藤堯は思う。

「御馳走様デースー！」

切歌は食器を流しに運んだものの、その足でリビングのソファアーに横になる。

「切歌ちゃん、食べてすぐ横になると牛になるよ？」

行儀が悪いという意味も込めて、そう窘めてみたが、当人はたちまち寝息を立てている。

お昼寝かあ。優雅なこったね。

藤堯は溜息一つ。

まあ、寝ている間は構わなくてもいいから楽か。

さあて、俺も自分のことをしよう。

食器を洗って片付けて、改めてコーヒーを淹れなおす。

熱々のブラックコーヒーを啜りながら、図書館から借りてきた読みかけの本を開いた。

数ページほど読み進め、コーヒーを口に含もうと何気なく視線を巡らし、藤堯は思いきり吹きだす。

「う、うくん…」

寝ながら唸る切歌のスカートの裾はめくり上がり、下着が見えそうになっている。

藤堯は慌てて本を確認。良かった、染みはついていない。

フロアリングに吹き散らかしたコーヒーを拭きながら思う。なんて寝相が悪いんだこの子は。

これは、起こして注意した方がいいだろうか？ しかし、迂闊に起こそうと、もしくはスカートを直そうとして触った途端、目を覚まされて痴漢扱いされるのはよくあるパターンである。そもそも切歌自身はとても気持ち良さそうに寝ているし、彼女が寝ていれば変に振り回されずに済む。

うむむ…とそうやって唸っている間に、また切歌の太腿が動く。白く染み一つない太腿自体も眩しいが、付け根でちらちらと見える縞柄が妙に艶めかしくて困る。

これはあれか？ 雑誌のグラビアより、クラスメートのパンチラの方が興奮するというヤツか？

かつての思春期の記憶を思い起こしたとて、現在の藤堯は大人である。

もっと紳士的な解決策を——と煩悶するまでもなく、寝室にあった新品のタオルケットを持ってきてかけてやった。

こうしておけばいいだろう。風邪も引かないだろうし一石二鳥。さあて平常心平常心。本の続きを読むぞ。

そうして活字世界へと没入した藤堯だったが、ばさりという物音に現実へ引き戻される。

顔を上げれば、切歌にかけてあったタオルケットが床に落ちていた。

そして、更に捲り上がったスカートは、さすがに目の毒である。

慌てて藤堯は駆け寄り、タオルケットをかけ直してやった。

本当に寝相が悪いな、この子は…。

そして読書を再開。間もなくばさり。

また再開。ばさり。

再開。ばさり。

…さすがにわざとやってるんじゃないのこの子？

おまけに今の状況はほぼパンツ丸出しである。

丁寧にタオルケットをかけ直し、藤堯は考える。

いかん、このまま部屋にいれば、やっかいなことになりそうだ。

しかし、どうする？

結論として、藤堯の姿は浴室にあった。

要は一緒の部屋にいなければ、変に意識せずに済む。

どうせ風呂場の掃除もしなければならなかったのだから、ちょうど良い。

せつせとタイルを磨き、浴槽も洗う。

うん、綺麗になった。あとはシャワーで流して。その前にカランで手を洗おう…。

ところが、やはり色々調子が崩れていたらしい。シャワーとカランの切り替えを間違えていた藤堯は、そのまま頭上からもろにシャワーを浴びてしまう。

…くそ、ついでだ。

濡れた衣類を脱ぎ捨て、念入りにシャワーを浴びることにする。さっぱりして脱衣所で身体を拭き、はたと気づく。迂闊にも着換えを準備していなかった。

このままバスタオル一枚を腰に巻いて取りにいき、切歌とうっかり鉢合わせ。おまけにはらりとタオルははだけて…というのもよくあるパターンである。

しかし、用意周到の男藤堯は、脱衣所にバスローブを準備してあった。

着込んでしつかりと帯を締め、リビングへ行けば、今度はきちんとタオルケットをかぶったまま切歌は寝息を立てている。

頭をタオルで拭いながら、着換えは朝に干した洗濯ものも乾いているだろうとベランダへ足を向けたとき、リビングのドアが開け放たれた。

そこにはマリアが立っていた。

大きく瞳が見開かれ、バスローブ姿の藤堯と、ソファで眠る切歌を見比べる。

「…事後ツ!」

「ち、違う! オレの話聞いてくれツ!!」

「まったく、戻ってきて早々うっかり股間を蹴り潰してしまうところだったわよ」

食卓についたマリアが言う。

既に着換えた藤堯は、彼女の言葉を背中に聞いて肝を冷やしている。

バスローブ姿で股間を蹴られて死んだとあつては末代までの恥だ。

あ、股間を潰されたら子孫は作れないか、ははは。…洒落になんねえ。

そんな過激で無礼な彼女たちを持って成さなければならぬことでも、心中は複雑である。

今、藤堯は、昼食前に作った抹茶チーズケーキを慎重な手つきで切り分けている。

目を覚ました切歌に、「藤堯さんと一緒におやつを作ったんデスよ！」といわれてしまえば提供しないわけにはいかない。

「はい、どうぞ、おぜうさんがた」

精々嫌味を込めて、紅茶と一緒に出してやる。

「うわあ…」

切歌の反応は、いちいち新鮮である。

抹茶チーズケーキは、見た目的にもなかなか良い出来栄え。

上品にフォークでケーキの先端を切り分け、マリアは口へと運んだ。

続いて紅茶を一口。

パチンとマリアは指を鳴らす。

「シエフを呼んで！」

駆け寄っては面食らう藤堯だったが、すぐに合わせる。

「はいはい、いかがでしたしましたか？」

「とつても美味しかったわ」

「恐悦至極でございます」

「これ、とつておいて」

すると、調が自分の自重ほどもありそうな大きな買い物袋を渡してきた。

中身をみて藤堯は愕然とする。

独身男にはとても買えないような高級素材がいつぱいに詰まっていた。

なぜか入っているボトル入りの醤油も、一本数千円は下らない逸品だ。

「これをオレに…？」

少なからず感激する藤堯。

マリアはにっこりとして言った。

「これを使つて豪勢な料理を作つて頂戴」

「…は？」

「作るの？ それとも作れないの？」

「そ、そりゃ作れないわけじゃないけれど…」

勢いに押されているが、冷静になつてみればここまで一方的に好き勝手に使われる理由はない。

しかし。

「作らないなら、悪いけど調にキッチンを貸してあげて」

「…いや」

藤堯は毅然と顔を上げる。

「ここはオレの家のキッチンだ。料理の領分はオレのものだ」

高級素材に対する興味が、この理不尽な状況を上回つた。

マリアは艶然と笑う。

「それじゃあ、お任せしてもいいですか、シェフ？」

「承りました」

「あ、ついでにケーキもお願いね」

「何時間か、かかりますが」

「構わないわ。その間、ゆっくりと待たせてもらうから」

「…どうだ？」

ゼーゼーと肩で息をしながら藤堯。

「…凄いご馳走デース！」

テーブルに乗りきららないほどの料理の数々を前に、切歌は歓声を上げている。

「私の見込んだ通りだわ」

満足げに頷くマリア。

「イチゴのケーキまであるの…！」

調も目を輝かせている。

およそ三時間で、藤堯は全てのリクエストを完成させている。

普段のマルチタスク能力をフルに活用したわけだが、料理ってこんなに疲れるものなんだな…。

「それじゃあ、温かいうちに頂きましようか」

マリアと調が食卓に着く。

ぼーっとしていると藤堯も切歌に袖を引つ張られた。

「はい、藤堯さんも座ってくださいデス」

「え？ オレもいいの…？」

「当然でしょう。貴方が作ってくれたんだから」

マリアが当たり前のように言う。

いそいそと椅子に座れば不思議な感慨に襲われた。

こんな風で大勢で食卓を囲むのはいつ以来だろう？

つまりは家族の団欒か。

醤油味をベースに作った料理が多いのも、藤堯に少年時代の郷愁を思い起こさせた。

あの頃は、夕餉の匂いに胸をわくわくさせながら家まで走ったっけ。

その記憶が猛烈に腹を空かせてくる。

さあて食べるぞ。

箸を持って料理へ伸ばそうとする寸前、マリアたちが瞑目して手を握り合わせている。

「さあ、祈りましよう」

藤堯は慌てて箸を放り出す。見よう見まねで手を合わせ、同時に今まで思っていた疑問を尋ねずにはいられなかった。

「…あの、そもそも今日は何の日なの？」

贅を尽くした大御馳走に、おまけにケーキまで作らせられている。

だからといって、藤堯の知るかぎり、今日はこの三人の誰の誕生日というわけでもない。

「あれ？ 藤堯さんは知らないんデスか？」

切歌が不思議そうに言う。

藤堯は不安になる。



世界各地の様々なデータに精通しているつもりだが、まるで思い当たらない。

不完全なデータがあるだけで前提が変わってくる。分析癖のある身としては、それだけで落ち着かなくなるのだ。

この三人による、何かローカルな祝日でも存在するのだろうか？それとも何か宗教的な？

一人煩悶していると、さも当然のようにマリアが言った。

「何いってるの？ 今日ママの月命日じゃない」

「本当に何なの君たちは!?!」

### 第3話

「ん〜♪ 藤堯さんの作るケーキはやっぱり美味しいデス〜」  
フォークをくわえて満面の笑みを浮かべる暁切歌に、藤堯の頬も綻ぶ。

「ははは、そんなに褒めても何も出ないよ」

「嘘じゃないデスよ!? 調の作ったものよりも美味しいデス!」

ああ、やっぱりあくまで比較対象は調ちゃんってわけね。

しかし何度同じことを言われただろう？

ひっそりと苦笑していると、切歌は慌てて言い添えてきた。

「あ、でも、いま言ったことは調には内緒でお願いしますデス」

「どうして?」

問い返す藤堯は、やや意地が悪い。

切歌は真剣な表情で、

「調が知ったら『だったら藤堯さん家の子になつたらいいの』なんて言うに決まっているデス!」

「わかった、絶対に言わない。約束する」

藤堯も真剣な顔で頷く。

「それはともかく、ケーキも作りすぎたから、お土産に持って帰ってあげてくれよ」

「ありがとーデース!」

切歌の感謝の声を背に、藤堯は残ったケーキを箱詰めにする。ご丁寧にリボンで軽くラッピング。

「よし、出来た。我ながら手際がいいね……つてちーがーうー!!」

叫ぶ藤堯。

「どうしたんデスカ?」

「い、いや? なんでもないよ?」

心配そうな声にそう応じておいて、その実、藤堯は頭を抱えている。今や切歌にすっかり懐かれてしまっていた。

そんな彼女は、藤堯の休みの日によく遊びに来る。代休日の今日など、リディアンから直行して来たらしく制服姿だ。

普通、独身男の家に年頃の娘が入り浸るなど不埒なことだが、そこは保護者の了解を得ている。

だからこそ藤堯は全身全霊で風鳴弦十郎司令に訴えていた。

最近、切歌がしょっちゅう家に遊びに来るようになったが、やはり外聞が良くない。

いくら保護者の了承を得ているとは、相手は未成年の少女なのだから。

常識的な面を強調し、最後にもっとも力を込めて訴える。

それに、オレのプライベートな時間の確保もなんとかしてください…。

ふうむ、としばし考えこんだ弦十郎だったが、翌日、新たな辞令が交付された。

藤堯朔也。

G 回天式特機装束装着者情操監督官に命ずる。

「略称でG. S. S. I だ。格好いいだろう?」

がははと豪快に笑いながら辞令書を渡してくる弦十郎に、さすがの藤堯も噛みついた。

「こんな役職、適当にでっち上げたもんでしょうがッ!」

「あら? 違うわよ。わたしもそうだし」

すかさず言ってくる友里あおいの言を、疑わしげな眼差しで見てもったのはどうしようもない。

「…本当かよ?」

「本当よ。今まで装者6人分だったけど、切歌ちゃんを引き受けてく

れば一人分は楽になつて助かるわ〜」

けろりとした顔でいう友里に、弦十郎も大きく頷く。

「確かに友里には負担を強いてきたな。藤堯ッ、なんならセットで調くんも担当してみるかッ？」

「それは遠慮しますッ！」

「まあ、これで切歌くんがおまえの家に出入りしたとて、とやかく言う外野はいまい。良かったな」

豪気に締めくくる弦十郎に、藤堯はもう何も言えなかった。

それでも帰りのロッカールームで、ロッカーに八つ当たり。

：違う、そうじゃないッ！

オレは、オレのプライベートの確保が一番大切なところで…！

しかし、もはや覆水盆に返らず。

組織内で一度発令された辞令はそう簡単に撤回されるものではない。

そうだ。逆に考えるんだ。

これで確かに未成年略取うんぬんとかで警察などに踏み込まれることもないだろう。

いわば国際的なお墨つきを得たに等しいのだから。

わーい、これで公明正大にリアル女子高生と一緒にいられるぞ、嬉しー…：くねーよ、おい！

「…藤堯さん？」

気づけば、すぐ傍で切歌が心配そうにこちらを見上げていた。

「大丈夫デスか？」

「ん、ああ、大丈夫。ほら、これお土産」

案じる声の切歌に、ケーキの入った小箱を渡す。

「うほほ〜いデス♪」

小箱を捧げ持ち文字通り小躍りする切歌。

彼女に見えないように藤堯はそつと溜息をつく。

切歌がやってくるたび、こうやってお菓子を振る舞い、時には宿題も教えて、映画を見たり、ゲームをしたり。

最近ようやく理解してきたが、これって学童保育ってやつじゃない

の？

無論学童とは小学生を指すことは知っているが、切歌の精神年齢は見た目よりだいぶ幼いと分析していた。

その視点からリアルJKというパワーワードを除外してみれば、何だか子犬みみたいな印象になってくる。

藤堯の休みを把握し、律儀にやってくる彼女を忠犬と称するのは失礼かどうか微妙なところだ。

ただ、構って構ってと全力全開で来られても、こっちは休日なのに、と疲弊してしまう自分がいるわけで。

「あれ？ そういえば調ちゃんは？」

今さらながら藤堯は問うた。

切歌は調とセットで来訪することも多い。

そうなるとおやつのは量は二倍必要になるが、二人で色々としているので構わなくてよいので楽だ。

「調は翼さんとお買いものだそうデス！」

途端に不機嫌そうに切歌は唇を尖らせている。

「へえ、珍しい組み合わせだね」

「聞いて下さい藤堯さん！ 『持たざる者の会』とかいって、アタシを入れてくれないんデスよ!？」

「はい？」

「一緒に下着を買いに行くんデスって！ どうしてアタシを仲間外れにするデスカね!？」

「さあ、なんでだろうね」

そもそも女性の下着うんぬんの話をも男に振られても困る。

話題に深入りするのを避ける意味も込めて、藤堯はエプロンを身に着けた。

「さあて、ぼちぼちオレは夕食の仕込みをしなくちゃ…」

——あ、それじゃそろそろお暇しますデス！

そんな返事を期待したのだけれど、切歌は黙ってじーっとこちらを見ってくる。

その無垢な瞳に、藤堯は白旗を上げた。

本当に腹を空かせた子犬みたいだな。

そんなコメントは飲みこんで、あくまで笑顔笑顔。

「…良かったら、食べていく?」

「はいデス!」

元気よく返事をし、いそいそと切歌はカバンからエプロンを取り出してきた。

「どうデスか? 学校の調理実習で使っているエプロンデスよ!」

どうということのない無地のエプロンの胸のところに、緑のバッテンのアツプリケ。

「はい、可愛い可愛い」

「んもー、藤堯さんってばちゃんとして見て下さいデス! この胸のところの刺繍は、調と二人で針仕事で…」

故意か無意識か、胸をむつちりと持ち上げる仕草をしてくる彼女を注視出来るわけもなく。

包丁で野菜を切ることに集中するフリをして誤魔化する。

頬を膨らませていた切歌だったが、やがて何かを思いついたように手を叩いた。

「いつでもアタシも手伝えるように、このエプロンを藤堯さんの家に置いていっていいデスか?」

「…それじゃあ学校で使うとき困るでしょ?」

「ああ、そっかーデス」

夕食はラタトゥイユとニース風サラダ。どちらも野菜たっぷり健康にも良い。

バケツトを添えて、切歌と二人食卓に着く。

「いただきますデス!」

「はい、おあがりなさい」

「んん、お茄子がトロトロデース♪」

熱々のラタトウイユをバケットに載せて切歌が頬張っている。

藤堯もスプーンで一口運び、悪くない味だと思う。

もつとも、藤堯の好みとしてはもつとニンニクを効かせたい。そこに良く冷えた白ワインで…。

しかし切歌が来るようになってからは、アルコールは飲まなくなっていた。

未成年の前でアルコールが飲めるか、という大人としての常識もあつたが、変に酔ってしまうことを恐れている。

酔っぱらった結果、切歌に何かをするという可能性は自身で除外。

こんな子犬娘に情動を催すほど、藤堯は餓えていない。成熟した女性こそ好みである。

真の懸念は、酔って気の大きくなったときに変な約束や言質を取られてしまうことであつた。

最近ハマっているフレンチの面倒くさいメニューを作る約束や、どこかに遊びにつれていくなどと言質を取られてはたまつたものではない。

「…それに、そもそもが赤字なんだよな」

情報監督官とやらの役職手当で月々5000円は付加されている。

しかしそれも、こうやって料理やお菓子の材料費やら何やらで消えていた。

料理は趣味で手間暇はプライスレスとしても、藤堯の懐事情は決して温かくはないのである。

「ごちそうさまデス♪」

大満足の切歌と一緒に並んで後片付け。

料理自体はそれほど得意ではないという彼女だったが、後片付けや掃除はなかなかしつかりとしている。

施設時代の共同生活で身に着けたと聞けば、少しだけ同情出来る話だつた。

「やっし、とっ」

後片付けも終え、ココアを振る舞う。

藤堯は飲まないのだけれど、なぜかいまやココアは自宅に常備され

てしまっていた。

ふーふーとココアを冷まして飲みながら、切歌は何が楽しいのか笑顔が絶えない。

「…あのー、藤堯さん。一つお願いがあるんですけど」

不意に切歌が言ってきた。

来た来た。

こういうのがあるから迂闊に酔っぱらえないんだよな。

「なにかな？ オレは明日も仕事だから、あんまり時間がかかるのはダメだぜ？」

「時間は、まあ、それなりデスかね」

「ふむ？」

そういつて、切歌がまたもや鞆をぐそぐそしている。出してきたのはDVDだ。

「この映画と一緒に観てもらいたいんですけど」

藤堯は時計に視線を走らせた。時刻はまだ19時を回ったばかり。

よほどの大作映画とかでなければ、二時間はかからないはず。

プライベートな時間が削られることにちよつと不満を覚えたが、これも仕事のうちだと割り切ろう。

「分かった。一緒に観ようか」

「良かったデス！ 一人で見るのはちよつとイヤかなと思つて困つてたんデスよ」

「ところで、それは何の映画？」

「ホラー映画デス！ クリス先輩から、すつげえヤバイやつだつてお墨付きデスよ！」

「…え？」

藤堯は固まる。

さーつと自分でも血の気が引くのが分かった。

実は、ホラー映画は苦手である。否、ぶっちゃけていえば大嫌いだ。

それでも、大人であるからにして公言したことはない。

「…藤堯さん？」

「べべべべ別に構わないよっ」



「そうデスカー！」

脂汗を流す藤堯に気づいた様子もなく、切歌は勝手知ったるなんとやらで再生機にディスクを放り込んでいる。

続いてキッチンもリビングも電灯を消してきたのには、藤堯は小さく悲鳴を上げてしまった。

「き、切歌ちゃん、何を…?」

「こうやって真っ暗にして観るのが本当のホラー映画の楽しみ方だつてクリス先輩が言っていたデスッ！」

「藤堯は震えつつ首を捻った。

雪音クリスも結構な怖がりだと調査部の報告にあつたと思う。

なのにこんなアドバイスをするとは…ああ、なるほどオレと同じか。彼女なりに後輩の前で強がる必要があつたに違いない。

納得はしたものの、余計なことを教えやがつてと内心で不平を漏らす。

「それじゃあ、一緒に並んで観るデスー！」

ソファアの隣をポンポンと叩かれる。

大人しく腰を降ろすと、切歌が寄り添ってくる。

いつもだったら「近い近い」と距離を取るのに、出来なかった。

暗がりでも感じられる少女の仄かな体温を頼りに、藤堯は覚悟を決める。

薄暗い画面に映画会社のロゴ。それからいかにもなおどろおどろしいBGM。

背筋を伸ばし、腹筋に力を込めた。

目を閉じてはダメだ。音声だけの方が返って恐怖を増幅させることは経験則で知っている。

画面を見ずに別のことに思考を集中する、というのもやってみたことがあるが、無駄だった。

五感から入力される情報を的確に処理し分析してしまう自癖を、これほど疎ましく思うことはない。

作り物だとかフィクションだとかは頭で理解している。それでも視聴者に強い物語性を訴えてくるのが、つまりは良く出来た映画とい

うことだろう。

「だけど、本当に、ホラーだけは勘弁…！」

まだ始まったばかりなのに内心で冷や汗をダラダラと流す藤堯を見上げ、切歌は右手を差し出して来た。

「藤堯さん、一緒に手を握って観るデス」

「…え？」

「うちでは調といっつもこうして観ているデスよ？」

普段であれば、そんな子供じゃあるまいし、と一笑に付す申し出だ。しかし、藤堯は考え込む。

刹那の間に、大人としての矜持とホラー映画の苦手意識が相争い、結局藤堯はプライドを捨てることを選んだ。

だからといって全てを投げ捨てたわけじゃない。

「べ、別に怖いわけじゃないんだからねツ？ 切歌ちゃんが申し出てくれたから、せっかくだから！ せっかくだから！」

返って乙女のような醜態を晒してしまっていることに、本人は気づける余裕はない。

そんな藤堯に対し、それでも会心の笑みを浮かべて指を絡めてくる切歌がいる。

「はいデス♪」

「さ、最近のホラー映画の映像はいろいろ凝っているねえ…」

鑑賞を終え、藤堯はそう感想を述べたが、ガチガチと歯の根はあっていない。おまけに声も裏がっている。

「正直いつて滅茶苦茶怖かった。」

それでもどうにか悲鳴を上げずに済んだのは、繋いだ手のぬくもりのおかげだろう。

「…洒落にならないくらい怖かったデス…」

エンドロールを眺めながら切歌も茫然とそう言った。彼女の両手



切歌もさすがに非難するような声を上げている。完全に腰を抜かした二人を、調は例のじーつという眼差しで眺めるとポツリといった。

「二人して、やらしいの」

指摘され、ようやく藤堯は現状に気づく。

腕の中には「デス？」ときよとんと首を傾げる切歌がいた。

ごく近距離で視線が絡み合う。ココアの残り香と少女の髪から漂うシャンプーの匂いに包まれる近距離だ。

「う、うわつとと!!」

「で、デスデスデスッ!!」

慌てて身体を引き離す。

藤堯をして、不覚にも狼狽してしまった。

状況が状況とはいえ、まさか真正面から抱き合う格好になっていたとは。

「ところで、切ちゃんの抱き心地はどうでした？」

「うん、悪くなかったよ……って何言わせるんだよ調ちゃんツ!」

当の切歌は黙って俯いている。その顔を真っ赤だ。

「さすが大人はやらしいの」

とブツブツ繰り返す調に、オレは悪くねえ! と藤堯は声高に主張したい。

しかし脈打つ鼓動が声を出すのを阻害していた。

…おい、いつまでバクバクしてるんだよ、オレの心臓!

そこで藤堯は気づいてしまう。

この動悸は、果たしてホラー映画によるものなのか?

胸の中に浮かんだ、何となく重大ごとに思える疑問を黙殺するように、藤堯は頭を振る。

それから黒髪の少女の方へと向き直ると、言った。

「ところで調ちゃん、どうやってオレの家の中に? 鍵はかけておいたはずだけど」

確かにしっかりと施錠した覚えがある。それでなくてもS.O.N.G.の官舎だ。セキュリティは万全のはず。

「ああ、それならカードキーで開けました。マリアに複製したやつを貰っていたの」

「それならアタシも貰っているデスよ！」

「…別の意味でそっちの方が怖いよッ!？」

## 第4話

「これで藤堯さんをご招待デース！」

切歌が一枚の封筒を差し出してくる。

玄関先で受け取ると、

「あんまり遅くなると調が心配するのでさよならデース！」

そう言い置いて、走って行ってしまった。

…わざわざ手渡しでなんだろう？

首を捻りつつ、リビングで封筒を開封。

中には有り触れたプリント用紙が一枚折りたたまれていた。

「リディアンの体育祭への招待案内…？」

私立リディアン音楽院は、もともと二課の肝煎りで建設された教育施設だ。

一般の高等学校に準じた年間行事が実施されていることぐらい、藤堯も把握している。

それでも、なんでオレが招待されなければならないんだ？ と首を捻っていると、携帯電話に着信が。

ディスプレイに表示された名前がマリア・カデンツァ・イヴであることに、藤堯は目を剥いた。

彼女の電話番号など登録した覚えがないのに。

鳴り止まぬ着信音に、藤堯は意を決して通話ボタンを押す。

「…もしもし…」

『ああ、藤堯さん？ 今しがた、切歌がお邪魔したわよね？ リディアンの体育祭の案内状を見たでしょ？ それで悪いんだけど、私の替わりに切歌と調の応援しに行って頂戴』

「…あのねッ！ いきなりそんなこと言われてもオレにも都合つてものが…」

『出来たら動画に撮ってくれとベターね。あ、お弁当もよろしくねッ！』

そう言つて通話は切れてしまった。

あまりにも一方的な通達に呆気にとられたが、さすがの藤堯も憤慨。

急いでリダイヤルするも、全く出る気配はない。

…結局、保護者代理つてことかよ。

藤堯は天を仰ぐ。

なんちゃら情操監督官という役職も拝命している以上、頼まれれば仕事と割り切つて対応することは出来る。

しかし、あまりにこちらの事情を斟酌しない物言いには力チンと来るし、なによりリディアンは女子高だ。

そんなところに野郎が観覧に行つたら怪しまれないだろうか？

身元はしっかりしているから大人からはともかく、有象無象の女子高生の興味の対象として。

「そもそも休みが取れるかってこともあるんだけどね…」

国際公務員といえどお役所仕事には違いない。基本的に週休二日制を採用している。

もつとも作戦行動中などは全くその限りではないし、労働基準法真っ青の激務に翻弄されることもある。

また、365日24時間即時対応なこともあり、土日祝日の当直業務とかもあるわけで。

そんなこんなで一応指定休日の申請をしたところ、あっさりと受理された。

加えてノイズの襲来などもなく、体育祭の当時を迎えてしまう。

空は快晴。気温は暑くもなく寒くもなく、絶好の運動会日和。

弁当箱を抱えた藤堯は、パンパンと散発的に上がる花火の音を聞きながら他の父兄とともにリディアンの正門をくぐる。

そしてその先に広がる光景は、良くも悪くも予想を超えていた。

「おうッ！ 来たか藤堯！」

「おはよう」

「…二人とも、なんでここにいますかッ!?」

ジャージ姿の風鳴弦十郎に、実に色気のないブラウスにストラックスを履いた友里あおいがいる。

二人の姿を認めるとともにあることに気づき、藤堯は周囲を見回す。

行き交うのは中年のお父さんばかりだが、その中の決して少なくな  
い人数の目つきが鋭すぎる。

「もしかして、保安部も出張ってきているんですか？」

弦十郎は頷く。

「実際に、娘さんを通わせている職員もいるしな」

現在、リディアンに在籍する装者は、立花響、雪音クリス、暁切歌、  
月読調の四人。くわえて重要人物として小日向未来もあげられる。

そんな彼女たちが常日頃から通うリディアンの警備体制は厳重を  
極めていた。

普段と違って外部の人間の出入りが多い学校行事などの際は、更に  
警備を固めるのは当然ともいえよう。

「…だったら、そうだってオレにも言っておいて下さいよ」

一方で藤堯の不満は別のところにある。

こんなことならわざわざ年休を申請せず、業務の派生で良かったの  
に。

「そうはいうが、おまえは切歌くんから直々に招待されたわけだろう  
？ それを仕事として捉えられては、切歌くんも気の毒かと思つて  
な」

「仮にプライベートだとしても、マリアさんの代理ですよオレは」

マリアは今は海外だそう。

それで体育祭に駆けつけられない事情は察するが、藤堯にとっては  
本来なら貴重な日曜の休日である。

まあそう愚痴るな、と弦十郎の指し示す方向を見れば、赤い鉢巻を  
した切歌と調がこちらへ走ってくるころ。



「あ、藤堯さん！ おはようございますデース！」

「おはようございます」

体操服姿の二人に、藤堯も挨拶を返す。

「おはよう。二人とも赤組なの？」

「はいデース！」

「クリス先輩も赤組ですよ」

そしてそのクリスはというと、弦十郎たちの姿に驚きの声を上げていた。

「なんだよ、なんでおっさんがここにいるんだッ!？」

駆け寄ってくるクリスに、弦十郎は朗らかに笑う。

「一応、クリスくんの身元引受人は俺だからな」

「だからっていきなり過ぎんだろうがよッ！」

「遠慮するな。今日一日は俺のことをお父さんと思っていいで。そして、そうだな、友里はお母さんだ」

「……」

微妙すぎる表情を浮かべるクリス。

友里に至っては、表情が複雑骨折している。

同僚の様子を気の毒そうに眺める藤堯の視界に、もう一人の装者の姿が。

「うう、なんでわたしたちだけ白組なの……」

なんとも恨めし気な声を出しているのは立花響。

「大丈夫だよ、響。わたしと響なら、たとえ二人きりだとしても」

その隣に寄り添い、慰めるは小日向未来。

「うん、そうだね！ わたしも未来と一緒になら、きっと神様にだって勝てるよ！」

一転してケロッとした明るい顔になり、響は洒落にならない台詞を口にした。

人目もはばからずきやつきやうふふと戯れ始めた二人を眺め、藤堯は弦十郎に思いついた疑問を投げてみる。

「……ひよっとして、組み分けの時点で細工しませんでしたか？」

「うむ、まあ、そこいらへんはちよつとな……」

選手宣誓が行われ、体育祭はスタート。

紅白の陣営に分けられてはいるものの、生徒たちの往来は自由だ。

特に教師が仕切るわけでもなく、観覧席で両親と談笑している生徒も多い。

幾つか食べ物系の出店まで建っている。

自分が学生の頃の体育祭に比べ、ずいぶん緩いもんだなと藤堯は思う。

そこいらへんの自主性は生徒たちに任せているのだろう。

一番目の種目が始まれば、盛大な応援が飛び交いさつそく盛り上がっている。

「おつと、こうしちゃいられないな…」

渡されたプログラムには、予め切歌と調が出る種目にチェックを入れている。

映像を残せといわれたけど、とりあえず自前の携帯端末でいいかな。データを送りつけるときには楽だし。

ぶらぶらと観覧席まで行けば、友里に声をかけられる。

「ちよつとー！ 間もなく切歌ちゃんの出番だけど、大丈夫？」

おつと、危ない危ない。

さつそく撮影すべく前列へ。

障害物競争のスタートラインの前に四人の女生徒が立ち、一番手前で切歌が手足のストレッチをしている。

位置について、よいドン！ スタートピストルの音とともに、切歌はダツシュ。

その姿を藤堯は携帯画面で追う。

まずは平均台だ。落ちたらスタートへ戻ってやりなおし。危なげなくスピーディに渡りきる切歌。

続いて、地面に張られたネットの下を腹這いで移動する。

これまた素早くクリアする切歌の動きは、まるで熟練した匍匐前進だった。

レセプターチルドレン時代に、何かしらの軍事行動でも教えこまれたのだろうか？

最後は、小麦粉の満たされた大きなバットから飴玉を探して啜えて、ゴールへ駆け込めば終了。

余裕の1位でゴールを通過した切歌は、真っ白な顔のまま藤堯に気づいたらしくVサイン。

そのまま赤組の陣営に戻れば、級友らしい女生徒たちからもみくちゃにされている。

実にオーソドックスな障害物競争だね。それが藤堯の抱いた感想だった。

それに、切歌ちゃんもずいぶんとクラスに馴染んでるみたいじゃないか。

さて、次は調ちゃんの番、と…。

ふと気づいて横を見れば、弦十郎が立っていた。

「あれ？ 司令はどうしたんですか？」

「この障害物競争にはクリスマスくんも出るそうぞ。知らなかったのか？」

学年で分けられることなく、一年生から三年生まで混合で競争するらしい。

見れば、なるほど、調とクリスマスが同色の鉢巻をつけ、同じスタートラインに立っている。

スタートピストルの音。

あつという間に平均台を渡った二人だったが、調が物凄い勢いでネットエリアをクリア。

ぶつちぎりの一位でゴールを通過している。

一方のクリスマスは、ネットエリアで引っかかり、打ち上げられた魚のように悶えていた。

結果はぶつちぎりの最下位だった。

「…胸が引つかかっていたでしたねえ」

「うむ」

「つか、ばるんばるんですねえ…」

「うむッ」

「うむッ、じゃないでしょがッ！」

いつの間にか背後に来た友里に、男二人はハリセンで後頭部を張り倒される。

思わぬ眼福というかとんでもない光景を目の当たりにしてしまった藤堯だったが、次の競技のために気を引き締める。

次に切歌と調が出る競技は、これまたオーソドックスに二人三脚。

そして白組の対戦相手は、立花響、小日向未来ペアだ。

「これは見物だなー」

弦十郎が声を上げた通り、普段からコンビでいるペアだ。呼吸もぴったりだろうから、まさに彼女らにこそ相応しい競技と言えるだろう。

結果を記せば、切歌・調ペアと、響・未来ペアの一騎打ち。

壮絶なデッドヒートの果てに、響と未来に軍配が上がる。

弦十郎は装者たちに惜しみない拍手を送りながら笑った。

「ユニゾン特訓の成果だなッ」

「周囲がドン引きするほどぶつち切りなんですけど、それは」

鞠入れではクリスが超長距離から見事な投擲を見せて勝利に貢献し、綱引きでは響が場違いな震脚を炸裂させ、もう少して綱を寸断しそうになる。

学年ごとのダンスでは、切歌と調は見事な巫女舞をアレンジしたダンスを披露していた。

…なんか体育祭っていうより、装者のびっくり万国博覧会なんじゃ？

それらをいちいち撮影しながら、藤堯はそんな感想を抱く。

なんやかんやで午前中の競技は全て終了。お昼の時間となった。

食事は好きな場所で、誰と食べてもOKらしい。校舎内の食堂も解放されているという。

藤堯は観覧席に持ってきたレジャーシートを敷く。隣を見れば、弦十郎らも同様にシートを敷いていた。

「藤堯さん、アタシたちの活躍見てくれたデスか？」

「お腹空いたの」

切歌と調がやってくる。

「はいはい、お疲れさん」

苦笑しつつ、藤堯は重箱を展開。

二人が歓声を上げる。

中身は、グリルチキンをメインに、肉団子とミニハンバーグが並ぶ。サラダは食べやすくカップ入りで、サンドイッチに小型の俵型おむすびも詰め込まれていた。これだけではいかにも普通の弁当だが、目玉として藤堯自作のレモンカードがつく。

「ほう、見事なものだな」

藤堯会心の弁当に感嘆の声をあげつつ隣のシートで弦十郎が開けたのは、有名デパートの高級仕出し弁当だ。

「一度食べて見たかったのよね」

箸を持ってうっとりとした声を上げる友里。

「!! まさか経費で買ったんじゃ…?」

「そりゃあ装者に変なものを食べさせるわけにはいかんだろう?」

首肯しつつ、弦十郎はクリスに弁当を渡している。

汚い! さすが大人汚い!

「藤堯さんの料理の方が美味しそうデスよ!」

力強く擁護してくれる切歌だったが、ではさつそく、と食事開始には至らなかった。

「へ、この人が、アカちゃんがいつも言っている男の人?」

声の方を見れば、複数の女生徒たち。

「藤堯さんはとっても料理が上手なの」

「ツクよんがそう言うなら、きつと凄いらるうね」

なんとという上から目線。これが若さというものか。

しかし、アカちゃんとツクよんって。

「あ、少し頂いてよろしいですか?」

それでも丁寧な物言いをする名も知らぬ女生徒。

女生徒A（仮称）の態度のギャップに、藤堯は思わずうなずいてしまふ。

「それじゃ失礼しまして…」

グリルチキンを一つまみ。頬張った女生徒Aの顔がほころぶ。

「なにこれ、ちよつとなにこれ!」

「マジで美味すぎないッ!」

追随してつまんだ女生徒Bも合わせてきやいきやいと実にやかましい。

すると、なんだなんだとばかりに他の女生徒たちまでもが集まってくる。

女子同士の共感というか連帯感にただただ圧倒される藤堯。

気づけば、重箱の中身は空に近くなってしまっていた。

「藤堯さんのお弁当が〜ッ!」

悲壮感たつぷりの声を出す切歌に、さすがに集まった女生徒たちも悪いと思つたらしい。

「ごめんごめん、これ、うちの弁当だけどお裾分けッ」

「あたしは手製のトルティーヤをあげる」

「唐揚げ串とおでんを買ってくるから」

わいわいと一齐に差し出されて、結局重箱の中身は詰めてきた時よりいっぱいに溢れ出す。

ベソをかいていた切歌だったが、さすがに溢れんばかりの好意の山に、しかめっ面ではいられない。

「これもすつごいご馳走デス〜♪」

切歌は打って変わって歓声を上げ、

「頂きます」

調は礼儀正しく手を合わせて箸を動かし始める。

「と〜ころで…」

女生徒Aが、なんとも意味ありげな眼差しを藤堯に向けてきた。

「お兄さんは、アカちゃんの彼氏さんなんですか?」

その声に、重箱の中身をかっ込んでいた切歌が吹きだす。

「な、な、なにを言っているんデスカッ!?」

「だってアカちゃんだったら、いつつも今日遊びにいったとか、おやつご馳走になったとか自慢してるじゃん」

「べ、別に自慢したつもりは…」

焦り顔で語尾をモニュモニュさせる切歌。

「オレは単なる保護者代理だよ」

スマートに藤堯は答える。

ここで狼狽したり強く否定すれば相手の思うつぼ。昔のラブコメマンガじゃあるまいし。

「じー」

調が何か言いたげにこちらを見ていたが、

「あ、デザートも持ってきてきているから、良かったらみんなもどう？ でもカロリーはちよつと高めだけどね」

そういつて藤堯は、保冷パックから取り出したタツパを開けてみせる。

中身はフレッシュクリームのたつぷり詰まったクリームドーナツ。歓声とともに、無数の手がドーナツを掴んでいく。

おかげで質問自体が有耶無耶になった。

これぞ大人の必殺技、論点ずらしだ。

「美味しい〜！ でも太っちゃう〜！」

嬉しそうな悲鳴を上げる女生徒たちを横に、ちらりと切歌の様子を伺う。

一瞬不満そうな表情を浮かべているように見えたが、きつと気のせいだろう。

午後の部は応援合戦から開始された。

先攻は白組で、有志によるチアチームがポンポンを持って澆刺とし

た演技を披露している。

響と未来もいて、華麗なバク転を披露した響に喝采の声が上がっていた。

「赤組も負けてないですから、注目なの」

調が観客席までやってきて言う。

見ていると、なんと先頭に出てきたのは、胸にサラシを巻いて学ランを羽織ったクリスだった。

きゃー、雪音先輩、ステキー！ きねくりパイセンツー！ などと黄色い歓声上がる中、

「てめーら、気合入れていくぞツー！」

「はいツー！」

応援団長クリスの背後で声を上げる学ラン生徒の中に、切歌の姿も見える。

「…詰襟が似合っているなあ…」

撮影しつつ思わず藤堯が呟けば、

「切ちゃんはわたしの王子様なの！」

調もきゃーきゃーと歓声を上げている。

大迫力の応援合戦も終了し、競技もいよいよ終盤戦へ。

借り物競争にクリスも切歌も参加するようだが、学ラン姿のままですすらしい。

二人のある意味新鮮な格好の撮影を続ける藤堯に、切歌がこちらにくんぐんと迫ってくる。

半歩ほど遅れてクリスが続き、二人して観覧席までやってきた。

「あの、藤堯さんッ」

息を弾ませながら切歌が伏せられた紙を手になっている。

おそらくそこに借りてくるものが記してあるのだろう。

「なに、切歌ちゃん？」

眼鏡や持ち物とかが定番だな。まさか彼氏とか恋人とかってのは勘弁だけど。

ところが藤堯の予想は大きく外れた。

「ダンス、できるデスか？」



「…はい？」

呆氣にとられていると、一緒に来たクリスマスも弦十郎に話しかけている。

「おっさんッ！ ダンスなんて出来るかよッ？」

クリスマスの差し出してきた紙を見て、弦十郎は太い声で唸った。

「なるほど、そういうことかよ」

書いてあったのは『ダンスの上手そうな大人』

つまり借り物のお題は全て同じ。そこで召集した保護者たちにダンスを披露してもらおうのを本筋に据えているのではないか。

「よしッ、行くか藤堯ッ！」

個人的に遠慮したかったが、弦十郎に背中を押されてしまっただけうしようもない。

切歌に手を引かれ、審査員の前まで連れて行かれる。

無駄に注目を集めて目立つのは嫌いな性分だったが、後ろをついてくるクリスマスと弦十郎のペアの方が目立っているのでまあ良しとしよう。

「しかし、司令はダンスなんて出来るんですか？」

参加者が全員集まるまで審査は始まらない。手持無沙汰で藤堯はそう尋ねてみる。

「失敬な。俺とて演舞の一つや二つ心得ているぞ」

そういつて弦十郎はしなやかに手足を動かす。鞭のように腕をしならせ、独特の歩法で展開されるは通背拳。

ビシッと型を極め、ドヤ顔をしてくる上司に、藤堯は突っ込まずにはいられない。

「司令、それは演舞じゃなくて演武です」

「あの…そもそもそういう意味のダンスじゃないです…」

おぼおぼと審査員役の女生徒が言ってくる。

既に参加者は全員集まっており、またもや無駄に注目を集めてしまったと藤堯は赤面。

女生徒たちとペアを作り、流れてくるBGMはバラード。

この場でのダンスとはチークダンスのこと。

借り物競争と名ばかりで、要は女生徒とその保護者であるお父さんとの交流を図るダンスコーナーだったわけだ。

「なんかすみませんデス…」

詰襟姿の切歌が謝ってくる。

「いや、全然」

切歌の手を取り、藤堯は巧みにリード。

運動神経は悪くないんだらうけど、学ランと組み合わせた革靴のままでは切歌もステップが踏みづらいようだ。

「それに、あっちよりは大分マシだし」

背後で、ちよつせえ！ おい、危ないぞ、足が碎ける！ などといった物騒な会話が聞こえるが、藤堯は敢えて振り向かない。

「…藤堯さんはダンスも上手いんデスね！」

「いやいや、切歌ちゃんもなかなか筋がいいよ」

「それじゃあ、今度…」

切歌が何か言いかけたとき、BGMは終了。

三々五々、保護者と女生徒は散っていく中、疲弊した弦十郎を連れて藤堯は観覧席まで戻る。

いよいよ体育祭も大詰めで、最後のリレー競争だ。

両組の得点は現在のところ拮抗している。

これで決着がつくとあつて、会場全体のボルテージも上がっていく。

「ほう、切歌くんがアンカーか」

「切ちゃんは足が速いから」

まさにクライマックスという感じで、マリアに送る動画としても取れ高は高くなりそうだ。

しかし、藤堯には一つ引つかかるところがある。

「切歌ちゃん履いているの革靴だよね？ あれで走るわけ？」

地味に危なくない？ と問題提起をしたわけだが、調は不思議そうに首を捻るだけ。

「応援団はみんなあの格好ですよ？」

「ふくん…」

まあ基本的に装者は体力お化けだ。現役の陸上部員でもなければ、  
そうそう遅れは取らないだろう。ハンデと思っておけばいいか。

そして見せ場がやってくる。

リレーの流れは白組が先行。白組のアンカーに半瞬遅れて、切歌に  
バトンが渡る。

「切ちゃん、行けーなのッ！」

興奮して叫ぶ調。

声援に応えるようにぐんぐんと切歌は加速する。

先行する白組アンカーも相当足の速い生徒らしく、なかなか追いつ  
けない。

それでもジリジリと差を詰め、ゴール直前で切歌が追い付く。

皆が一体で応援する中、藤堯の心配が的中した。

盛大に体勢を崩し、転倒する切歌。

勢いそのままに転がるようにゴールラインを通過したときには、既  
に白組がゴールテープを切っていた。

校舎裏で、切歌は調をはじめとした女生徒たちに囲まれていた。

「あく、もう分かったから、アカちゃん、泣くなって」

頭の上にスポーツタオルを載せながら慰める女生徒Aに、切歌は涙  
を拭いながら唇を震わせる。

「でも、アタシのせいで赤組が…」

「アカちゃんのせいじゃないよ？ それまでの得点の積み重ねは赤組  
みんなの責任なんだから」

女生徒Bの渡してくれたティッシュで切歌はずびーつと鼻をかむ。

「とりあえずさ、お疲れさまでしたってことでシャワー浴びて、打ち上  
げいこー！ ね？」

「駅前の新しく出来たピザ食べ放題のとこ予約してるんだっけ？ 楽

しみ〜」

「口々にいつて女生徒たちは立ち上がるが、切歌は立ち上がろうとしない。」

「切ちゃん…?」

心配そうな表情を浮かべる調に、

「ごめんなさいデス。アタシはもう少し反省してから行くデス」

「だったらわたしも一緒に」

「いいから調は先に行つててデス。すぐに追いつくから…」

不満そうな表情を浮かべた調だったが、結局女生徒たちに連行されていった。

あとに残されたのは切歌だけ。

それを確認して、藤堯はひよっこり顔を出す。

「切歌ちゃん、お疲れさま」

「藤堯さん…!?!」

驚く切歌に構わず、藤堯は膝を突いた。

それから切歌の足首に触れると、

「痛ッ!」

「やっぱり痛めてたんだね」

まあ、革靴であれだけ盛大に転べば無理もないか。

靴と一緒に靴下も脱がせ、足首に触れる。

「腫れているけど、骨には異常ないみたいだ」

仰ぎ見れば、切歌の顔は真っ赤にして恥らっている。

「友達を心配させたくなって黙っていたんだろう? 偉いな」

思わず頭を撫でてやりたくなかったが、それは自重。

先に調を行かせたことも、切歌なりの気遣いだろう。

非常に狭い人間関係でしか生きてこなかった彼女が、新たに広い交友関係を構築しようとしている。

お気楽能天気娘だと思われていたこの子も、精神的に成長しているのかも知れない。

これはマリアさんに報告すれば喜ばれる話だろうな。

「さて、一応、医務室で診てもらおうか」

「え？ え？」

藤堯は切歌を抱き上げる。いわゆるお姫様だっこだ。

「ふ、藤堯さん、恥ずかしいデス！ それに汗臭いデスし…ッ！」  
慌てる切歌の声を、藤堯は敢えて聞こえない風を装う。

時には無視することも相手に対する気遣いとなる。

顔を赤く染め黙り込む切歌を抱え、藤堯は歩き出す。

さあて、医務室はどこかな…。

「なるほどなるほど、そういうことですか」

校舎裏の角を曲がったとたん、ニヤニヤ顔の女生徒の一団とご対面。

「単なる保護者代理だとか、やっぱり怪しいと思ったんですよね」

「お姫さま抱っこしといて彼氏じゃないとかあり得ないっすか？」

「アカちゃん、なんか言うことないの？」

面食らいつつ、藤堯は胸元の切歌へと視線を落とす。

頭からスポーツタオルを被ってしまった切歌の表情は窺えない。

しかし、突き出た耳の先端まで真っ赤に染まり、プルプルと全身で震えていた。

「では、彼氏さんにインタビューをしてみましようか」

矛先を変えられ、藤堯はにつこりと微笑む。

それから180。ターンをして、形振り構わずの全力ダッシュ。

切歌を抱えたままの全く予定外の障害物競争は、リディアン敷地内から逃れるまで続けられることになる。

そして後日、筋肉痛で悶える藤堯へマリアからの連絡。

『どうして切歌がゴールした瞬間が撮れてないのよッ!?!』

## 第5話

官舎に戻り、重い足取りでエレベーターに乗り込む。

鏡面仕様の内ドアに、疲弊した自分の姿が映っていた。

：我ながら、ひどい顔つきになっているな。

近日行われる作戦の立案に当たり、徹底的なデータの検証が求められている。

そのため、ここ数日は超過勤務の連続なのだが、藤堯は律儀に自宅へと戻っていた。

S・O・N・G・本部へ泊まり込む同僚たちを横目に、自宅で炊事洗濯をこなす。

作戦行動中は嫌でも本部から退去出来ないのだ。出来うるかぎり自宅でプライベートに浸りたい。

職務意識が低いわけではないが、仕事とプライベートのオンオフを切り替えることが、仕事を長く続けるコツだと思っている。

カードキーを通し、寒々とした玄関へと入る。

ふと空気に違和感を覚えた。

別に人の気配があるわけでない。しかし、人の気配は残っていると  
いうか…。

キッチンへ足を進め、違和感が氷解した。

ガス台の上に、見覚えのない鍋。

鍋の上には一枚のメモが貼ってあった。

『お裾分けデース♪』

藤堯は苦笑する。

名前も書いてないのに、一瞬で誰からのものか分かるメモも珍し

い。

鍋の中身は肉じゃがだった。

温め直しているうちに、冷凍していた一膳分のご飯を解凍し、インスタントみそ汁を作る。

ほっこりと湯気を立てる肉じゃがを小鉢へと盛り付けければ、ジャガイモは煮崩れることなく、銀杏切りされた人参の厚さも均一だ。しかし、牛ではなく豚のバラ肉であることに、元F・I・S組の家の経済事情を垣間見る。

それでもありがたく頂こう。

箸でジャガイモと豚肉を一口頬張り、藤堯は思わず呟いた。

「…しよっぱい」

「それで、どんな感じ?」

翌日の発令所にて。

「コーヒーを差し出しながら友里が尋ねてくる。

「どんな感じって、なにが?」

「切歌ちゃんのことよ、もちろん」

「ああ。まあ、上手くやっていると思うよ?」

率直に藤堯は答えた。

質問が漠然としすぎているし、なんだか知らないけどあれだけ懐かれてしまっているのだ。こんな評価が妥当だろう。

「ふくん…?」

友里は意味ありげに笑って、

「さすがに通い妻みたいな真似をされたら、情も沸いてきたって感じ?」

藤堯は眉根をよせた。

「なんだよ、通い妻って?」



「切歌ちゃん、わざわざ私にメールで尋ねてきたわよ？　肉じやがとカレー、どっちがを作ったらいいかって」

その台詞には、少しだけ虚を突かれる。

事実だけを並べれば、独身男の家に女性が料理を作って訪問。客観的に見ればそんな解釈は成り立つかも知れない。

だが、ニヤニヤしている友里に、藤堯はぴしやりと言った。

「あんなの子供のママゴトみたいなもんだよ」

不本意だが、暁切歌にとって自分は初めてのデート相手だ。

ゆえに何かしらの特別感を抱かれただけ。

切歌に身近な異性として意識されるのは光栄だが、その意識を藤堯が共有できるかは多くの別問題。

あの年頃の年上に憧れる感覚には藤堯も覚えがある。実習生に憧れた中学時代。

そして、その憧れが昇華されることは殆どないことも経験則で知っていた。

甘酸っぱいときめきも、今や青春の苦い一ページとして記されるのみ。

「要は麻疹はしかみたいなのもんさ。熱に浮かされて、訳が分からなくなってるだけだって」

藤堯は手をヒラヒラさせる。

そういえば、体育祭でクラスメートたちに彼氏だなんだと誤解されっぱなしのまま。

さすがにあの場で弁明するのは無理だと思ったので逃走した。

結果として、切歌に何か含みを持たせてしまったとすれば、それは大いに反省しなければならぬだろう。

なぜか友里は大きく溜息をついて、

「そんな風に子供だとか侮っていると、足もとをすくわれるわよ？」

「へ？　どういう意味？」

「切歌ちゃんも、もうすぐ手も足もすっかり伸びきるわ。夢と現実に折り合いを付けられる大人になるでしょう。それでも気持ちを持ち続けられたら…」

以前に、切歌は夢に夢を見る年頃と評し、彼女と自分とのデートをけしかけたのは他ならぬ友里だ。

夢のまま満足させてやればいい、とも言っていたはずなのに、なんだろう、この変節振りには？

「…それはもしかして経験則ってヤツですか、友里さん？」

首を捻りつつ混ぜっ返すと、友里にイーッとという顔で睨まれてしまった。

藤堯はコーヒーを飲み干し、いそいそと仕事へと戻る。

他愛もない会話で貴重な休憩時間を潰しちまったな、なんて思いながら。

帰宅への道すがら、藤堯は友里との会話を反芻する。

ここ最近の切歌との関わりは、傍から見ればいわゆる彼氏彼女の関係に見える…のか？

うわ、背中が痒い。

もつとも藤堯自身は業務の一端であると割り切っている。

切歌の行動も、結局のところは友里にもいったとおり、麻疹はしかにかかったみたいなものだと分析していた。

ましてや切歌はその手の経験が絶無。

免疫に乏しい人間が罹患したらそりゃあ高熱も出るだろう。

まあ、熱が冷めたら、こんな冴えない年上の男より、もつと身近で歳の近い男の子に気づくはずさ。

他に今回の状況を例えるなら、腹を空かせた人間の前にぽんとステーキを出したみたいなものだ。

最初は夢中でむしゃぶりつくだろうけど、一種類のものばかり食べていればさすがに飽きる。飽きたら他の料理に興味を示しだすのは自明。

自分を肉に例えるのはいささか情けないけれど、切歌を犬に例えれば、なかなかしつくり来る組み合わせに思えて苦笑する。

一方で、しゃぶられ続けられるのにはいささか辟易していた。

特に留意すべきはプライベートへの介入も甚だしいこと。自由に自宅へ出入りされている件は、外聞ともかく、本来なら激怒してもいいはずである。

これは、次に会ったときにでも釘を刺しておくべきだな…。

そんなことを考えて歩きつつ、藤堯の内心は非常にアンニュイだった。

スーパーが閉まっていて、目当ての特売キャベツを買いそびれたからではない。

原因は、いまだ湿り気を帯びている道路にある。

夜になって雨は上がったものの、夕方から首都圏はゲリラ豪雨に見舞われていた。

その範囲内に官舎はあり、そして藤堯は早朝から布団をベランダへ干して出勤していた。

まさか雨が降ったから早退させてください、とも言えず、やきもきしながらようやくの帰宅時間。

残業を済ませて遅くなった挙句、これから濡れた布団の後始末も考えると少し泣きそうだ。

「ただいま、っと…」

誰もいないだろう自宅へ帰宅の挨拶。

オレも大概疲れているな、なんて思いつつ、玄関先のローファーに気づく。

「…切歌ちゃん？」

廊下の電灯をつける。リビングもキッチンも真っ暗のままだ。

「おーい、切歌ちゃん…」

リビングの電灯をつけると、床に布団がもちやもちやと山になっていた。

濡れていない。どうやら切歌が取りこんでくれたよう。

しかし、肝腎の切歌の姿が見当たらない。

…実は切歌ちゃんじゃなくて調ちゃん、じーつと暗がりから見られてたら嫌だな。

背筋をぞくりとさせ、藤堯が室内を見回した時だった。モゾモゾと布団の山が動く。

山が崩れると、間から金髪の頭が現れた。

「ふわ〜良く寝た……。あ、藤堯さん、お帰りなさいデス♪」

「……………」

「お布団を取りこんだんデスけどね、お日様でぽかぽかと暖められて気持ち良かったから、つい」

藤堯がじーつと見下ろしていると、切歌はてへぺろとばかりに頭を掻いている。

まあそんなこつたろうなど分析はしていたが、こんな状況に慣れてきてしまっている自分に少しだけ慥然としてしまう。

正直、布団を取りこんでくれたことには感謝している。

おかげで、釘をささなきやと思っていたテンションもダダ下がりで叱りづらい。

「…女の子が、無防備に男の部屋で寝こけちゃダメだよ」

それでも藤堯は、敢えて苦言を呈す。

「…藤堯さん？」

さすがの切歌もいつもと違う空気に気づいたらしく戸惑った声を出している。

「それに、こんな遅くまでいたら、調ちゃんも心配するじゃないか。明日も学校があるんだらう？」

「そう…デスね」

「それじゃあ、オレはシャワーを浴びるから」

言い置いて、藤堯は本当にシャワーを浴びに行く。

ちよつと態度が冷たかったかな。

でも、あれくらい言わないと気づかないだろうし、現実問題としても大人の厳しさは示さなければ。

それに藤堯自身も疲れていた。

ここ連日の疲労感が、自分の余裕も削っている自覚はある。

さすがにあれだけ言われれば、切歌も家に帰っただろう。シャワーを終え、ハーフパンツに首にタオルを引っかけ、藤堯はキッチンの冷蔵庫へ。

スポーツ飲料のボトルを取り出しラツパ飲みをしていると、甲高い声が弾ける。

「ふ、藤堯さんッ!？」

帰ったと思った切歌が顔を赤くしてこちらを見ていた。

言うまでもなく、今の藤堯は上半身裸だ。

しかし、ここで藤堯側が恥らうのはおかしい話。

「なんだ、まだ帰ってなかったの?」

タオルで頭を拭きながら藤堯は切歌に歩み寄った。

視線を逸らしまくりの挙動不審で切歌は後ずさり。

背中が壁に突き当たる。もう下がれない。

あからさまに怯える風の切歌に、良い機会だ、と藤堯は自身の挙動を決めた。

壁にドン! と手をついて、顔を近づけて問いかける。

「どういうつもり?」

「えと、その、ご飯と一緒に食べようかなって思ったんデスけど…」

必死に視線を逸らしながら早口で答える切歌。

「気持ちありがたいけど…。さつきも言った通り、少しばかり無防備が過ぎやしないかい?」

見下ろせば、ますます身体を縮こませ、目線を逸らす切歌がいる。その頬は赤い。

「こんな夜遅く、女の子が男の家で二人きりでいる意味、分かっているの?」

気取りに気取った気障な物言いだ、藤堯渾身のブラフである。

だいたい、藤堯にとつて切歌は子供だ。子供を性的な目線で見ることなんて出来ない。

加えて、切歌自身も性的な知識は皆無だろう。

「…分かってますデス! アタシは大人なんデスからッ!」

真つ赤な顔で虚勢を張る切歌は、全くの想定内。

「本当に……？」

すつと濡れた指で前髪を掻き上げてやると、目に見えて硬直する姿が面白い。

そのままじつと見つめていると、唇がぴくぴくと動き、どんどん顔も赤くなつていく一方だ。

…あんまり苛めちゃ可哀想だな。

そろそろネタばらし的に突き放して終わらせよう。

『怖がらせちゃってごめん。でも、大人相手だということになるかも知れないんだ。これに懲りたら、少しは自分を大事にしないと…』

こんな感じの台詞でいいかな？

しかし、その行動に移るより一瞬早く、切歌の口から震えるような声が解き放たれていた。

「…命短し恋せよ乙女、ってマリアが唄っていたデス…！」

面食らう藤堯に、切歌は固く強く目をつむっている。

それから心持ち顔を上げていた。まるで藤堯にその身を捧げようとするかのように。

切歌が何を求めているか、気づけないほど鈍感じゃあない。

それより、直前の彼女が放った台詞の方が、藤堯の内心を盛大にぶん殴っていた。

命短し。

いうまでもなく切歌はシンフォギア装者の一人だ。

戦いに挑み、死にかけてしたことなど一切ではない。

そしてその戦いの終わりの先は見えず、言い換えれば明日死んでもおかしくないのだ。

なによりそんな彼女たちを投入する作戦の前準備で、このところ日々残業を重ねていたんじゃないか、オレは…！

果たして、切歌がそこまでの意味を込めて台詞を放ったのかは不明だ。しかし、真剣なのは間違いない。

加えて台詞の裏に込められたものにまで気づいてしまった以上、藤堯もふざけて突き放すわけにはいなくなってしまう。

…切歌は子供だ。

だけど、いつ散るかも分からぬ運命を背負っている。

それでも戦い続ける、そんな彼女の覚悟に報いたい。

でも…!

目論見は脆くも破綻し、一転して追い詰められているのは藤堯のほう。

結局、震える少女に顔を近づけ——そっとその額に口づけた。

身を離してしばらくすると、切歌はようやく目を開けて、

「藤堯さん、今の…」

「……今の切歌ちゃんには相応しいキスだよ」

藤堯は曖昧に微笑むしかなかった。

切歌はハッと驚いた顔になり、自分の額を両手で隠すような仕草をする。

続いて頬を染めたまま、脱兎のごとく藤堯の間合いを脱出。

パタパタと向かった先は玄関の方で、きつと今度こそ帰るのだろう。

そう思っていた矢先、足音が引き返してきて、ひよっこり壁の向こうから切歌は顔だけを出す。

「……、今度は、大人のキスを教えてくださいデスッ!」

恥らうように言つてのけて顔を引込める。

玄関の開く音。遠ざかる足音。

ようやくずるずると藤堯はその場へとへたり込む。

…オレは何やってんだ?

叱ることも出来ず、突き放すことも出来ず。あげくガキみたいにキス。しかも額につて、どんな昔のラブコメよ?

元からの疲労も合いまり、自己嫌悪の沼で溺れそう。

叫ぶのが性に合わない藤堯は、無言で壁を殴りつけた。

それでも仕事に差し支えるからと、怪我しないように手加減している自分に腹が立つ。

全くオレってやつは。

やることなすこと、何もかも中途半端だ。

その後、切歌の訪問はなくなっていた。

今度は大人のキス云々とか言われて戦々恐々としていた藤堯にとって拍子抜けである。

どの薬が効いたのかよく分からないが、プライベートの再構築が出来たのは本懐だった。

もつとも次期作戦を控えての残業続きで、ろくろく休みも取れなかつたけれど。

切歌も作戦に向けた訓練漬けらしく、久々に顔を合わせたのは作戦決行前の最終ブリーフィング。

こちらに気づくと、他の人間に見られないよう小さく手を振つてくれたが、それだけ。

「よしッ！ それでは作戦行動を開始するッ！」

作戦内容は、一言でいえば。パヴァリア光明結社の残党の殲滅。

はぐれ錬金術師たちのアジトを急襲し、可能な限りの捕縛とアルカ・ノイズを撃滅する。

この作戦に投入されたのは、マリア、切歌、調の元F・I・S三人組。

事前にデータを分析し、十分すぎる戦力で、極力危険度を排したミッションだった。

そのはずなのに――。

オペレーターは、いかなる時も冷徹に事実を報告しなければならぬ。い。

そこに己の感情を介在させてはいけない。

ゆえにその時の藤堯は、ただ愚直に、茫然と、まるで他人の声を聴くようにその報告を繰り返していた。



「イガリマの反応、ロストしました——」

## 第6話

錬金術師がアジトに膨大な爆薬を錬成していることは把握していた。

イレギュラーは、そこに全く無関係の人間が存在したこと。アジトの廃工場に、肝試しとばかりに遊びこんでいた地元の少年少女。

彼らを発見し、保護と避難誘導を担当したのは切歌だった。

間一髪、少年たちは逃したものの、切歌は廃工場の爆発に巻き込まれてしまう。

…イガリマのシンフォギアの防御力に、過去の爆発事例のデータと観測上のデータを重ねあわせて、吹き飛ばされたであろう位置座標を推定する。

「座標できました！ 至急、待機班より捜索隊を…ッ！」

「藤堯ッ！」

顔を上げて叫ぶと、弦十郎の姿がすぐ眼の前にある。

「もういい、休めッ！」

意味を測りかね、壁の時計に目を走らせる。

なんだ、まだ事故から一時間しか経ってないじゃないか。

司令こそ何いつてるんですか？

まだ間に合う。早く救援を…！

「おまえは丸一日以上、同じことを繰り返しているんだぞッ！」

「…えっ？」

発令所を見回す。

風鳴翼は項垂れ、雪音クリスは泣き叫んでいた。

その姿を眺め、立ち上がろうとし、藤堯の意識はそこでブラックアウトした。

目を開けると消毒薬の匂い。  
首を巡らせば、静脈に繋がれた点滴が吊るされているのが目に入る。

医務室か、ここは。

深夜らしく、人の気配はない。

上体を起こし、藤堯は胸を押さえる。

込み上げてくる吐き気は、心労と肉体的な疲労のどちらによるものか。

「…そうだ、切歌ちゃんを探さない」と

呟いた途端、意識を失う直前に見た弦十郎の悲壮な顔が克明に浮かぶ。

『切歌くんは……K I Aだ』

Killed In Action——「作戦中に死亡」。

…そんな馬鹿な。

あの子が死ぬはずなど。

額に手を当てる。

当てたまま、枕元の消灯台の上に、一冊の本らしきものが置かれていることに気づく。

誰かが意図的に置いていったのだろうか。

手に取り、中を開く。

一瞥して、藤堯は自分の手が震えるのを自覚する。

稚拙な文字で書かれたその内容は、切歌が筆者であることは間違いなかった。

そしてその内容は、藤堯の表情を固まらせるには十分過ぎた。

——今日は、藤堯さんと初めてのデートでした。とっても楽しかったデス。

取り留めのない内容は、日記というより、忘備録のよう。

だが、そのデートの記述を境に自分の名前が頻出していることに、藤堯は脳の奥が痺れるような感覚を受けていた。

——今日は、巴旦杏のケーキをご馳走になったデス。

——今日は、一緒にチゲ鍋を作ってみたデス。

——今日は、駅前新しいアイスクリームのお店と一緒に買いに行ったデス！

感情を麻痺させたまま読み進め、藤堯の手は止まる。

——今日、藤堯さんにキスをしてもらいました。

——アタシは、きつと、調と同じくらい藤堯さんのことが好きなのもかも知れません。

その記述が一番新しかった。

「…なんで」

喉が狭まる。

胸が締め付けられる。

あの子は、なんで。

あの子は、何を思ってる。

あの子は…もういない。

「…ふぐっ…」

任務なんだと不承不承付き合う体で、オレは切歌ちゃんに構ってやることで年上の優越感に浸っていた。

何様なんだ、オレは。上から目線も甚だしい。切歌ちゃんが可哀想だろう？

…いや、可哀想と思うこと自体が失礼だ。

彼女は純粹だった。

優越感や可哀想とかいう目線とは全く別の次元でオレを慕ってくれていて…！

「切歌ちゃん…!!」

毛布を噛みしめた。

噛みしめた隙間から嗚咽が漏れるのを止められない。

藤堯は泣いた。

毛布に顔を埋め、胸に日記帳を抱き、泣き続けた。

いつまでも涙は止まらなかった。

「命令ですか」

「…命令だ」

総司令である弦十郎とのやりとりは、それだけだった。

そのままふらふらの足取りで帰宅する。

正直、どうやって帰ったのかよく覚えていない。

周囲の人間が何やかんやと話しかけてくれたようだが、これもまるで覚えていなかった。

変哲もない自宅が出迎えてくれた。

なのになぜガランと広く、そして冷たく感じてしまうのだろうか？

リビングのソファアに腰を降ろし、ただただ茫然とする。

「…そうだ。掃除しなきゃ」

ふとそんなことを口にしてみたが、ソファアから立ち上がれない。

掃除をしてしまうと、切歌の残り香まで消えてしまいそうな気がした。

見回せば、そこかしこに彼女の温もりが残っている。

最初は迷惑だと思っていた。

懐かれて鬱陶しいだけでも。

だけ。

オレの料理を嬉しそうに頬張る彼女の姿を見て、嬉しくなかったか？

以前に付き合った女性とは違い、切歌は真摯だった。

感情そのままの無邪気な振る舞いは、打算も何もなく裏表も存在しない。

いや、比較すること自体無意味だ。

彼女は、唯一の。

それはオレにとっても…。

藤堯は頭を抱える。

自分でも想像していなかったほど、彼女の存在は胸の中に焼き付いて離れようとしなない。

あ のとき、額以外にキスをしていたら、何か変わっただろうか――  
―？

今さら想いを巡らせても無意味だ。

過去の記憶を弄んでも、現実を決して変わりはしない。

認める。もはやこの世界に彼女は存在しないことを。

諦める。オレは大人なんだから。

「…駄目だ。出来ない…」

出来ない。

出来るわけがない。

意識しないように思っても、次々と浮かぶのは天真爛漫な少女の笑顔だけ。

藤堯はようやく気付く。

迷惑がっていたその実、いかに救われていたのか。

彼女の笑顔は、死と隣り合わせの仕事という現実を忘れさせてくれていたのだ。

手の中で弄んでいた原石は、手から零れ落ちて本当に価値があったものだと思ひ知る。

それは時の砂時計も同じだ。

時が流れ落ち、そこで初めて砂ではなく宝石だったことに気づく。

そんな教条めいた言葉を用い、埒もないことと割り切るには、感情が邪魔しすぎていた。

…ならば、感情のままに振る舞うしかないじゃないか。

顔を拭い、藤堯は立ち上がる。  
それからエプロンを身に着けた。

声をかけられて顔を上げると、悲壮な表情を湛えたマリアと調が立っている。

「…何やっているの貴方はッ!?!」

「見ての通りだよ」

フライパンを操りながら藤堯は答える。

「凄すぎるご馳走なの…」

調が思わず呟いたように、キッチンには異様なことになっていた。

テーブルの上に乗りきらなかった料理の数々は、リビングのテーブルでも足りず、床の上まで浸食している。

「…こうやって料理を並べれば、一緒に切歌ちゃんの思い出も頭から出ていってくれるかな、と思つて」

ポツリと藤堯は言った。

作つたのは、今まで切歌に振る舞つたものばかり。

作るたびにそのことが思い出され、少しだけ感情も満たされるような気がする。

手を止めたその時に、途轍もない虚無感の反動がくるのは承知していた。

だから藤堯は料理を止めない。ただひたすらに作り続ける。

「貴方は——ッ!」

抗う間もなく、マリアにフライパンと菜箸を取り上げられた。

「藤堯さん、もうやめてください」

調も心配そうに見上げてくる。

急に疲労を覚え、藤堯はよろめく。マリアと調が支えてソファアへと座らせてくれた。

「もしかして、ずっと料理をし続けていたわけ…?」

マリアの言に、藤堯はぼんやりと室内を見回した。

テーブルと床は料理に溢れ、所々には開封された段ボールが放置されている。

普段の藤堯家らしからぬ酷い有様だ。

「食材は全部通販で買ったんですか？」

と調。

確かに調理をする合間に、ネットで食材を注文した覚えがある。

だけど、配達員から受け取ったどうかの記憶は曖昧だ。

でも、段ボールがこうやって開封してあるのだから、間違いなく受け取ったのだろう。

肯定も否定もせず、ただぼーっとしていると、マリアと調が顔を見合わせ深い溜息をつく。

「なににせよ、不健康が過ぎるわ。少しはお日様にでも当たってこないと」

言われて、初めて外が明るいことに気づいた。

家に帰ってきたのは夜中のはず。

でも、通販で色々ものを受け取ったのは昼間だったかな。

というか、今日は何月何日なのだろう…？

気づいたときには、藤堯は公園のベンチに座っていた。

マリアと調が引つ張ってきてくれたらしいのだが、二人の姿は見当たらない。

一人ベンチに座り、なにをすることもなくひたすら空を眺める。

中天にあった太陽がゆらゆらと赤く沈み、間もなく月が当たりを照らし出す。

：人は陽光型と月光型に分けられるという。

日陰で地味に目立たないように生きたいと思うオレは、間違いなく月光型だな。

対して、彼女は間違いなく陽光型だった。

過去形で語ったことにより、凧いでいた感情がさざめく。

心の奥底に沈んでいた海竜が目を覚ましそう。

さすがに外で泣きじゃくるわけにはいかない。

けれど部屋に戻る気力もなく、胡乱に視線を彷徨わせることでささ



やかな抵抗を試みる。

公園内のブランコ。

…切歌ちゃんが乗ってはしゃいでたっけ。

砂場。

…近所の子供たちをオママゴトで遊んでやっていた。

ジャングルジム。

…さすがにスカートのまま登ろうとしたのを止めたっけな。

「…くそ」

なんてことだ。

この公園でさえ、切歌との記憶に溢れている。

その温もりから無理やり視線を引き剥がし、公園の周囲に植えられ

た木々へと固定。

隙間を流れていくテールランプとヘッドライトをぼんやりと眺め

る。

冷たい夜風が心そのものを凍えさえ、寂しさを浮き立たせては通り

過ぎていく。

…会いたいな。

ふと思った。

思わないでいようと思ったことを思ってしまったら、もはや切実

だった。

会いたかった。

無性に会いたかった。

魂でも、霊でもなんでも構わない。

あの明るい笑顔がもう一度見られるなら、オレは…！

「藤堯さん」

幻聴か？。

顔を上げる。涙で滲んだ視界が輪郭を取り戻す。

木の影から、切歌がこちらを見ていた。

恥ずかしそうな表情を浮かべている。

…これは夢か？

だったら醒めないでくれ。

切歌がこちらへ向かって歩いてくる。

藤堯は反射的に立ち上がっていた。たたらを踏んで歩き出す。

それは間もなく小走りへと変わり、小石に躓いてつんのめる。

「危ないッ！」

受け止められた。ハツとして顔を上げる。

触れた手を離し、再度腕に触った。

確かな温もりが伝わってくる。

まさか、これは、本当に、

「…切歌ちゃん？」

「はい德斯」

見慣れた、爛漫な笑顔に見下ろされた。

ひげます  
跪いた格好で、藤堯は少女の腹に顔を埋めた。

そうして腰を抱きしめる。強く。ひたすら強く。

「生きて…生きていたんだね？」

そう言ったつもりだけど、込み上げてくる嗚咽で言葉になった自信

はない。

「ごめんさい、藤堯さん」

それだけを繰り返し、切歌が後頭部を撫でてくれるのを感じた。

その温もりが嬉しすぎて、腕に益々力を込めている。

どれくらいそうしていただろう？

ふと気配を感じて振り向くと、マリアと調が、それはそれは見事な

土下座を敢行していた。

「今回はごめんなさい。本当にごめんなさい…！」

手入れの行き届いた髪が砂に塗れるのも構わず必死の様相。

あまりの光景に藤堯も思考を停止。すると彼女らの背後から苦い顔をした弦十郎たちが現れた。

「オレからも謝らせてくれ。済まなかった藤堯ッ！」

開口一番頭を下げられ、藤堯は困惑する。

こちらも併せて事態が呑み込めないでいると、マリアがおそるおそる語り出した。

「爆発の影響で、切歌の反応が一瞬ロストしたのは本当よ？ 発見したのは私たちだし。」

その上で、せつかくの機会だから、藤堯さんの切歌に対する気持ちを確認しようと思って…」

ようやく藤堯の頭が回り始める。

つまり、今回の件の大元は、マリアたちが仕組んだこと。

「その上で、オレたちも頼まれてしまってたな。一芝居打ったつもりだったが…」

もちろんマリアだけではなく、弦十郎らの発令所の面々の協力も不可欠だ。

「…つまり、全員でオレを謀<sup>たばか</sup>ったってことですか？」

「いや、一応すぐにネタばらしするつもりだったんだぞ？ なのにおまえがあんな深刻な状態になって聞く耳すら持たなくなったのは全くの想定外だな。そこで急遽切歌くんたちの帰還を急がせたわけだから…」

しどろもどろになる弦十郎の傍らで、不機嫌極まりない声が上がった。

「おいッ！ その件はあたしも聞いてねーぞッ!？」

怒りに声を震わせるクリスに、マリアはあつさり言う。

「ああ、貴女には伝えてないわ。だって隠し事なんて出来なさそうですもの」

「ぎっけんなッ！ あたしがどれだけ心配したと思ってんだッ!？」

ガンッ！ と近くのジャングルジムを蹴り上げるクリスの迫力に、ヒッ!？ と正座したまま抱き合うマリアと調。

その様子に、切歌も一緒に並んで謝ろうと身体を離そうとしたが、それは藤堯が許さない。

「…あの、藤堯さん、怒ってますデスか？」

クリスが先に怒りを爆発させてくれたおかげで、藤堯の氣勢はそれがれてしまっている。

だから、立ち上がって視線を合わせると、にっこりと笑って言った。「切歌ちゃん。この間の約束、覚えている？」

「…あー。はい、一応覚えてますけど…」

笑顔のまま、藤堯は切歌の肩に手を置いた。

さすがに切歌の顔も引き攣る。

「ちよ、ちよつと待ってくださいデス！ さすがにここでは…！」  
最後まで言わせない。

切歌の唇に、藤堯は己の唇を重ねている。

そのまま少女の柔らかい唇を割り、口腔内に舌先をねじ込んだ。

「んー、んー、んーッ!!」

パンパンと肩を叩きながら切歌が顔を離そうとするが、後頭部に手を当て、腰に手を回し、決して逃がさない。

存分に蹂躪し彼女の生を味わう。

「…ぷはッ」

ようやく顔を離せば、唇の端に唾液を光らせながら切歌はまるで酔っぱらったような表情。

どうやら一緒に腰も砕けたらしく、支えなしでは足もとも覚束ない様子。

「も、もう勘弁してくださいデース…」

息も絶え絶えに言ってくる少女の身体を抱きしめ、その耳元に藤堯は悪魔のように囁く。

「死んでも許すつもりはないから、覚悟しておいてね？」

## 第7話

休日の昼下がりに。

自宅で藤堯は優雅にコーヒーを嗜む。

窓からは陽光が柔らかく差し込み、焼きあがりを控えたケーキの匂いも相まって、実に眠気を催してくる。

これでBGMがドヴォルザークだったら確実に眠れるね。

そんな風に香ばしい液体を口に運ぶ藤堯だったが、現実には少女の金切声が鳴り響いている。

「あーもうッ！　いくら考えてもわかんないデスッ！」

わしゃわしゃと金髪をかき乱しているのは暁切歌。

昼食を一緒に済ませたあと。

参考書と教科書を並べてテスト勉強に勤しんでいる彼女だが、進行具合が芳しくないのは火を見るよりも明らかだ。

「ほら、切歌ちゃん。諦めないで、がんばれ、がんばれ」

切歌は机に突っ伏し、その隙間からキッと睨んでくる。

「だったら教えてくださいデス！」

「ヒントはあげたでしょ？　自分で考えなきゃ切歌ちゃんの力にならないじゃない」

「そりゃそうデスけど…」

そういつて唇を尖らせる切歌。

…その可憐な唇を存分に貪ってから、早半月以上が経過している。

さすがに一週間ほどは切歌も気恥ずかしいのか家に寄りつきもしなかった。

それが二週間も経つと、喉元すぎればなんとやらで、また以前のよ

うにこうやって足を運んできてくれている。

「テストで赤点とつちや進級出来なくなるんだよ？ 留年して卒業も出来ないようじゃ、大人にはまだまだ遠いなあ」

言いながら藤堯は席を立つ。

切歌は不満そうな顔のまま、

「アタシだって、なんかご褒美があれば頑張れるんデスよ？」

「はい、オレンジシフォンケーキ」

「…藤堯さんはアタシにお菓子さえ出しとけば満足していると思ってないデスか？」

「うん」

「まさかの即答デスとツ!？」

たつぷり生クリームを載せたウインナーコーヒーも出してやると、切歌はぐびりと喉を鳴らす。

「ほら、冷めないうちにお食べよ」

「っーん」

へソを曲げたのか、そっぽを向く切歌。

藤堯は苦笑して、

「本当にお菓子で釣ろうなんて思っていないってば。甘いものは脳を動かす栄養になるんだよ？」

「…そ、それなら食べなきゃ駄目デスよね！」

態度を一変させ、さっそくシフォンケーキを頬張る切歌がいる。

きつと調あたりなら「切ちゃんは基本ちよろいの」などと評したのとだろう。

もつとも今の藤堯にとっては、そんな子供っぽい態度すら愛おしくて仕方ない。

「御馳走さまデス」

手を合わせてくる切歌に、

「これで週明けのテストは頑張れるかな？」

「そんな未来のことは分からないデス！」

べーつと舌を出された。

「未来のこと、ねえ…」

一方で藤堯が案じた未来のビジョンは異なる。

今はこの子の隣に自分がいる。しかし、将来はどうだろう？

そんなことに思いを馳せると、なんとも背中がむず痒い。

「とにかく、ご褒美デスー！ アタシは目標がないと頑張れない子なんデスー！」

切歌が身体ごとこちらを向いて、地団駄を踏んだ。

その拍子にスカートの裾がまくれ上がり、慌てて手で押さええている。

恥らう姿に今までと違って仄かな色気を感じるのは気のせいだろうか？

いや、おそらく間違いではないだろう。

頬を染めて唇を軽く噛んでの上目使いは、明らかに何かを期待している。

：確かに、夜の公園で大人のキスをしたのはやりすぎだったと思うし、切歌の性的感覚を過剰に刺激してしまったことは否めない。

状況的にも、二課の面々の前で敢行してしまった点は大いに反省すべきだった。

実はあのあと、弦十郎にやんわりと釘を刺されている。

『うむ、その、分かっていると思うが、ほどほどにな…？』

きつく言われなかったのは、騙した側の負い目だろう。いくらすぐにネタバレするつもりだったとはいえ、公務を使ってまでのドツキりはさすがにやりすぎと藤堯は思う。

しかし仮に激怒して追及したところで、行き着く先は人間関係の不協和だ。

納得してはいないが一旦は鉾を取めよう、と藤堯は大人の判断を下す。こちらもちちらで熱を冷ます必要があったし。

でも、まあ、せいぜい相手に後ろめたい思いをしてもらおうさ。

マ保護者サイドの反応も弦十郎たちに準じたが、負い目という点では更に大きい。なにせ主犯格だ。

実際に切歌にキスをかました時も、マリアと調、二人揃ってアワアワしているだけで、面向かって苦言を呈されることはなかった。

後にこうやって切歌が単独で訪問することも特に制限していないようだし。

それはともかく、弦十郎の懸念するところは藤堯も十二分に理解している。

シンフォギアは纏う装者の心象心理を具現化する。

男性との恋愛、ひいては肉体的接触が、装者の心象をどのように左右するのは全くの未知数だ。

多少大袈裟に言えば、自分の切歌に対する行動が、装者の戦闘に、ひいては世界平和への影響を与えてしまう可能性があった。

もちろん藤堯とて男だ。キスだけで収まりがつかないほどの本能を持つている。

しかし切歌は装者であり、まだ学生という立場。

そして藤堯自身の社会的立場も鑑みれば、本能が理性を凌駕することとはなかった。

普通に社会人が女子高生をどうこうするのは犯罪でもある。当面は一線を越えるわけにはいかないだろう。仕方ないことだ。

少女が大人になるまでの貴重な時期を身近で愛でられる立場にいる、と精々自分を慰めてはいたけれど。

「しかし、ご褒美ね…」

切歌の期待に応えたいが、あまり性的なものはよろしくない。

しばし中空に指を彷徨わせ、藤堯はタブレットを操作する。

目当てのサイトがまだ受付中であることを確認し、切歌へと言った。

「よし。じゃあ来週のテストが自己採点で平均点以上だったら、ご褒美にデートに連れて行ってあげよう」

「デートデスカッ!?!」

切歌の目の色が変わる。

「わっかりましたデス! 約束したデスからねッ!?!」

「ああ、もちろん」

鷹揚に頷く藤堯の前で、切歌は猛然と参考書へ向かいあつたが、間もなく顔を上げて、



「ってゆーか！ 自己採点で平均点なんか出るわけねーデスよッ!?」

「あ、やっとな気づいた?」

「…藤堯さんって時々意地悪デスねッ!」

「それも今頃気づいたの?」

ぷんぷんと頬を膨らませる少女の後頭部に手を当て、引き寄せる。

それから顔を近づけると、切歌は慌てて目を閉じた。

その様子に内心で苦笑しながら、藤堯は切歌の唇の端についていた生クリームを指できゅつと拭った。

目を開き、きよとんとした顔になる切歌に笑いかける。

「じゃあ、自己採点で全教科70点以上取れたらに変更しよう」

「それって逆にハードルあがってないデスカッ?」

テスト終了後、切歌より自己採点で70点を越えたとの嬉しそうな報告があった。

約束を履行すべく、藤堯は例のサイトの予約を確定。

そしてデート当日。

車で迎えに乗りつけた藤堯の姿を見て、切歌は目を丸くしている。

「藤堯さん、その格好…」

今日の藤堯はグレーのスーツ姿。

対して切歌の格好は、紺色のブラウスに純白のフレアスカート。

初デートで買ってあげた装いだ、さすがにスーツと並ぶと幼い印象が否めない。

「あ、あの！ 着換えてきていいデスカ!?!」

切歌もその不釣り合いさに気づいたらしい。慌てて自宅へ引き返そうとするが、藤堯はその手を掴んで構わず助手席へと連れ込む。

「そのままで大丈夫だから」

不安げな眼差しを向けてくる切歌を連れてまず向かったのは、駅前

のとある高級ブティック。

「え？ え？」

展開についていけない切歌を連れて入れれば、店員がうやうやしく頭を下げてきた。

「藤堯さまですね。承っております」

「はい、よろしく願います」

頭に？マークを浮かべたままの切歌を店員に渡す。

店の隅のソファアームに座って待つことしばし。

緑のミニドレスに身を包んだ切歌が現れた。

「うん、思った通り似合っているね」

本心から褒める。事前に調べ、準備した甲斐があるものだ。

「そ、そうデスか…？」

照れる切歌だったが、急に表情を改める。

「でも、こんなお洋服、高いんじゃない？」

藤堯はにっこりとして、

「ご褒美だよ。気にしないで」

切歌は感激した表情を浮かべた。その瞳はかすかに潤んでいる。

そんな目で見られただけで、高い買い物をした価値があると思う。

だけど、今日のメインイベントはここからだ。

夢見心地の切歌を乗せて次に藤堯が向かったのは、近場の有名ホテル。

車から降りるときドギマギしていた切歌も、向かった一階のその

コーナーで華やいだ表情になった。

ディスプレイされている幾つものウエディングドレス。

それを着ることが永遠の女性の憧れだそう。

切歌も例にもれず瞳を輝かせて見入っている。

ついでそのコーナーの看板を読みとって、目に見えて狼狽した。

「ふ、藤堯さん、ここに…！」

「見ての通りブライダルコーナーだよ？」

おそれおののく切歌を横に、藤堯は近づいてきたプランナーらしき女性に挨拶。

「予約した藤堯ですが」

「はい。本日はようこそおいでくださいました」

「多分に将来的な話ですが、一応見学してみたいかなと」

予め考えていた通りの内容を依頼する。

「承りました」

慇懃に頭を下げ、プランナーは藤堯の影に隠れようとする切歌も見て笑顔で挨拶。

「ささ、こちらへ。さっそく案内させて頂きます」

まず見せられたのは施設設備。

チャペルから始まり、披露宴会場を見て回る。

何人まで収容可能であるとか、ゴンドラや音響といった演出のオプションの説明がなされた。

ついでに、新郎新婦の控室も覗かせてもらった。

興味本位だけで気楽な藤堯の隣で、切歌は実にぎくしゃくときこちない。

「…ひよつとして緊張している?」

「当たり前デス! だって急にこんな…ッ!」

怒っているような喜んでいるような複雑な表情を見せる切歌と一緒に、テーブルコーナーで椅子を勧められた。

紅茶を振る舞われ、プランナーは笑顔で幾つもの冊子を示してくる。

「御参考までに、一般の挙式プランの見積もりと、その他オプションの値段となっております」

「ふむ」

噂には聞いていたが、なかなかどうして値が張るものだ。

横から覗きこんだ切歌に至っては、並ぶゼロを数えて目を丸くしている模様。

「ありがとうございます。参考にさせていただきます」

「いえいえ。こちらこそお役に立てれば幸いです。…と、そろそろ準備が出来たようですね」

切歌の目がますます丸く大きくなる。

これ以上、一体なにを準備されているというのか？

その気持ちが手に取るように分かるだけに、藤堯は笑いをこらえるのに苦労してしまう。

案内されたのは、先ほどの披露宴会場の一角。

そこには、既に幾つものカップルがテーブルへと着いていた。

藤堯たちもテーブルへと着くと、早速料理が運ばれてくる。

スープと前菜から始まるフルコースだ。

「どう？ 切歌ちゃん、美味しい？」

「お、美味しいことは美味しいデスけど…」

最近のホテルのブライダルフェアなどでは、試食会ということでも、無料、もしくは格安でカップルに料理を提供するところが多い。

それを当て込んでの、いわゆるブライダルフェアデートと洒落込んだつもりだ。

「やー、このホテルのシェフは有名な人でね。一度料理を食べてみたいと思ってたんだ」

メインのフォアグラ料理にしても、滅多に食べられない食材である。

素直に堪能していると、切歌がおそろおそろ尋ねてきた。

「ひよつとして、藤堯さんは単に料理を食べただけなんデスカ？」

問われ、藤堯はニンマリと笑い、

「…本当にそれだけだと思う？」

ナプキンで口元を拭ってからとそう答えると、切歌は目を白黒させて俯いてしまう。

そうやって頬を染めたまま、デザートが来ても顔を上げようとはしない。

「このスイーツも有名パティシエの逸品だよ。食べないの？」

「そんなの、喉を通るわけじゃないじゃないデスカ！」

小声で言い、上目使いで睨んでくるような切歌。

彼女の内心は完璧に把握済み。

もつともそう含みを持たせるよう仕込んでいるわけだから、ある意

味マッチポンプだ。

そして、そんな彼女の反応を楽しんでいる自分がいるわけで。

「も、もしかして、ふ、藤堯さんは、将来的にアタシと、その、け、け、けっ、コケッコーツ!?」

顔を真っ赤にしながら意味不明な悶絶声を上げる切歌。

そりやあいきなりブライダルフェアに連れてきたらそう思うよな、なんて藤堯は眺めている。

「まあ、考えてないわけではないかなー」

「…ツ！」

切歌は顔を上げる。

「でも」

藤堯はワイングラスからミネラルウォーターを口に含む。そして澄まして言った。

「そんな未来のことは分からない、でしょ?」

切歌は一瞬ほかんとし、それから実に恨めしそうな声。

「…やっぱり藤堯さんは意地悪デスッ」

後日、正式発表されたテストの結果では、切歌は全ての教科で平均点ぴったりを取っていた。

バツの悪そうに答案用紙を渡してくる切歌に、受け取った藤堯は天を仰いでぼやく。

「自己採点とはなんぞや」

## 第8話

帰宅すると、玄関先にローファーとハイヒールが揃えられていた。

…勝手に上り込むのは、本当に勘弁して欲しいな。

溜息をつきつつリビングへ行けば、そこには予想通りマリアの姿が。

「…あれ？」

藤堯が思わずそう声を上げてしまったのは、マリアの隣にいるのが調だったことだ。

てつきり切歌と一緒に来たとはびっくり思っていたのに。

「ああ、お帰りなさい。お邪魔させてもらっているわ」

そういったマリアの表情も声も硬い。

隣の調の神妙な顔つきも見限り、きつと切歌に関してのことだろう。

そしておそらく、お小言か何かのたぐいに違いない。

「今日は尋ねたいことがあってきたの」

ほら、来た。

「単刀直入に訊くわ。貴方、昨日、切歌に何をしたの？」

「昨日って…」

先日は日曜日。

切歌たつての希望で遊園地に遊びにいった。

それだけだ。

藤堯がそう答えると、

「本当？ 本当にそれだけ？」

マリアが必死の形相で食い下がってくる。

その表情にややたじろぎながらも、藤堯は回想。

切歌は、いつもと特に変わったところはなかったと思う。

ああ、そういうえば、観覧車に乗っているときに不意に頬にキスをされたっけ。

切歌は顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。

もつと凄いキスをしたことに比べれば健全すぎる反応だったが、それが本来の女子高生というものだろう。

観覧車という密室とはいえ、藤堯とてそれ以上の行動で返すつもりもなく。

お互いに照れくさそうに窓の景色を眺め続けて下車したのは、まるで青春ドラマの一場面のようだったと思い返して自嘲しているほどだ。

「本当にそれだけだよ。遊園地で遊んだあとは、まっすぐ家に送ったし」

「…本当に？」

「疑うんなら、本部の車を使っているからトレーサーも機能してはくはずだ。走行履歴を見てもらっても構わないよ？」

さすがにムツとして言い返すと、マリアはしぶしぶと引き下がった気配。

代わりに心配そうな表情を浮かべた調が、さすがのように言ってくる。

「今朝になってから、切ちゃん、ずっと自室から出てこなくて…」

調の語るところによれば、朝食の時間になっても起きてこず、様子を見に行ってもずっと自室のベッドで布団をかぶってうずくまっているとのこと。

マリアと色々と声をかけるも、どうも反応は芳しくない。

おまけに時折、ぐずぐずと涙ぐむ声も聞こえるものだから、マリアたちは外部に原因を求めるといった次第。

「うーん…」

藤堯は腕組みをして考え込む。

昨日の帰り際だって「今日はとても楽しかったデス！」と満面の笑

みを浮かべて別れているのだ。

それから急転直下の変化に対し、心当たりといわれても思い当たらない。

それでも、なんとなく、原因の一端は自分にあると考えてしまうのは自惚れだろうか？

「わかった。取りあえず、オレも切歌ちゃんと話をさせてもらっていいかな？」

「お願いします」

調の表情が少し明るくなるの確認して、藤堯は携帯電話を引っ張り出す。

電話帳を表示し、切歌の携帯電話の番号を検索しようとして、

「…あ、オレ、切歌ちゃんの電話番号知らないや…」

藤堯としては呆れつつ苦笑するしかない。

考えてみれば、全て直接顔を合わせてのやりとりに終始していた。

まるで携帯電話の存在しない前世期のラブコメ漫画みたいだな。

お互いに特に気にしていなかったのは、なんとも。

「あ、それなら私の携帯電話で…」

調の差し出してくる端末を断り、藤堯は笑って見せた。

「ありがとう。でも、もしよければ今から君たちの家にお邪魔させてもらって直接話してみたいんだけど、構わないかな？」

切歌と調の暮らすマンションにやって来たのはこれが初めてではない。

それでも、私室へ入るのは少しばかり緊張する。

「切歌ちゃん、入るよ？」



一応、ノックしてから扉を開けた。

薄暗い室内は、年頃の女の子らしく甘い香りがする。視線を巡らすとベッドの上の塊がびくりと動く。

「…切歌ちゃん？」

「藤堯さん…」

切歌がいた。どうやら膝を抱え、その上に布団を羽織っているよう。う。

藤堯は散らばったティーン雑誌や少女漫画を踏まないようにしながらベッドの方へと歩く。

ベッドへ腰掛けると、布団の隙間から出た金髪の頭にポンと手を置いた。

「閉じこもっちゃってどうしたの？ マリアさんに調ちゃんも心配しているよ…」

「……………」

ぐしぐしと髪をかき回してやるが、反応が悪い。

いつもなら、手に頬を押し当てて来るくらいなのに。

それでもじっと待っていると、切歌が顔を上げた。

薄暗い中でもはつきりと分かるほど目が赤い。頬も涙でごわごわだ。

予想以上に深刻な様子に、藤堯も少し驚いてしまう。

「…藤堯さん」

「うん？」

「あの、アタシと藤堯さんは恋人同士デスよね？」

「ふぁッ!？」

咄嗟に藤堯が返答できなかったのは、何も不実なわけではない。

恋人同士という青春ワードが実に久しぶりな上に照れくさく、しかもそれを真正面からぶつけられて動揺してしまっただからだ。

「い、一応、そのつもりだけど…？」

それでもどうにか態勢を立て直し、しどろもどろながらも肯定する。

切歌と同年代ならともかく、この歳になると純粋な物言いを口にす

るのは恥ずかしいものだ。

言葉にしなくてもそれとなく察っして欲しいと思うのは、大人の我儘だろうか？

すると、切歌の赤い目に、またジワリと涙が滲む。

「ど、どうしたの？」

慌てる藤堯に、切歌はえぐえぐと泣きながら、

「…雑誌や本に書いてあったんデス…」

「え？」

「初恋は実らないって…！」

「……………」

あー。

非常に、とても良く、切歌の泣いている理由が分かった気がする。彼女の初恋の相手が自分であるということは光栄だ。

同時に照れくさく、なんとも妙な気分を催してきたが、今はとりあえず慰めるのを優先しよう。

「えーとね、たとえ本に書いてあっても、誰が書いたか分からない言葉なんて信用しなくていいんじゃないかな？」

「でも！ クラスの女の子たちからも同じこと言われたデスよ!？」

「…それって、いっつも仲良くしている女の子たちから言われたの？」

そう訊ねると、切歌は虚を突かれたように軽く小首を傾げた。

「あんまり一緒に遊んだことかない子たちからデスけど…」

「…それも気にしなくていいと思うよ？」

うん、たぶん妬まれているんだよ。

率直に告げるには、切歌は無邪気すぎる。

この子に、変に他人を恨むような真似をさせなくなかった。

そつと肩を抱き寄せると、切歌は胸にコツンと額を当ててくる。

「けれど、藤堯さんは滅茶苦茶頭がいいのに、アタシはおバカだし…！」

要は、釣り合っていないという意味だろうか？

藤堯は苦笑して、

「そんなの関係ないよ。そういうところも全てひっくるめて切歌ちゃん

なんだし」

暁切歌という少女の個性に、藤堯は強く惹かれていると思う。装者という意味でも、彼女の存在は無二だ。

その戦いを今まで身近に見てきたものとして、地頭の良さなどどれほどの意味があるだろう？

「それってフォローのつもりデス…？」

ようやく少しだけ切歌は微笑んでくれた。

しかし、すぐにその表情は曇らせてしまう。

「でも、それだけじゃないんデス…」

「どうしたの？」

藤堯が再度尋ねると、瞳を潤またまま切歌は言った。

「その…マリアも調も、藤堯さんも、いずれはみんな死んじやうデスよね？ いなくなつちやうんデスよね？」

なんとも唐突の物言い。

しかし藤堯は動じずに微笑み返す。

「オレは今ここにいるよ？ それじゃ駄目なのかい？」

安心させるように手を握ってやる。握り返してくる手は震えていた。

「違うんデス！ みんなとずっと一緒に居たいんデス！ でも、必ずみんな死んじやうんデスよね？ そんなのは嫌なんデス！」

切歌の言っていることは支離滅裂に思える。

人は必ず死ぬ。それは自然の摂理だ。

むしろ幾つもの死線を潜り抜けてきた彼女たちの方が、よほどのそのことを弁えているだろう。

にも関わらず、切歌は必死で訴えてきている。

この矛盾に、藤堯は、彼女が本当に言いたいことを正確に類推していた。

そうか。そういうことか。

理解して、心が痛んだ。そして思う。

ああ、本当にこの子は子供だったんだな、と。

「オレが子供の時に見たのはテレビでね、国营放送の番組だったと思

う」

「……………？」

「その番組は、タンチョウの特集だったんだ。タンチョウって、知ってるかい？」

首を振る切歌に、藤堯は説明する。

鳥綱ツル目ツル科ツル属に属する鳥類。金魚にもタンチョウという種類があるため、タンチョウツルといった方が一般的に分かり易いだろう。

もつともこの知識は後年になって得たものだ。

幼少の頃にテレビで目にしたのは、タンチョウという鶴の凜として儂げな姿形。それと二羽の夫婦を長い尺で撮影したドキュメンタリー。

タンチョウツルは、いちど番つがいとなった雄雌で一生を過すごすという。仮に片方が病に倒ればその場にとどまり看病をし、死んだとしてもそのままそこを去ろうとせず、風雪が死骸を隠してしまったり、あるいは雨に流されてしまつて、初めてその場を去ると語られていた。もつともこれは通説で、今ではそこまで一途ではないと証明されている。

しかし、古来より、永遠の愛の象徴として扱われていたことは間違いない。

少年であった藤堯が映像より感じ取ったのは、タンチョウのそんな生態に基づくものではなかった。

ただ仲良く子供を育てる夫婦のタンチョウを見て、漠然とした不安を抱く。

続いて急に悲しくなつて泣いていると、何事かと母親が駆けつけてきてくれた。

どうしたの、と尋ねてくる母親に、藤堯少年が口にした台詞は、切歌のものと酷似している。

『お父さんもお母さんも、いつかみんないなくなつちゃうの？』

タンチョウの夫婦に見たのは、幸せという概念のようなもの。

しかしそれも、番の死という形で終わりを迎える。

生きているものは必ず死ぬ。

そんな当たり前のことを、少年が初めて理解した瞬間だった。だからといって自分が死ぬことを恐怖したわけではない。

いま、自分の周囲を満たしている幸福な環境から、愛すべき人たちがいずれは必ずいなくなってしまう。そのことを恐れ、悲しく不安に思って泣いたのだ…。

「藤堯さんもそんな風に考えたことがあるんデスか…」

素直に耳を傾けていた切歌の眼差しは、少し落ち着いてきた様子。

その華奢な肩を抱く手に力を籠めながら、藤堯は思う。

自らが語ったことを切歌に当て嵌めれば、今となってようやく彼女は幸福な環境を手に入れたことを意味する。

切歌の生い立ちは決して幸福とは言えない。幼少の頃に拉致され、便宜上の名前が切歌となっているが本名も素性も不明のままだ。

だが、マリアや調たちと過ごしてきたレセプターチルドレン時代すら包括して不幸と断ずるのは失礼だろう。

もつともこれは多分に切歌の主観に左右されるだろうから、藤堯の分析は余計なお世話なのかも知れない。

なので、藤堯がより深く思いを馳せているのは、以前彼女が仲間たちに残した遺書のような『てがみ』のこと。

フロンティアごと海中に没したと思われるその文書の再生に、藤堯も一役買っている。

かなり独特な文章表現や内容はともかく、その背景に存在する精神的傾向が、藤堯にとって強く印象に残っていた。

かつてのF・I・Sとしての活動は、世界を月の落下から救済するという目的が存在した。

その大義のために、レセプターチルドレンの全員が、己の命を賭ける信念と覚悟を持っていたことは分かる。

それは逆説的に、目的のためならば自分の命も惜しくないということ。

つまるところ、切歌の『てがみ』に記された陽気とも思われる文章の裏に藤堯が感じたのは、己の命に対する無頓着さ。自分の死は怖く

ない。それでいて調やマリアたちの身を心底案じていることに、歪いびつさを感じずにはいられなかった。

その視点から見れば、普段の能天気すら思える明るく奇抜な言動も、死に対する無意識の防衛反応の現れなのかも知れない。

そう分析し、なるべく関わり合いを避けるつもりでいた切歌とこうも深い関係を結んでしまったことを、藤堯は半ば自虐めいた気持ちで眺めている。

…このオレが、まさかこんな歳の離れた子に、ね。

だが、決して後悔しないと思う。

そして、この子を出来るだけ幸せにしたいとも思っている。

願わくば、彼女にも後悔させたくないものだ。

「切歌ちゃんの言うとおり、人は必ず死ぬんだ。それは絶対に避けることは出来ない」

「……………はいデス」

「それが嫌だからって、その日まで何もしていないわけにはいかないだろ？ だから、みんなと一緒に色々なことを楽しむんだよ。それが生きるってことなんだ」

力説はしたものの、もうちよつと気の利いたことは言えないのかオレ、と藤堯の内心は少し情けない。

「…藤堯さんは、アタシと一緒にいて楽しいデスカ？」

「そんなの、今さら言うまでもないでしょ？」

切歌の額に手を当て、髪を掻き上げてやると、ようやく彼女の顔が明るくなる。

よし、いい感じだ。

「それにね、人は死んだからって、全てが無くなるわけじゃない。そのことは切歌ちゃんたちが一番知っているんじゃないかな？」

「え？ どういう意味デス？」

「ナスターシャ教授のこと、切歌ちゃんたちは忘れるわけがないよね」

「もちろんデス！ マムのことは絶対に忘れるわけなんて…あッ！」

ハツとした顔つきになる切歌に、藤堯は笑いかける。

「中井英夫って作家さんは知っているかい？」

「…ごめんなさい。不勉強デス」

「いや、まあ、晩年はかなりエツジの効いた生き方をした人だから、別に知らなくてもいいんだけどね。この人は、最愛の人から、死んだらどうなる、って尋ねられててこう答えたとか記されているんだ。『死んだら、他人の心の中へ行く』ってね。いい言葉だと思わない?」

「……………」

切歌は無言だったが、柔らかく頷いている。

「人は他人から覚えていてもらえる限り、ずっと人の心の中で生きられるんだと思う」

「…藤堯さんも、アタシが死んだらずっとアタシのこと、覚えていてくれるデスか?」

「うん、それ無理」

につこり笑って即答。

目を白黒させて絶句する切歌に、

「だって、これからもずっと一緒に生きるんだからね。それに、死ぬのなら、年上のオレの方が先だって」

手を振って、カラカラと笑って見せる。

すると、ぽかんと口を開けた切歌の顔が、たちまち真っ赤に染まっていく。

その様子に藤堯は首を捻った。

あれ? なんだろう、この反応。単に当然のこと言っただけなんだけどなあ…。

「ふ、ふ、ふ、藤堯さんッ!」

「うん、どうしたの?」

「そ、そ、それって——」

「??」

もはや切歌は布団をかぶっていない。薄手のパジャマ姿でワタワタと手を振り回し狼狽している様子。

彼女のそんな姿に目のやり場に困っていると、背後から声が。

「それくらいにしておいて貰えないかしら?」

振り返ると、腕組みをしたマリアが居た。

その横では、頬を両手で覆って真っ赤な顔をしている調もいる。

「ふ、二人ともいつからそこに!?!」

「最初からいたわよ」

うんざり顔をするマリアに、そういえば切歌の部屋の扉を開けたあと、閉めてはいなかったことを思い出す。

くっ、なんて叙述トリックだ! と藤堯は一人悶絶。

観客がいたとも知らず、滔々と自説を披露してしまったのも小っ恥ずかしいが、傍目には切歌とイチヤツについて見えていたであろうことが何より痛恨だ。

「まったく、聞いているほうが恥ずかしいわ。あー暑い暑い」

そういつて手でパタパタと仰ぐマリアに、部屋から出ていくよう指示された。

まあ、確かに当初の目的は達したみたいだから、長居は無用かも。部屋を出て行くとき調とすれ違ったが、物凄い目つきで睨まれる。背筋が凍るような感覚を受けている藤堯に、マリアは言う。

「それじゃ、日取りは改めてあとで伝えるから」

切歌の私室の扉は閉ざされた。

中から何事か話し合う声が聞こえたが、立ち聞きする趣味はない。…こうやっていてもしょうがないな。夜も遅いことだし、帰ろう。

マンションを辞した道すがら。

藤堯は先ほどのことを思い出さないようにする。

詳細に思い出したら、恥ずかしさのあまりに何事かを叫んでしまっそうだった。夜道でそんなことをしたら怪しいことこの上ない。

努めてぼーっと歩きながら、ふと藤堯は思う。

そういえば、マリアさんが言っていた日取りってなんのことだろう

…?



そして、『その日のお昼に行くから』とマリアから指定された当日。一体なんなんだろう？ と首を捻りつつ、それでも「食事も作っておいて」というリクエストに応えた藤堯は、玄関チャイムの音を聞く。「いらっしやい…」

とドアを開けて、藤堯は一瞬茫然としてしまう。

そこには、髪を結びあげ、振袖姿の切歌が立っていた。そしてその背後にいるマリアと調も、上品そうな付け下げを着ている。

その珍しくも華やかな姿に驚いていると、マリアから溜息をつかれた。

「呆れた、なんて格好しているの貴方は」

「い、いや、それ以前に何の集まりなわけ？」

狼狽しつつ疑問を投げかけると、和装姿の三人の背後から新たな人影が。

「おう、藤堯ッ！」

「司令!？」

「おまえ、まだそんな格好しているのか？」

ダークスーツを着た弦十郎に、マリアと同様のことを言われてしまう。

一向に事態が呑み込めないでいると、マリアに軽く睨まれる。

「まずは中に入れて貰えないかしら？」

「あ、はい、どうぞ」

しやなりと草履を脱ぐマリアの所作は完璧だ。

調も完璧な動作で草履を脱いだが、藤堯と目が会うと真っ赤な目で睨んでくる。

綺麗な髪飾りをつけた切歌の顔に薄く化粧がしてあることに見惚れていれば、弦十郎に背中を押されてしまった。

「ほら、何をグズグズしている？ さっさとスーツでも着替えてこいッ！」

なんで自宅でスーツ？

疑問に思いながらも、司令の命令であれば否応もない。ブラックスーツに袖を通しリビングへ戻ると、なにやら厳かな雰囲気。

なんとなく流れで正座する三人娘の対面に座れば、上座に座った弦十郎が尋ねてきた。

「藤堯、おまえ御両親はどうした？」

「そりや実家にいますよ」

「…略式も略式みたいなものだからか？ それでも構わないのか、おまえは？」

「司令が仰っていることが良く分からないんですが」

「よく分からないって、結納のことだぞ？」

「…結納？」

意味を脳内で検索する。

——結納。

男女が結婚を約束すること。

意味は理解できたが、目の前の光景と結びつかない。

「あの…誰と誰の結納なんで」

「貴方と切歌に決まっているでしょッ！」

マリアの大喝に、藤堯は正座のまま後方へ仰け反る。

「ちよ、ちよっと待って下さい！ なんでオレと切歌ちゃんが…」

「この間、切歌の部屋でプロポーズしていたでしょうッ!？」

マリアに詰め寄られ、藤堯は過去の発言も検索。

先日、切歌の部屋で彼女を慰めた記憶を辿る。

でも、そんな発言をした覚えは…。

「…藤堯さんはこれからもずっと一緒に生きてくれるって、約束してくれたデス！」

頬を染め、上目使いで断言してくる切歌がいる。

マリアが威勢の良いままに注視してくるし、調に至っては呪い殺そうとするかのように睨んでくる。

果たして、この状況で、あの発言はそういう意味じゃ…と撤回できる男がいるだろうか？

顔を青ざめさせる藤堯の肩を、力強く抑える手がある。

「いや、まさか藤堯に先に年貢を納められるとは思わなかったぞ」

そのままはっはっはと朗らかに笑う弦十郎は、悪意がないだけに余計タチが悪い。

「ともあれ、切歌くんを任せる相手としては、仲人の俺も大安心というところだな」

光速で埋め立てられていく外堀の音を、藤堯は確かに聞いていた。

だが、その明晰な頭脳を持つてしても、事態の推移に理解が追いつかず、結果として固まるしかない。

おそらく世界有数の処理能力を誇り、それを滞らせた男に、切歌は三つ指をついて頭を下げてくる。

向日葵を模した髪飾りが、金色の髪の上でシャランと揺れた。

「どうか末永くよろしくお願いしますデス」

## 第9話

「婚約者のいる身って、どんな気分？」

友里に悪戯っぽい表情で訊かれ、藤堯はしかめっ面で応じた。

「自分でも良くわからないよ」

投げやりも極まった口調だが、紛れもなく本心である。

先日、自分がフリーズしている間に、<sup>つつが</sup>恙なく結納は進行したらしい。

ようやく正気に戻って抗議の声をあげようにも、あの流れに逆らえるのは、極限の阿呆か自殺志願者の二択でしかなかった。

それでもどうにか手綱を引き戻そうと弁を左右にした結果、

- ・ 籍を入れるのは切歌が卒業してから
- ・ 結婚式もその後
- ・ 当面は婚約という格好で

以上の三点の言質をもぎ取ることに成功。

： 何度思い返しても、全然勝ち取れた感じがしないのは何故だ。いくら足掻いても結末は決まっているからだろうか？

そりゃあ自分とて結婚願望がなかったわけではない。同期で既に家庭をもっているやつだっているし。

だ と し て も、 ま る で  
Large Hadron Collider並みに、オレの人生  
は加速していない？

発端の切歌とデートをしてから、それほど時間は経ってないはずなのに、もう人生の墓場だ。

そんな急激に定まった将来を受け入れるまでには、時間が必要だっ

た。

オレだって、心の整理をつける時間が欲しいのだ。

切実にそう思い自分を慰めているも、事態が好転したわけではない。

むしろ切歌の卒業まで二年ほどの猶予があるせいか、やらなければならぬことが幾らでも脳裏にリストアップされてくる。

何はともあれ両親に報告と挨拶は外せない。親戚回りもしなきゃ。

友人知人にも、一応通達はしなければならぬし、やっぱり葉書でいいのかな？

一緒に住むなら今の官舎より広いところへ。家族用の官舎か、それとも他のマンションか？

結婚式をするにしたって、身内だけで挙式とか神式とか幾つも選択肢がある。

披露宴をするなら誰を招待するか選別しなきゃだし、日取りに会場や予算、ドレスの選定なんかも含めて決めることはどれだけある？

そもそも装者の秘匿性からして、どこまでオープンにしているもんなんだよ？

この時ほど自分の分析能力が疎ましく思えたことはない。

それらを解決する手段も当然のように考察できるが、どれもとても楽しめる内容ではなかった。

なので藤堯は、それらの思考をまとめて一旦棚上げし、遮二無二仕事に邁進していた。

人、それを逃避行動という。

もちろん、藤堯のそんな心理は、友里には見透かされていたらしい。半ば呆れたような声で言われる。

「別に誰からも責められているわけではないでしょうに。もつと堂々としていたら？」

そう言われても、藤堯の中の後ろめたさは浄化されていなかった。

第一に、切歌が未成年であるという一般常識的な観点からの罪悪感がある。

おまけに大分歳も離れているものだから、大人の男が若い娘を誑か

している、というのが世間的な目線というものだろう。

加えて、ある意味職場婚に近い現状であることも、藤堯の不安を煽ってやまない。

ことS・O・N・G・内に於いて、装者は人類の守護者であり、誇りある同僚でもある。

彼女たちの活躍を娘のように見守り、或いはアイドルのように崇める職員がいなくてもなかった。

将来的には、そんな装者の一人である切歌を藤堯が独り占めしてしまふような形になるわけで。

その時、他の同僚や職員はどんな反応を示すのだろうか？

素直に祝福してくれるだろうか？ それとも職務上にかこつけて、と非難されるだろうか…。

思わず漏らした藤堯の弱音を、友里は黙って聞いていた。

しかし間もなくその唇を笑いの形に吊り上げ、叱り飛ばすように言ってくる。

「そんなこと気にしていたわけ？ …誰もが自分のことはよく分らないってのは本当なのね」

その声音に僅かな寂寥が混じっていたのだが、いっばいっばいの藤堯は気づくどころではなく。

「そんなことってのは言いすぎだろッ」

「いいから怒らないで聞いてね。言葉は悪いけれど、今回の切歌ちゃんとの結婚は、厄ネタが片付いたと思われているわ」

「な…ッ!？」

思わず腰を浮かしかける藤堯を、友里は片手を上げて制す。

「冷静になって考えてごらんなさい。他の装者たちはともかく、切歌ちゃんと調ちやんが普通の恋愛から結婚なんてできると思う？」

「そんなの、出来るに決まっているじゃないか」

オレたちみたいに、などと胸を張れるほど、藤堯も心臓は強くない。

切歌と調がまるで異性同士のような強い紐帯を見せびらかしていたのも今は昔。

実際に学校に通い、学生生活を送り、学友と遊びにいたりしてい

る。

その延長の果てに、一般の男子と恋愛関係を結ぶ可能性は人並みに存在すると思う。

しかし友里は、軽く睫毛を伏せることで否定を示した。

「ネットクとなるのは、あの子たちの過去よ」

物心がつく前にレセプターチルドレンの素養ゆえ極秘施設に拉致される。

F・I・Sを名乗り起こした行動は、一時期国際的なテロと断定され、未成年なのに死刑を適用される寸前だった。

「そんな過去を相手に馬鹿正直に伝える必要なんてないだろう!」

自分でもよくわからない憤りを覚えながら、藤堯は半ば叫んでいた。

マリアは国連のエイジエントだったというカバーストーリーを持っている。

彼女みたいに、適当な過去の話を作ってあげれば…。

「じゃあ訊くけど、嘘の過去を抱えて一生黙ったままなんて、切歌ちゃんに出来ると思う?」

「あ…」

あの明け透けな少女にそんなことが可能かと言えば、藤堯をしてもNOと断言せざるを得ない。

口に出さないまでも、例の『てがみ』のような文章くらいは確実に残しそうだ。

一方、調なら平然としてそうな気がする。…いや、偏見だ、止めておこう。

「仮に一般の人が彼女の全てを承知して受け入れようとしても、人生そのものに制限を受けることになる。その意味でも切歌ちゃんの相手は、事情を知る人間くらいしか成立しない…」

悔しいが、友里のいうことは正論に聞こえる。

切歌を切歌のままでもいいさせるなら、彼女の過去を全て知ることが許される関係者と結ばれるしかないのか。

「…なら、なるべくしてオレと結婚したって言いたいわけ?」

「そうヤサグレないの。さつき、切歌ちゃんの過去のことと怒ったでしよ？ それだけ大切に思っているってことじゃないの？」

「……………」

藤堯は自分に問いかける。

切歌のことを、好きだ、愛している、などと口にしたことはない。

単に大人の矜持が邪魔しているのだ——と照れる一方で、切歌が自分以外の男と一緒にいるところを想像するだけで不安になる。

また、仮に自分の与り知らぬところで彼女が死んだとしたら、今度こそ間違いないで発狂するという確信があった。

惚れた腫れたに類するはずのこんな心の動きは、いくら分析しても不明瞭で困惑してしまう。

だが過去の先達たちは、こんな分析不能な状態こそを形容する言葉を作ってくれていた。

いわゆる、情が沸く、というやつだ。

そこに理屈や損得は存在しない。情が沸き、情が移ってしまえば、あとはどうしようもなくなるそう。

「上層部おべの方では、切歌ちゃんを保護はしているものあくまで一時的な預かりという認識なの。しっかり日本に紐付出来ているとは考えてなかった。けれど…」

「オレと結婚することにより、この国と確実な接点が、いや、完全に取りこめるってわけか…」

このまま装者として活動できるのであれば、日本も支援は惜しまないし保護する理由が存在する。

だが、日本を離反したり、ましてや装者としての能力が必要ない時が来たら——。

なるほど、確かに厄ネタ以外の何物でもないのか。

しかし、蓋を開ければ完全に大人の事情。とても切歌本人に聞かせられたものではない。

「…やっぱり、気を悪くした？」

おそろおそろ尋ねてくる友里に、藤堯は真剣な表情で答える。

「何か特別手当とか支給されないのかな？」



数瞬の間のあと。

友里も藤堯も、顔を見合わせ破顔。

「籍を入れてからの楽しみにしていなさい」

笑ったままの友里に肩を叩かれる。

「オレとしては、婚約となつたこの段階からなんとかして欲しいんだけどね」

苦笑に混ぜてはみたが、これも紛れもない本心だった。

切歌との婚約は、組織内では大っぴらに公表されていなかったが、まずは装者たちへと報告する必要があつた。

装者たちがコンビネーションにより戦闘力を倍加させる以上、なるべく不和の元や隠し事はない方が良く、との弦十郎の判断もある。

そして、知らされた装者たちの反応も様々だった。

まずは立花響&小日向未来ペア。

切歌と婚約し、リディアンを卒業するのを待つて結婚する旨を伝えた瞬間、響は両目を剥く。

大口を開けたままマジマジと藤堯と切歌を眺め、天を仰いで大きく嘆息した。

「うっそー、先を越された〜!!」

「…響、念のために訊くけど、一体誰と何をの先を越されたのかしら？」

「んも〜、未来、それは言わせないですよ」

「〜響ったらー!」

イチヤイチャし始める二人を横目に、次は風鳴翼。

「その…おめでとうございます」

丁寧に一礼するが、珍しく彼女は動揺しているように見える。

「申し訳ないですが、このような吉報を聞くのは生まれて初めてです。しかし、暁が藤堯さんと。うむむ…」

最後に、一番まともな態度を示してくれたのは雪音クリスだった。

「藤堯さん。コイツは本当に気のいい素直な後輩なんだ。だからどうか幸せにしてやってくれよ…?」

いずれ装者たちを介し、一般の職員にまで浸透していくはず。事情を知った職員たちからどんな視線を向けられるか想像しただけで、胃がチクチクと痛む。

「藤堯が今から手当を要求したい所以だ。おそらく、これから少しずつ周囲の環境は変わっていくことだろう。」

そして当座で、もっと大きく変わったことが一つある。それは――。

「朔也さん！」

発令所内に響いた声に振り向けば、切歌が入口からこちらへ向けて駆けてくる。

「いずれ籍を入れれば藤堯姓になる。今のうちから慣れていた方がいい。」

「どうやらマリアからの入れ知恵のようだ。分かっていても、名前で呼ばれるのはむずかしい。」

しかし藤堯は我慢して、クールにいつもの対応に努める。

「どうしたの、切歌ちゃん？」

「んもー、今日はお買い物ものに行く日デスよ？ 忘れてたんデスか？」

「ん？ え？ あれ？ 今日だっけ…？」

とぼける。本当は忘れていたかった。

「ところで切歌ちゃん。何を買いに行くの？」

「尋ねてくる友里に、切歌はえへへー！ と飛び切りの笑顔。」

「今日は朔也さんに指輪を買ってもらいにくんデス！」

「藤堯は頭を抱える。今、発令所内には友里と二人しかいないのは、不幸中の幸いか？」

「それは良かったわね。精々、お高いものを買ってもらいなさいな」

「はいデス！」

「こっちの懐事情も知らずに好き勝手言う女性陣。」

「あ、でも、オレはまだ終業時間じゃないから…」

「もう明後日までの分くらいのは作業は終えているでしょ？」

ささやかな抵抗も、友里に一撃で粉碎される。

「あとは年休の申請を代行してあげるから、さつさと買い物についてらっしゃい」

切歌のいう指輪とは、いわゆる給料三か月分といわれる婚約指輪ではない。

正確に言えばそれも追々で要求されているが、まずは常に身に付けられるようなペアリングが欲しいとのこと。

単純に切歌ははしゃいでいるが、藤堯の見たところ、これもマリアの入れ知恵のようだ。

二人で歩きながら、さつそく切歌は腕を組んで抱えてくる。

あまりに柔らかい塊を左腕に感じて、藤堯は恐れ戦く。

恵体のマリアとクリスに、彼女らと対極の持たざる者の会会員二名。

残る装者でその中間に位置する響と切歌は、実にバランスの良いプロポーションの持ち主である。

：いや、まあ、乙女の秘密のサイズの情報も、望まずとも色々知る機会にあるオペレーター業務であるからして。

そんな藤堯は、最近の切歌の胸部装甲が上昇修正されていることは把握していた。

「ちよ、ちよつと切歌ちゃん、近いって…」

「え？ 駄目なんデス？」

ぶう、と頬を膨らませて上目使いで見ってくる。

藤堯にとつて文句なく可愛い仕草なのだが、それとなく色気も感じてしまって混乱する。

結果、目を逸らし、しどろもどろ。

「ま、まあ、駄目じゃないけど…」

そういうと、満面の笑みを浮かべ抱き込んだ腕に力を込める切歌が

いる。

ますます食い込んでくる左腕の柔らかさから意識を引き剥がすように、藤堯は別の話題を口にした。

「そ、そういうえば、調ちゃん今日はどうしたの？」

「調だったら、さつきエルフナインのところへ行くって言ってたデスよ」

普通の子だったら、ここで他の女の子の話題を口にされただけで不快に感じたかも知れない。

しかし切歌は、そういう妬心を示すことはなかった。彼女の美点だと思う。

「エルフナインちゃんのところからねえ。何をしにいったんだろ？」

かつて切歌から聞いたことだが、エルフナインは持たざる者の会の『永久終身名誉会長』だそう。

そっちの会合だろうか？

そういうと、切歌は首を振る。

「なんか黒魔術を習いたいとかって言っていたデスけど……」

「……………」

呪い殺されるんだろうか、オレ。

切歌との結納、婚約との流れに至ってから、調の当たりは目に見えて強くなっていた。

彼女にとって半身ともいえる相棒を取られたのだ、さもありません。

同時に、切歌を娶うことは、調とマリアとも縁戚関係になることも意味する。

今後のことを思えば仲良くしたいのだが、なかなか近づくのも躊躇われる今日この頃だ。

ほとぼりを冷ましたら、一度きちんと話をしなきゃだな。

脳内のやるべきことリストに新たな一項目を書き足して溜息をつく。

そうして現実へと立ち返れば、目当ての宝飾店が見えてくる。

すると、腕にぶら下がる切歌が上機嫌でぶっ飛んだことを口にしてくれた。

「朔也さんとの愛の形が欲しいんデス！」

「ぶふッ!」

思わず嘖き出すと、デス？ と不思議そうな眼差しで切歌が見てくる。

確かに指輪にはそういう評価の仕方もあるだろう。

切歌にしても、そんな意味で口にしたのは、無邪気な表情からも間違いなかった。

だが、人によつては別の意味を想起するはずで、藤堯もその例に漏れない。

——以前に社会人が女子高生に手を出せるか！と、欲望を一般常識と理性の鎖で縛りつけた。

そこにきて提示された婚約というカードは、免罪符に似ていた。日々、鎖を緩めないよう戒めつづける藤堯の理性を誘惑してくる。無理に堪えなくてもいいんじゃないか？

そんな藤堯の懊悩を知ってから知らずか、切歌ますます身体を寄せてくる。

いい匂いのする少女の身体の高熱を感じながら見下ろせば、彼女が綺麗になっていくような気がした。

いや、おそらく気のせいではない。

ほんのりと施された化粧を抜きにしても、その面立ちは急速に大人びて来ているよう。

かつて、少女から大人になる短くも貴重な時期を、間近で愛でられる立場にいるという特権を意識した。

しかし、現実はその光景を目の当たりにしたとき。

…これで直接手を出せないのは、拷問以外のなにものでもないよな。

藤堯はしみじみと思う。

いやいや、実際に同居もまだしててわけでもないし、適度に距離を保てば、節度のある付き合いが出来るはずだ。

うん、決めた。やっぱり切歌ちゃんが卒業するまでは清い交際を貫こう。

鉄の覚悟を固め、切歌にも『自分を大切にするように』『あと、街中で大声でそう言うこと言っちゃダメ』などと偉そうに訓示を垂れる藤堯。

そう遠くない未来、鉄の意志が折れることを、今の彼は知らない。

## 第10話

大型連休も過ぎ去り、間もなく梅雨を迎えようとする五月末。

今日も今日とて自宅に來た切歌に、手製のおやつを振る舞う藤堯がいる。

「はい、フレッシュオレンジケーキにレモンタルト」

「ありがとうデース！」

満面の笑みを浮かべる切歌を微笑ましく眺めながら、藤堯は少し疑問に思う。

「あれ？ 切歌ちゃんってそんなに酸っぱいもの好きだっけ？」

淹れてやったコーヒーを断り、切歌が飲んでいるのは自前で買ったきた黒酢ドリンクだ。そもそもの今日作ったお菓子も彼女のリクエストだったりする。

「なんか無性に酸っぱい系とか柑橘系のものが食べたくなっちゃって」

「ふん…」

まあ、そういうこともあるだろう。

藤堯も自分のタルトを食べ、コーヒーを飲んでいると、食べ終えた切歌がやや恥ずかしげな上目使い。

「あのく朔也さん。今日は泊まっていつちやダメデスか…？」

「今日は、じゃなくて今日もでしょ」

口元を拭いながら、軽く睨む。

「この間、マリアさんからたつぷりお小言をもらったばかりなんだぜ？」

てへへと誤魔化すように頭をかく切歌だったが、昨年と見違えるほど成績は上昇中。

このあいだ終えたばかりの中間テストの手ごたえも上々だという。

…その御褒美だと思えば、まあアリかな。お小言なんてオレが我慢すれが済むわけだし。

「分かった。構わないよ」

頬を染め、嬉しそうにコクンと頷く切歌。この初々しさが変わらなるところが藤堯的にはたまらない。

「それじゃあ、晩御飯は久しぶりに手作りハンバーグといこうか」

半解凍した薄切り牛肉を自分で叩いてひき肉にして作る特製だ。食感と溢れる肉汁は、市販のひき肉で作ったものとは段違いになる。

「…あゝ、すみませんデス。ハンバーグはちよつと…」

「どうして？ 切歌ちゃん大好物だったじゃない」

「最近、肉々しいものは臭いからしてダメなんデスよ。気持ち悪くなって吐いちゃうこともあるんデス」

「ああ、そうなんだ…」

なら、しめ鯖とかどうだろう？ 鯛の甘酢あんかけなんかもいいかも知れない。

新しいメニューを模索しながら冷蔵庫を漁る藤堯だったが、不意に手を止めて思案する。

「…ん？」

次の瞬間、冷蔵庫も開けっ放しのまま踵を返し、短距離をダツシユして切歌に詰め寄った。

血の気が引くのを自覚しながら尋ねる。

「も、もしかして切歌ちゃん、生理が遅れていたりしない？」

「な、なんで朔也さんはアタシの身体のこと分かるんデス!？」

激しく狼狽する切歌に、藤堯は天を仰ぐ。

…なんてこった。

頭の奥がまるで氷柱を突っ込まれたかのように冷たい。

「ご飯の準備は後回しだ。今から病院へ行こう」

エプロンを外しながら言う。



「えっ？ えっ？」

いまだ良く分からず混乱しているらしい切歌の手を引いて、藤堯はタクシー会社の番号をコールする。

S. O. N. G. 本部の医務室にて。

神妙に椅子に座る藤堯と切歌に、当直医は告げた。

「おめでたですね。八週目といったところですか」

嘆息し青ざめる藤堯に、きよとんとしたままの切歌。

医師が持ったボールペンでコメカミ当たりを突きながら微妙な表情を浮かべている理由は、間もなく大股で室内へと入ってきた。

「はっはっは、やってくれたなあ、藤堯ッ！」

豪放な声を振り下ろしてくるは、S. O. N. G. 総司令風鳴弦十郎。

弦十郎に言われるまでもなく、藤堯の内心はやっちまったとの念でいっぱいだ。

細心の注意を払っていたつもりだが、避妊に絶対はない、と過去の保健の授業で習ったことを思い出す。

本来であればぐうの音もなく、大人しく叱責を受け入れるしかない流れだが、どっこい藤堯には反論材料があった。

「司令にだけは言われたくないですけどねッ！」

「むうッ」

途端に口を噤む弦十郎。

その背後から、話を聞きつけたらしい装者たちもドヤドヤと入ってくる。

そして最後に入ってきた雪音クリスの腹部は大きく膨らんでいた。

藤堯の視線に気づいたらしい彼女は、こちらを睨んでくる。

「あんだよ、こちとらちゃんと家族計画だぞ？」

「でもでもでも！ クリスちゃん、卒業生総代で挨拶したとき、すっごくお腹張って苦しがつていたよね！」

すかさず突っ込みを入れる響。

「うっせえ、黙ってるバカ！」

「騒ぐな雪音、身体に障るぞ」

暴れるクリスに止める翼と、背景はかなりカオスな様相を呈している。

確かにクリスは今年でリディアンを卒業していて、世間的にも社会人である。高校生という身分ではない以上、社会的な問題は存在しない。

しかし、妊娠六か月という期日を遡れば、在学中に手を出されたことは明々白々。

手を出したS・O・N・G。最強の大人が、蛇に睨まれたカエルの如く脂汗を流す理由はこれである。

司令自らこの様では、部下を叱責できる道理がない。

「切歌ッ!？」

ステージ衣装姿のマリアが調を伴い入ってきた。

リハーサルの最中に報告をうけ、取るものも取りあえず駆けつけてきたそう。

切歌の妊娠が確実であることを医師に確認し、マリアは溜息をつく。

「こうなると思ったから、あまり外泊はさせたくなかったんだけど？」

「うう、面目ない…」

ジト目で睨まれ、藤堯の心境はまな板の上の鯉も同然だ。

切り刻まれようが焼かれようが、文句を言える筋合いはない。

そんなマリアの隣で、調はひたすら無言でこちらを見てくる。

こちらもちちらで非常に神経にこたえる視線で息苦しい。

いつそ怒鳴られたり嫌味を言われたりする方がよっぽどマシだ。

「——しかし、雪音に続き暁もしばらく戦場いくさばに立てないとなると、およそ四割の戦力低下は免れないでしょう」

翼の唸るような口調の指摘は、正鵠かつ深刻だった。

最近、聖遺物絡みの事件もなく、出動件数そのものも減少傾向にあったが、樂觀は出来ない。

そもそのシンフォギア装者という最大戦力を保有してこその特殊部隊S・O・N・Gである。

それが40%も戦力低下となれば、組織の存在意義が疑われる事態だ。

ましてやその原因が組織内の人間の手によるものであれば、鼎の軽重を問われるのも無理はない。

事実、クリスの妊娠が発覚して戦線離脱を余儀なくされた際、弦十郎は国連本部へ呼び出されている。最終的にはクリス自身も召還され、そこでどんなやり取りがあったが詳らかにされてないが、とりあえず訓戒だけで済んだという経緯があった。

「あたしが装者だつてのは承知してる。組織に属するなら命令を守つて命だつて張るさ。でもよ、だったらあたしに自由に恋愛する権利はないのか？好きな人と結婚する権利はないつてのかよ!？」

明日は我が身の藤堯が、実際にどんなやりとりがあったのかとクリスに尋ねたところ、あつさりネタバレをしてくれた。

「呼び出されたとき、そう高説を垂れたんだけど、それでも旦那に責任をおつかぶせようとすつからさ。んじゃあたしは装者辞めますつて言ったら、なんか有耶無耶になったんだぜ？お偉方みんな苦虫を噛み潰した顔してたけど」

けらけらと笑うクリスに屈託はない。それを横で聞く弦十郎は顔を赤くしたり青くしたりしていたが。

：つまるところ、原因そのものが肩を組んで、叱責する側を脅迫したということだろうか？

確かにシンフォギアは有限で、それをコントロールできる人材も希少だ。

おまけに国連が掲げる人権の自由を逆手に取られては、訓戒以上の強い処分は出せなかったと推測する。

「大丈夫ですよ、翼さん！その分、わたしたちで頑張ればいいんですから！」

響の明るい宣言に、藤堯の気分も少し救われた。シンフォギア装者である切歌を戦えなくしたという職務上の罪悪感。

同時に、彼女を身籠らせたことにより戦いから遠ざけたという安堵感もある。

二律背反する想いを抱えて唇を噛む藤堯の肩に、力強い手が置かれた。

「どおれ、二人で叱責を喰らうとするかッ」

そう言ってくる弦十郎に、藤堯の中の罪悪感が増した。

今回の場合、藤堯個人の責任では済まない。組織の長である弦十郎にも監督責任が生じる。

それでも、ことさらに明るい口調で振る舞ってくれる弦十郎に、しみじみ上司に恵まれていると感謝した。

…あれ？ そもそもの発端は、この人に切歌とデートしてこいと命令されたことにあるような…？

「…切ちゃん？」

調の声に振り向くと、椅子に座ったままの切歌の頬をぼろぼろと丸い涙がつつたっている。

「ど、どうしたの、切歌ちゃん!？」

慌てて藤堯が近づくと、切歌の涙の量が増す。

「…もしかして、なんか怖くなっちゃった？」

切歌そっちのけで騒いでしまっていたが、本来的に妊娠は女性にとっての一大事だ。

組織人としての心配より、まずは彼女自身のケアを優先すべきだった。まったくオレってやつは…!!

自分自身を罵倒したい衝動をぐっところえ、藤堯は切歌をあやすように抱きしめた。

「もしかして、子供産むのが怖いのか？ あたしだって怖いさ。でも、安心しろ、先にあたしが産んで見せるからなッ！」

いきなり先輩風を吹かせて割り込んでくるクリスがいる。

「でも、クリスちゃんのお腹、大きい、大きくない？」

「そりや双子だからな」

「ええッ!? 初耳なんですけど!?!」

「聞いて驚け、本邦初公開だッ!」

出産祝いが二人分に…ッ! とワタワタする響を見て、切歌は少しだけ笑う。

「そりやクリス先輩が言うみたいに、子供を産むのは少し怖いデスけど…」

「…うん。他にも何か怖いことがあるんだよね?」

藤堯がいうと、切歌はまるで嫌々するように頭を振った。

「違うんデス! 嬉しいんデス!」

「え…?」

「だって、家族が増えるんデスよね?! これって凄いことなんデスよね!」

情けないことに、藤堯はその意味を少し考えこんでしまった。

が、間もなくストーンと色々と腑に落ちる。

切歌とは未だ結婚せず、同居もしていない。

その意味でも、まだ彼女にとって、家族が増えたとの実感はないのだろう。

つまり、現時点での切歌にとっての家族とは、マリアに調、そして故人となったナスターシャ教授とセレナが全てだ。

そんな彼女の認識では、家族とは減る一方なもの。命を失い居なくなるもの。

なのにな、自分のお腹に新たな命が宿っている。

だから、切歌は泣いているのだ。

新たな命が生まれることによって家族は増えていくものであることを、彼女はようやく知ったのだから――。

そこまで理解が及んだとき。

藤堯の心の奥底から、この子を幸せにしたいという衝動が胸を満たした。

切歌を抱いていた腕をほどき、床に片膝を突く。

それから切歌と目線を合わせると、自分でも信じられないような自

然さで、口から言葉が滑り出た。

「切歌ちゃん。…いや、切歌さん。オレは君のことを心から愛しています」

「…！」

「オレと結婚してもらえますか？」

切歌の目から更に涙が溢れた。

ぐしぐしと止まらない涙を拭い続ける彼女に、藤堯はじつと答えを待つ。

どれくらい時間が経ったのだろう。

室内に集った誰もが口も開かず見守る中、顔じゆう真っ赤にして泣き腫らした少女は、確かにはつきりと頷いた。

「…はいデス！」

## 第11話

藤堯が業務を終えると、司令席の弦十郎と目があつた。

どちらともなく席を立ち、示し合わせたわけでもないがほぼ同時に廊下に出る。

肩を並べながら廊下を歩いていると、弦十郎が声をかけてきた。

「…久しぶりに飲みに行かないか？」

「いいですね、行きましようか」

普段の藤堯は直帰を旨にしている。これは切歌を娶る前からも変わらない。

なのになぜ今日に限って変節させているのか？

切歌が今日は家に不在であることもあつたが、理由はそれだけではない。

一方の弦十郎も、嫁であるクリスに今日は遅くなつてもいいとお墨付きをもらっている。

種を明かせば、クリスの家に切歌が訪問し、妊婦の勉強会と称し様々な手ほどきを受けているとのこと。

既に妊娠七か月目のクリスは、その意味でも切歌にとつての先輩となつてくれている。

肝心の切歌も、妊娠三か月目に突入して悪阻も落ち着き、身体を動かす分にも問題はない。調も同道してくれているとのことだから、まず心配はないだろう。

「よし、それじゃあ、行くかッ！」

連れだつて足を向けたのは、駅前の居酒屋——などではなく、本部のガンルーム。

バーカウンターに革張りのソファ。ビリヤード台まで設えられているあたり、決してS・O・N・G.の高級士官に限った使用を考えて作られたものではあるまい。

予め申請すれば、バーテンダーの技能を持った職員の配置もしてもらえらるが、広い室内は無入。

「とりあえずビールで構わないか？」

司令自らカウンターの中へ入り、グラスにビールを注いでいる。

ついでにごそごそと冷蔵庫を漁りツマミを物色する弦十郎の姿に、藤堯は哀愁のようなものを感じた。

藤堯たちより一足先に一緒に暮らすようになった弦十郎は、嫁であるクリスに実に色々と制約を受けている模様。

特にクリス主導による自宅改修が著しく、弦十郎がコレクションしていたカンフーの訓練道具や木人などは、泣く泣く貸倉庫へ移動したとか。

それを敢えて指摘する野暮はせず、カウンターの上に出されたグラスを手にとり、乾杯。

一気にグラスを空ける弦十郎の内心を、ほぼ完璧に藤堯は推察している。

…まあ、推察するまでもないか。きっとオレとほぼ同じだと思うし。

新妻たちが色々と話し合っているように、その亭主たちも色々と話し合いたい、もとい愚痴りたいことがあるのは一緒だ。

「切歌くんは学院の方はどうするつもりなのだ？」

そう口火を切ってくる弦十郎に、ビールを飲み干して藤堯は苦い顔をする。

「本人は出来るだけ通いたいと希望していますが…」

まだ三か月なので腹部はそれほど目立ってはない。しかし、リディアンは女子高であるから、女生徒たちは同性の変化に敏感だろう。結果として、あらぬ噂を立てられて切歌が傷つくことになるかも知れない。

それを防ぐためには、藤堯と結婚したことを明かし、学院側の理解



を得なければならぬが、いくら私立とはいえ、社会通念上認められるとは思えなかった。

「…うちのクリスくんの時とは状況が違うからな」

卒業を間近に控えたクリスはどうか隠し通せたが、いまだ二年生の切歌はそうはいかない。

順当に考えれば休学、もしくは退学するのが常道だろう。

それでも、出来るだけ切歌の希望に沿わせたかった。

休学して、出産が済んだあとに復学させようか、とも考えたが、後輩をクラスメートにし、調を一学年上の先輩と仰がなければならぬ学生生活もどうなのだろう？ ましてや生まれたばかりの赤ん坊もいるわけだし。

藤堯は頭を抱えた。

切歌との結婚、懐妊という祝福の後に、向き合わなければならないシビアな現実が多すぎる。

まあ、それも自業自得といえるのだろうか…。

「飲め、藤堯」

弦十郎がグラスに琥珀色の液体を注いでくれた。

「頂きます」

一気に呷り、胃の腑が熱くなる。

高い酒のはずなのだが、よく味は分からない。

それでも、アルコールのおかげか、少しでも気分は上向いた気がする。

「しかし、司令は家でもくん付けなんですか？」

空気を換えようと、わざと明るい口調で言う。

ウイスキーを舐めていた弦十郎は苦い顔をした。酒がまずかったのか、それとも。

「この性分はなかなか治らなくてな。呼び流せといつも怒られるのだが…」

藤堯の脳裏に、おそらく人類最強の男を叱りつけるクリスの姿が浮かぶ。

滑稽だが、これほどしっくりくる光景はなかなかないと思う。

そう笑いは誘われたものの、朗らかな気分にはなれなかった。俗に、酒には良い酒と悪い酒があるという。

良い酒とは気分が高揚し、気鬱もなくなる。

逆に悪い酒とはネガティブな方向に思考が進み、鬱々となるという。

弦十郎とて、そんな気分になりたくて藤堯を飲みにつつたわけではあるまい。

だが、いくら気分逆らおうとも、口から出る話題は決して楽観的なものばかりではなかった。

「時に藤堯。おまえは御両親への報告は済んだのか？」

「いえ、それはまだ…」

結納こそあんなゴタゴタと済ませてしまったものの、親に無断で結婚するほど藤堯も親不孝ではない。切歌との仲は、きつちり両親にも認めてもらい、祝福してもらいたいと思っている。

反面、切歌個人の情報を、どこまで両親に伝えるかが難題だ。

シンフォギア装者である彼女の来歴は、国家機密に相当する。

結婚した藤堯個人が弁えている分には問題ないが、両親に対しては、やはりマリアと同様のアンダーカバーの話を作る必要があるだろう。

「それがなかなか難儀してましてね…」

一時的なものでは意味がない。将来的にもボロの出ない話を作るとなると、これが難問となっている。

事実、藤堯一人では手に負えず、友里にも手伝ってもらっていた。

「そうか。こちらとしては協力を惜しむ気はないからな。なんでも相談してくれ」

力強く言ってくれる弦十郎のグラスに、ぺこりと一礼して藤堯はウイスキーを注いだ。

豪快にグラスを空ける弦十郎だったが、漏らした呼気は弱々しい。「うちの嫁さんだが、子供を産んだら結婚式を挙げたいと言っている…」

あくまでクリスと呼び流しをすることを拒むように言う。

「なんでも、元のクラスメートたちも招待して盛大に挙式したいとのことだ」

基本的に慶事なのだが、藤堯の鬱屈した気分も弦十郎に準ずる。「切歌ちゃんも、クラスメートを全員招待したいって言ってたっけ…」出来るなら弦十郎と同様に愛する嫁の希望に沿いたい。

だが、叶えるためには、問題がうんざりするほど山積している。まずは、彼女らが装者であることを伏せた上での馴れ初めなどの説明が必要だ。

弦十郎自身がS・O・N・G・総司令として国際的に公表されているのも、その点は苦しい。

加えて、組織関連での招待客と、一般の招待客を同席させることによつて生じる問題も挙げられる。

藤堯などは家族にも自分の本当の勤務先を伏せていた。式場で組織サイドの招待客と会話して、お互いの認識に齟齬が生じる可能性が十分に考えられる。

それら招待客の予めの選別や説明を考えただけで頭が痛くなる。そして何より、式にかかるであろう費用のことが切実だった。

「…そうだ!」

「どうした、藤堯?」

「いつそ、司令と合同の結婚式にはどうでしょう?」

「なんだとツ!」

大声を上げた弦十郎だったが、すぐに、いや待て待てと考え込む。

「確かに…招待客が被っている以上、アリかも知れんな」

「でしょう?」

「しかし、嫁さんたちが了承するかどうか…」

「そこは、参加者の負担も減るとか説得すれば大丈夫だと思いますが」結婚式などで女性がおめかしする時の煩雑さは、男性の想像を絶する。

おまけに衣服や装飾具などの費用も馬鹿にならないと聞く。

弦十郎にそう説明しつつ、このときの藤堯の脳裏に浮かんだのは雪音クリスだ。

色々つぶつとんだ属性を持つ装者の中で、一番の良識派は彼女であると認識している。

他者にいらぬ気遣いや苦勞を強いるのは、クリスのもっとも嫌うところだ。

「なるほど…。では、その方向で調整してみるかッ！」

弦十郎の表情が少し明るくなる。

藤堯も同様で、互いのグラス打ち合わせて乾杯。

招待客を一元化することで、費用を抑えられることが最大のメリットだ。

もつとも藤堯の内情としては、結婚式という人生最大の晒し場での道連れが出来たことを一番に喜んでいるのだが、これは司令には永遠の秘密にしておこう。

少なくとも大きな懸念の一つが片付く目途が立ち、グラスを空けた二人の口から洩れた呼気は軽い。

積もった酔いは、ようやくポジティブな方向に回転してくる。

「しかし、まさか司令のときは双子とは…」

「うむ。俺も知らされたときは耳を疑ったぞ？」

答える弦十郎の表情は、喜びつつも戸惑いが隠せない。

如何な百戦錬磨のS・O・N・G。総司令も、父親になるのは初めてだ。

未だ父親としての実感がわかないのは藤堯も全く一緒だったので、その感情は完璧に共有できる。

「名前とか決めているんですか？」

「色々と考えているが、親父も首を突っ込んできていてな…」

しみじみ述懐する弦十郎に、思わず藤堯は含んでいたウイスキーを吹きだしてしまふ。

「げほっ、げほっ…！ か、鎌倉の御前がッ!？」

「ああ。珍しく機嫌も良さそうに、名前を付けさせろと言ってきている」

風鳴赴堂が風鳴一族の長として干渉してくるであろうことは想定できる。

だが、あのスサノオのような威容を備えた老人が機嫌の良さそうな素振りを見せるだど？

藤堯は考え込んでやめた。人間の想像力には限界がある。

「そ、それでッ!? どうするんですか!？」

「いや、まあ、その件に関しては、嫁さんがおかんむりでな」

弦十郎が苦笑しながら言うことには、

『ちよせえッ! 夫婦の決めることに爺さんが口出しすんじゃないやねえッ!』

クリスが一喝して退けたそうなの。

それを聞いた藤堯は、たつぷり一分間は放心していたと思う。

ようやく我に返ると唇を震わせながら言った。

「よ、よく刃向かえましたね、雪音さんは…」

「まあな」

そういう弦十郎の横顔には、苦笑と誇らしさが同居している。

「ともあれ、親父も一旦は引っ込んだんだが」

「…相当怒っていたんじゃないですか？」

「いや、それが満更でもない様子でな」

「はあッ!」

「もしかしたら、クリスは親父に気に入られたのかも知れん」

「……………」

無意識でクリスと呼び流ししている弦十郎に突っ込む気も起きない。

風鳴一族の将来は、こちらの想像を超えて波乱に満ちていそうだ。

「そういう藤堯の方は名前も考えているのか？」

「うちはまだ三か月ですからね。性別も分からない状態です。ですが…」

藤堯の顔に浮かぶものを、苦笑という枠で収めるにはやや逸脱していた。

弦十郎が風鳴の本家の動向で頭を悩ませているように、藤堯の場合にはマリアたちがその役を担っている。

突然、山のように送られてきた本は、全て命名辞典や画数判断。

そしてその差出人は、しよっちゅう家までやってきては、付け焼刃の知識を披露してくれる。

元々難解な漢字に精通していないマリアなので、なんとも突拍子もない名前を挙げてくることがあるが、とりあえずは御愛嬌ということに流していた。ここに将来、藤堯家の両親の参入とかも考えると、そら恐ろしい。

やはりクリスを倣い、切歌と二人で決めるのが無難か。

「うちのは、どうやら二卵性双生児だな。男と女らしい」

「へえッ！」

驚きつつも、良かったですね、とは言えない。

そりやあ子供がたくさん欲しい夫婦には朗報だが、双子の子育てでも性別が違えば、それぞれの衣類を用意しなければならぬから大変だと聞く。

新米パパにすらなっていない藤堯にとって、迂闊な評価は出来なかった。

「男であれ女であれ、雪音さんに似たらきつと可愛い子になるでしょうね」

無難かつ本心を口にする。

雪音クリスはハーフであるからして、生まれてくる子はクォーターだ。

女の子はさぞかし美人に、男の子は偉丈夫になることだろう。

「よせ、照れくさい。…それより、俺に似る可能性もあると思うのだが？」

カウンターに片方の肘を突き、どうだ？ という顔で見ってくる上司に、藤堯も自然と笑ってしまう。

「司令に似るにしても、身体能力は遺伝しない方が良いと思ってますよ」

「…おい、それはどういう意味だ？」

薄く笑うだけで藤堯は言及を避けた。

本人は無自覚だろうけど、これ以上憲法にすら抵触しそうな『歩く戦略兵器』など存在されてたまるか。

「ちなみに藤堯はどちらが欲しいと思っっている？」

「どちらでも構わないと思っっていますよ。：無事に生まれてきてさえくれれば」

迷うことなく藤堯は答える。

切歌が幼い子供とは思えないが、完全に成長しきつているとも言えないと思う。

そんな身体で出産に挑む、いや、挑ませてしまうことに、藤堯は忸怩たる思いが拭えないでいた。

そして出産時の危険は、医学の発展で限りなく低くなっているもののゼロではない。

「：そうだな。それが一番だな」

肩をがっちりと掴んでくる弦十郎の手も声も力強い。

「医療スタッフに関しては、俺の権限を逸脱しても、世界最高峰のものを揃えてやる」

そんな大袈裟な、と藤堯は笑い飛ばそうとして、上司の目が真剣なことに気づく。

なにか胸がいっぱいになって、自然と頭が下がってしまった。

「お願いします」

「ああ、大船に乗ったつもりで任せておけ」

少なくとも二人にとって感動的なやり取りが終わったあと、場は一気に緩くなる。

酒も程よく回り、互いの嫁自慢が始まったことは、あとで思い返して悶絶する羽目になるだろう。

だが、醜態も過剰な言動も、酒のせいと減罪されるのは、ある意味便利だ。

酒が人類の友と称されるのは、こうやって言い訳をするための悪友であり続けてくれるからかも知れない。

更に酒杯を傾け続ける藤堯、弦十郎の口にする話題は、よりぎつくばらんに——俗的な表現をすれば下品、さらに言っしまえばゲスいものになる。

「それで？ 司令は、ぶつちやけ、雪音さんにどんな感じでハメられた

んですか？」

気分の高揚するままに、藤堯の口はとまらない。

「おまえ、それを訊くかッ!？」

弦十郎も珍しく赤ら顔で大声を出す。

「オレはですね、自宅で、こう、パソコンに向き合っていたり、本を読んでいたりと、切歌ちゃんが膝の上に乗ってくるんですよ」

最初は、やめなさい、と注意していた。ところがいくら注意しても切歌はやめない。

仕方なく放っておくと、そのまま抱きつくような格好で寝てしまうこともある。

そんな彼女は薄手の格好を好み、ショートパンツやミニスカートで剥き出しの太腿は当たり前。おまけに襟ぐりの深い服の胸元も間近で見せられては、さしもの藤堯も無心ではいられない。

それでも煩惱を振り払うように視線を剥がす藤堯だったが、何かの拍子に太腿に指が触れた。

誓って一瞬のことだが、切歌は無反応。

しばらくして、つつく。やはり無反応。

いつの間にか潤んだ目を向けて来ている切歌に気づきつつ、そっと手で触れてみたが、嫌がる素振りは見せない。

触れる面積が少しずつ増え、それが腰、やがては上半身までに至る。可愛らしい少女が、自分の腕の中でどこに触れても嫌がることはなく、むしろその身体を差し出すようにしている。

ましてや二人きりで誰からも咎められないシチュエーションであることを自覚した時。

藤堯の鉄の意志は夏場の氷柱のごとくやせ細り、あっさりとはし折れたのだった。

「さあ、オレは話しましたよ！ 司令は!？」

悪ノリと見せて、実際は懺悔していることに弦十郎が気づいただろうか？

暁切歌という未成年に手を出したのは、藤堯の中の重い十字架だ。こうやって誰かに聞いてもらう形で吐露しなければ、罪悪感に押し



つぶされそう。

ちびちびとウイスキーを舐めつつ露骨に表情を歪めていた弦十郎だったが、とうとう根負けしたように語り出す。

「オレの場合は…クリスが色々と誘惑してきているのは知って、知らないふりをしていただけなのだ…」

総司令という重責を抱え、自制心と意志の強さでいえば、弦十郎は自分の遥か高みにある。

そう思っているからこそ、その意志が挫けた様を藤堯は知りたくてたまらない。この機会を逃せばもう訊きだせることはないだろうから尚更だ。

「しかし、ある日クリスが」

「はい、はいッ」

「了子さんと同じ髪型をして迫ってきたことがあってな。それでムラムラと来てしまって、つい」

「……………」

藤堯の脳裏に、故桜井了子の巻き上げた独特の髪型が浮かぶ。

ぶっちゃけあの頭は相当ダサイというかアレだったが、当時の二課メンバーには誰も指摘しない優しさがあった。

結果として、藤堯はしみじみとこういうしかない。

「司令ってマニアックですね…」

男二人の飲み会を終えた藤堯は、帰路を急ぐ。

その横顔が青いのは、決して悪酔いしたせいではない。

実は、マニアックですね、と評した瞬間、「言わせておいてそれはないだろうッ！」と弦十郎の右手の突っ込みが入った。

そのタイミングで、酔いのせいか椅子からずり落ちてしまったのは

幸運というしかない。

藤堯の肩を狙った弦十郎の右手は、空振りした勢いそのままにカウンターテーブルを粉碎している。

式も挙げないうちに切歌ちゃんを未亡人にするとところだったぜ…。うそぶきながら、おかげで酔いはとつくに醒めている。

しかし、あんな化け物みたいな人をあんな手で陥落するとは。

クリスが良識派という評価は修正する必要があるかも知れない。

そんなことを思いつつ藤堯は家に帰りつく。

夜も遅いし、切歌は先に寝ているかな。もしかしたら調のところに泊まっているかも知れない。

そう思つて玄関を開ければ、すんすんと何やら泣き声が聞こえる。

慌てて靴を脱ぎ散らかし駆けつければ、薄暗いキッチンでテーブルに突つ伏すように切歌が泣いていた。

「ど、どうしたの!?!」

「…さ、く、や、さ、ん!!」

涙塗れの切歌に抱きつかれる。

一般に妊娠すると情緒不安定になるといふ。

これもその類だろうか?

そんな知識を思い出しつつ頭を撫で続けると、ようやく涙の勢いを押さえた切歌が尋ねてくる。

「…朔也さんは浮気なんてしないデスよね?」

「はいッ!?!」

素っ頓狂な声を上げてしまったのは、浮気というワードに対して、後ろめたいことはなくてもなぜか狼狽してしまうという、伴侶のいる男には誰でも起こりうる反射反応だ。

「いきなりなんだい、藪から棒に?」

どうにか態勢を立て直して逆に問い返すと、切歌は不安そうに目を伏せた。

「だって、妊娠中は旦那さんが浮気をしやすくなるってクリス先輩が言ってたんデス!」

…なにを教えてんだよ、あの子は!?!

思わずそう叫びそうになったが、心を落ち着かせ優しい声音で言う。

「大丈夫。浮気するつもりも予定も全くないから」

仮に浮気しようものなら、保護者たちからぶつ殺されるからなオレ。心の中でそつと付け足す。

そこでようやく切歌は半べそになったものの、唇を尖らせて、

「でも…アタシがこんな状態じゃしばらくは夜のお勤めも出来ないんデスよ？」

「ぶふうッ!？」

明後日の方向を向いて盛大に咳き込む藤堯。

その様子をきよとんとした表情で見上げてくる切歌に、ああ子供と思っていた嫁が大人の知識を身に着けたんだなあ…と藤堯は感慨に更けるわけではない。

「…あのね、切歌ちゃん。今日は妊婦の何を勉強してきたのかな？」

上司の嫁に対する怒りの衝動を抑え、努めて冷静な声で尋ねる。

「うーんとデスね。検診とか、食べていいものとか、運動の仕方とか、服のこととか…」

「うん、他には？」

「…えっと」

切歌は、頬を染めて恥らうように言い淀むと、

「…お、男の人がグっとくる仕草とか、まんねり防止?のために髪型を変えたりした方がいいって教わったデス！」

「一体何の勉強会だったんだよ!？」

## 第12話

…歌が聞こえる。

とても懐かしく、優しい歌だ。

藤堯はうつすらと目を開ける。

眩しさに染まる視界で、白いワンピースが翻った。

長めの髪を振る彼女が歌い手らしい。

鼻歌でハミングしながらくると回る彼女の背後から光が溢れた。まるでその姿ごと白い世界に溶けて消えてしまっそう。

不安が込み上げてきて、掴まえようと慌てて藤堯は上体を起こして

——ソファアールから転落した。

「…あいたッ!？」

「だ、大丈夫デスか朔也さんッ!」

床から見上げれば、すぐ目前にかけつけてくれた切歌がいる。

藤堯は寝ぼけ眼で周囲を見回す。

間違いなく自宅のリビングだ。

まだ早朝の時分だが、窓から差し込む夏の光が既に暑さを匂わせる。

「…もしかして、オレ、寝ていた?」

いつも通りに6時に起床し、ルーティンで洗濯機を回し、掃除機をかけた覚えがある。だが、シャワーを浴びたあとの記憶がない。

「はいデス。だから替わりにアタシが洗濯ものを干していたデス!」

そういう切歌は、洗濯籠からバスタオルを取り出している。

「洗濯物、ありがとう。でも、もういいよ。オレがするから」

身重の嫁を気遣い、腰を上げようとした藤堯だったが、

「大丈夫デスよ。朔也さんは昨日は運転して疲れてるんデスから」  
につこり笑い、洗濯物干しを再開する切歌がいる。

そんな彼女の唇から明るい歌が漏れていた。

そうか、これが優しい歌の正体か。

その歌声に癒されつつ、藤堯はソファ前のテーブルに昨晚干していた洗濯物を取りこまれていることに気づく。

じゃあこつちを畳んでおくか、と手を伸ばしたところで、不意に先日  
の出来事が思い出された。

途端に額にじつとりと汗が滲む。洗濯物の山の中から適当に布切れを抜き取って、額を拭う。

先日まで、藤堯は切歌と一緒に実家へと里帰りしていた。

主目的はもちろん切歌を娶ったことの報告だったのだが。

「どうしたんデスか？ 顔色が悪いデスよ？」

「ん？ ああ、いや、やっぱり昨日の酒がまだ残っているみたいでね  
…」

「本当にすごく楽しい宴会だったデスね〜」

「…マジで？」

藤堯にとっては、地獄の宴という印象しかない。

満面の笑みを浮かべる切歌の記憶との、この齟齬はなんなんだろう  
…？

そもそもの藤堯の実家は、車で高速を飛ばせば一時間の近場である。  
る。

もつとも二課に所属してからは、まともに帰省した記憶はない。

そんな音沙汰のない息子が、いきなり嫁を連れて帰ってきたのだが  
ら、両親が騒ぐのは無理もないことだろう。

『初めましてデス！ 暁切歌と申しますデスッ！』

さっそく切歌が両親に挨拶。

その容貌からか、怪訝そうに母から年齢を訊き返された。藤堯が止める間もなく「17歳デス！」と切歌が答えた途端、母親は胸ポケットから取り出した携帯電話で110番をダイヤル。

どうにか発信する前に取り押さええるも、錯乱した母親から泣かれた。

続いて妊娠していることも報告したところ、父親は隣室から伝家の宝刀を持ち出してきた。

『朔也！ そこになおれ！ 成敗してくれるッ！』

果たして、時代劇かぶれの父親はどこまで本気だったのだろうか？

ともあれ、『あんたはこんな若い娘になんてことを…ッ！』とハンカチで口元を覆いながらバンバン肩を叩いてくる母に、『愚息が申し訳ない』と切歌に向かって平身低頭している父を宥めたのは、持参したノートPCを用いたライブチャットだった。

『お初にお目にかかります。朔也くんの上司である風鳴弦十郎と申します』

ディスプレイの向こうの弦十郎に対し、『これはこれはご丁寧に…』と頭を下げる両親。

『そこな暁切歌くんは、幼いころ事故に巻き込まれ天涯孤独となり、ナスターシヤ教授の養子となりました。』

そのナスターシヤ教授がうちの組織へ出入りしている縁で、朔也くんと知り合った次第です』

上手な嘘のつき方は、いかに少量の真実を混ぜ合わせるかによるという。

弦十郎の語ることは、もちろんデイトールこそ異なるが、大元の流れは変わっていない。

切歌本人にしても比較的受け入れやすい作話だと思う。

神妙に聞いていた両親の警戒レベルが目に見えて下がっていくのが分かった。

風鳴弦十郎は存在自体が説得力の塊みたいなものだ。

そんな超人が太鼓判を押ししている以上、疑うことすら難しくなる。それでも母親が不承不承尋ねてきた。

『あの…暁切歌さん？ あなた、本当にうちに朔也と』

『はいデス！ アタシは朔也さんを愛しているデスッ！』

『朔也、あんたどんな洗脳方法で…!?!』

切歌のドストレートな返答もともかく、母の反応に泣きたくなる。

『そんな二人は、確かな絆で結ばれているのです。まあ、紆余曲折はありましたが…』

再度弦十郎が解説し、ようやく母も現実を受け入れる気になったらしい。

またぞろ携帯電話を操作する姿に危機感を抱いたが、かける先は警察ではなかった。

『すみません、特上寿司の盛り合わせを。はい、はい、大至急で』

察するに近所の馴染みの寿司屋のよう。

半瞬遅れて、母の反応に父も準じた。

『…孫。初孫…だとツ?』

見ているほうが引くくらい、一気に表情がヤニ下がる。

『よし、パパ、化粧箱入りのニツカウユスキーと大吟醸黒繩を開けちやうぞおッ!』

その掌の大回転っぷりに、藤堯は思わず声をかける。

『あの、親父、お袋…』

本来なら、軽く挨拶を済ませて辞すつもりのもりの予定だった。しかし。

『お、そうだな、秘蔵の森伊蔵も開封するか!?!』

『朔也、あんた唐揚げ大好物だったわよね？ 切歌さんも好きでしょ？

？ はいはい、ちょっと待ってなさいよ!』

俄かに活気づきパタパタとし始める両親を横目に、藤堯はこのまま辞去してしまおうかと逡巡。

『あのね、切歌ちゃん…』

切歌に提案しようと思いをかけるも、時すでに遅し。

『朔也が結婚するんだってッ!?!』

どやどやと室内へ上り込んできたのは、比較的近所の親戚衆。

その後、ご近所のおばさんやお婆ちゃんまでが続く。

示し合わせたように全員が手に重箱やらタツパを手にしていることは、驚愕を通り越してもはや恐怖だ。

『あらあらまあ目出度いねえ』

『この子がお嫁さんかい？』

お婆ちゃん特有の距離感ゼロの攻勢にさすがの切歌も面食らう間に、

『ちわつす、ビールお届けにあがりました』

酒屋はビールを配達し、

『このたび、息子が結婚することになりましたッ！ 嫁さんの腹に赤ん坊もいるとこのことですッ！』

さっそくビールを開封した父が、本人そつちのけでの大発表。

『なんと！ そりやめでたいッ！』

重箱とタツパが開けられた。ビールが回され、ところどころで勃発する乾杯。

まさにその中心にいた藤堯が無傷でいられるわけがない。

『ほら、飲め、朔也！』

『い、いや、オレは酒はあんまり…』

『目出度い席だぞ、遠慮するなッ！』

『別に遠慮してゐるわけじゃ』

直後、無理やり飲まされたらしい。その発言以降、記憶が飛ぶ。

飛ぶ寸前に見た光景は、座布団三枚敷きの上に座らせられた切歌の姿。

『外人さんなのかい？ めんこいねえ』

『ほら飴ちゃんをあげようね』

婆さん連中に囲まれるその様は、さながらご神体のごとく。

気がついたのは翌朝で、周囲は死屍累々だった。

酒瓶と空き缶が散乱する仏間で、頭痛をこらえながら立ち上がる。

切歌はどこだとよろめきながら歩いてリビングへ行けば、ソファーに座っていると発見。

朝も早いのに、既に周囲を婆さん、もしくはお婆ちゃん連中に囲ま



れていた。

『切歌ちゃん、キュウリ漬け、食べるかい?』

『スイカも切つて来たよ。今朝、畑でとってきたばかりだから』

『メロンもあるだよ』

…装者の中で一番の愛されキャラは、実は切歌なのではないか。

協調性の高さももちろんだが、明け透けで爛漫な性格も親しみやすい。せつせと世話を焼かれ可愛がられる姿は、まるで本当の孫のよう。

『ほら、朔也。ぼーっとしてないで顔洗つといで。それから皆を起こしてきな!』

そういう母が抱えているものに、藤堯は戦慄する。

鉄鍋でぐつぐつ煮えているのはすき焼き。

『朝っぱらからすき焼きつて』

『ああ、ちゃんと朝一で近江牛のいいとこ貰ってきたからね。安心おし』

『いや、そういう話じゃなくてね…』

コメカミを押さえながら込み上げてくる吐き気をかみ殺している  
と、ドヤドヤと人の気配。

『おはようございます! 朔也が結婚するんだって!』

今度の襲来は、比較的遠方の縁者たち。

そこに仏間で死んでいた親戚たちも蘇生する。

でん! と据えられたすき焼き鍋を中心に、冷蔵庫から次々取り出される刺身の盛り合わせやら煮物やらオードブル。おまけに庭先ではバーベキューの支度が整えられつつある。

『いや、目出度い。目出度いなあッ!』

『結婚、おめでとうッ!』

『二日酔い!? そういうときは迎え酒だッ!』

仮初にも祝福されている以上、無碍に断るのも…と逡巡したのが命取り。

たちまちたらふく飲まされて酔い潰され、朝っぱらからまた記憶が飛ぶ。

二日酔いどころか三日酔いで目を覚ましたのはそのまた翌朝で、これは不味いと判断した藤堯は近所の健康ランドへ緊急避難。

そのこのサウナで半日かけて徹底的に酒を抜き、自宅でもたぞろ「宴会だ！」と待ち構えていた縁者たちを出し抜き、山のようなお土産を抱えた切歌を車へと詰め込んで脱出。ほとんど逃げ帰るようにして昨晩に帰宅していた。

「…つたく、多めに夏休みをもらっておいてよかつたぜ」

実家に帰省するにあたり、司令直々に五日の休みを賜っていた。

丸五日も実家に駐留していたらと考えただけでぞっとする。

残り二日ほど休暇は残っているが連日の宴会のダメージが抜けない。こうやって休んで癒さないと、明後日からの仕事に差し支えそうだ。

「ごめんな、切歌ちゃん。うちの連中はみんな騒がしくて」

思い出してはまた滲んできた汗を拭いながら、藤堯は言った。

「いえいえ、みんな優しくって親切だったデスよ？」

えへへと笑う切歌に、藤堯は苦笑するしかない。

うちの一族はとにかく無駄にアグレッシブで、あのまま切歌を神輿のように担ぎ上げて近所を練り歩きそうな勢いだった。

いずれ結婚式に招待し、切歌の身内として調はともかくあのマリア・カデンツァヴナ・イヴを紹介することを考えると頭が痛い。

「…朔也さん？」

心配そうな切歌の声。

「ああ、ごめん、なんでもないよ」

手を振って見せるも、切歌はちよこんとソファアの横に座ってくる。

藤堯の頭を引き寄せ、自らの太腿の上に置く。

それから見下ろしてくる切歌は、なぜか下唇を噛んでいた。

「…切歌ちゃん？」

「朔也さん。アタシに何か出来ることはないデスか？」

「え？」

「だってアタシは、朔也さんに色々貰ってばかりなんデスよ？」

続いて切歌の目にうつすらと涙が浮かぶ。

「…アタシとデートしてくれて！ アタシと遊んでくれて！ アタシにご馳走してくれて！ アタシを、あ、愛してくれて…！」

溢れる涙を拭おうと、藤堯は仰向けのまま切歌の頬に手を伸ばす。

頬に当てられた手の上に切歌は自分の手を重ね、もう一つの手を自分の腹部へと当てた。

「そして新しい家族もくれたンデス！ なのに、アタシは何も朔也さんには…」

「そんなことはないよ」

切歌の意見を傾聴したものの、素直に同調するのは藤堯自身が許さない。許せるわけがない。

「オレだって幾つものものをもらっているんだ。むしろオレがキミから色々奪ってしまったんだぜ…？」

例えば、彼女の純潔。

男女の成り行き上、それは避けられないものだったのかも知れない。

しかし、その結果として彼女を妊娠させてしまったことに、藤堯は忸怩たる感情を拭えないでいた。

まだ切歌は17歳だ。世間一般的には、まだ学校に通っている年齢。

そんな彼女は学生生活に、半ば無理やり終止符を打ってしまったている。

事実、リディアンが夏休みに入ると同時に、退学届を提出していた。

切歌の人生より、ある意味もつとも輝かしい青春時代を奪ってしまった。

そのことを心底申し訳なく思い、後悔している。

そう告げると切歌は首を振った。

「あたしは朔也さんと一緒にいらればそれでいいんデスよ？ それに調とマリアだって、いつも一緒デス！」

「……」

冥利に尽きると返せばよかったのだろうか？

考えてみれば、切歌の出生からこれまでが異質なのだ。

それを日本の一般的な女の子に当て嵌めようとする事自体が間違いなのかも知れない。

「…切歌ちゃんが後悔していないのなら、別にいいけれど」

「ひよっとして藤堯さんは後悔しているんデスか？」

逆に問い返され、藤堯は口を噤んでしまう。

切歌と結ばれなかったらどうなっていたのか？

その可能性を吟味し、無限の未来の枝葉に思いを馳せたことがなかったと言えば嘘になる。

もっと素敵な女性との素晴らしい出会いがあったのではないかと考えたことは否定できない。

自分のキャリアや将来的にも、切歌と結婚したのは果たして正解だったのかと自問しなかったことも一切ではない。

人間の心情的に、あらゆる可能性、ifという思考が働くのは止めようもなかった。

その上で藤堯は答える。

「後悔したこともあるけど、今は後悔してないよ」

この子抜きでは、この先のオレの人生は色彩を失ってしまうだろう。

それは紛れもない確信であり、真実だ。

同時に、藤堯は思う。

可愛い女の子が傍にいてくれれば、人生はなんとかなる。

誰の言葉だっただろう？ でも、今のオレにとっては至言だね。

「それならばいいんデスけど…」

切歌の表情は完全に晴れない。

なので藤堯は一つ提案をする。

「だったら、歌を唄ってくれないか？」

「…歌を？」

「そう。オレだけに、オレのためだけに、切歌ちゃんに唄ってほしい」  
「そんなのでいいんデスか？」

きよとんとする切歌に笑いかける。

「世界を救った歌をオレだけが聞かせてもらえるんだぜ？　最高の贅  
沢じゃないか？」

切歌の表情がみるみる明るくなった。

「…はいデス！」

膝枕をしたまま、さっそく切歌は唄い始める。

その歌声は、とにかく耳に心地よい。

魂そのものが浄化されるようなエンジェルボイス、というのは配偶  
者の鼻肩目か？

それでも、まるで海面が凪ぐように藤堯の心は穏やかになる。

彼女の心を込めた歌声を前に、頭痛も去り、吐き気も収まっていく。  
頬を撫でてくる手の感触も優しく、眠気を催してきた。

そのまま眠りの世界へ降下する寸前——藤堯は上体を跳ね起こ  
す。

「切歌ちゃん、ちょっと話しあっておかなくちゃならないことがある」  
「なんデス？」

突然の申し出に、目を白黒させる切歌。

「夫婦の決め事だよ」

なんでも、夫婦でも暗黙の了解と想っていたことが、実は一致しな  
いことが多いそうだ。

なので、予め意志や意見を擦りあわせ、互いに諒解しておいた方が  
良い。

妊婦はどんどんナーバスになるから早めにな。

先に夫婦となった弦十郎からの忠告なので、非常に含蓄に富んでい  
ると言えよう。

「それってどういうことデス？」

「つまり、夫婦でもルールを守ろうってことかな」

例えば、結婚すれば財産は共有ということになる。

それでも、一方的に配偶者の持ち物をどうこうして良いわけはない。

旦那の持ち物をガラクタと判断し、妻が一方的に廃棄したとか、よく聞く話だ。

夫婦といえど、最低限の互いのプライバシーも尊重しなければならぬ。

そのことを、お互いに予め了承し、ルールとして共有しておくことが大切だという。

「なるほど。良くわかりましたデス」

「それと、夫婦でも、嫌だと思ったことは、はっきりと伝えてくれていないんだよ？」

夫婦だから、と我慢するのは本末転倒。

夫婦だからこそ、最初に嫌なことは嫌と明言しておくことが肝心。これから、ずっと一緒に暮らすんだからね。

切歌は嬉しそうにうなずいたあと、一転して頬を赤らめた。

何事かをいいかけて、躊躇っている。

「どうしたの、切歌ちゃん？」

その様子に、藤堯は促す。

「あの、凄く言いにくいんですけど」  
「うん」

「朔也さんがさっきから汗を拭っているの、アタシのぱんつデス！」

## 第13話

ソファーにしなだれかかった切歌が、くああと大きなアクビをする。

「こう暑くつちや、何もやる気が起きないデスよ…」

切歌の主張に、藤堯も全く同感だった。

世間は盆休みに突入していたが、同時に例年にならない酷暑にも見舞われている。

実のところ、今日は水族館に遊びに行く予定だった。

しかし早朝からの熱波と、見るからに最高気温を更新しそうな日差しの勢いに、外出は中止している。

いくら冷房を効かせた車で行ったとして、駐車場からの徒歩の間だけで十分にダメージ受ける可能性がある。

藤堯なりに身重の嫁を気遣った結果だった。

そのことは切歌も承知はしているだろうが、ややご機嫌は斜めな様子。

そんな彼女の身体を心配し、こまめに冷房を調整する藤堯だったが、実際に家にいてもやることは少ない。

洗濯ものも干し終えれば、あとはテレビを見るくらいだ。

藤堯をしても、せいぜい昼食のメニューに心を砕くくらいしか出来ない。

「お昼はソーメンと冷やし中華、どっちにする?」

「冷やし中華がいいデス…」

リクエストに応え、藤堯は具材の選別に入る。

キュウリやカイワレ錦糸卵はともかくとして、鶏肉は胸肉の皮を外

した自家製チャーシュー。

麺も半分はこんにやく麺にしている。

妊婦に対して高タンパク低カロリーと配慮しているわけだ。

この藤堯の影の努力を知る人は少ない。

「ん〜、お酢の利いたタレが最高に美味しいデス〜ッ！」

肝心要かんしんかなめの嫁が気づいていないことを寂しく思いつつ、藤堯は別のことに思いを馳せていた。

水族館もそうだが、今日は他にやるべき大切なことがあった。

でも、この天候じゃ延期するしかないか…。

だが、食器を洗い片付けていると、にわかには部屋が暗くなる。

「朔也さん、なんかいきなり天気が悪くなってきたデスよ？」

切歌に指摘されるまでもない。カンカン照りの空はいつのまにか分厚い黒雲に覆われていた。

急に出てきた風に、藤堯は慌てて洗濯物を取りこむ。

窓を閉ざしたのと、ガラスを大粒の雨が叩いたのはほぼ同時。

まもなく叩き付けるような勢いで、盛大な雨が横殴りで降ってきた。

「切歌ちゃん、あと窓を開けるとこなかった!？」

「たぶん大丈夫だと思えますデス」

それでも一応家の中を見回り、テレビで天候情報を確認。

さっそくゲリラ豪雨の注意報のテロップが流れ、突然の雨に逃げまどう人々のいる駅前が映し出されていた。

「やっぱり出かけなくて正解だったデスカね？」

「そうかもね…」

あまりの雨の勢いは、思わず顔を見合わせ鼻白んでしまうほど。

続いてごろごろと雷鳴がなり、つんぎくような落雷の音が響いた途端、切歌は首を竦めた。

「うわあ、今のは大きかったな」

呟く藤堯の胸元へ、飛び込んでくる柔らかい塊。

「切歌ちゃん…？」

抱きついてくる彼女を見下ろせば、再度の轟音。続いて一瞬部屋の



電気が暗くなり、「きゃッ！」と悲鳴を上げる切歌がいる。

「大丈夫だよ、避雷針もあるし万が一停電したって」

現在の住居はS・O・N・Gの官舎であるからして、災害時のバックアップも完璧だ。

しかし、切歌が涙目で言ってきた台詞は、藤堯の予想を別の意味で裏切っている。

「でもでも！ 雷さまデスよ！ おへそとられちゃうんデスよ!?!」

「…あのね、切歌ちゃん」

藤堯が、それは迷信だからと言おうとしたところでまた轟音。

「ぴゃああああッ！ 雷さまが怒っているデス！」

ガタガタと震える小さな身体を抱きしめ藤堯は思う。

…なんだろう、この可愛い生き物。

切歌をそのまま抱きしめ続けていれば、徐々に雷鳴が遠ざかって行く。

強い風雨に耳をそばだてつつ、ようやく切歌が薄目を開けて言った。

「…もう雷さまは遠くへいったデスか？」

「うん、もう大丈夫じゃないかな」

「アタシのおへそはちゃんといついるデスか!?!」

そういつてペロツとシャツを捲ってくる切歌に、藤堯は呆気にとられるしかない。

白く染み一つない腹部は、まだそこに赤ん坊がいるとは思えないほど滑らかだ。

「う、うん、ちゃんとあるよっ…」

「本当デスか!?! きちんと見てくれてるデスか!?!」

「……………」

…我が嫁ながら、素なのか計算なのかよく分からない。

前者であればいわば天然であり、ある意味非常に切歌らしい。

後者であれば、魔性と形容するにしても、いさかか稚気すぎる誘惑だろう。

このとき藤堯の脳裏に去来したのは、今は妻帯して子持ちになった

同級生の言葉だ。

現在の仕事に就いてから疎遠になっていたが、先日久しぶりに結婚の報告もかねて連絡を取っている。

その際、その同級生は『嫁さんが子供が産まれてから全く俺に構ってくれなくなつた』と愚痴っていたことを思い出す。

子供が産まれると、伴侶に対する愛情が子供に全振りされる夫婦もままあるそう。

こうやって積極的にスキンシップを求めてくる切歌も、いずれ子供を産んだらそうなるのだろうか？

遠くない将来に漠然とした不安を抱く。

いや、まあもちろん生まれてくる子供もとことん愛するつもりではいるけれど。

ともあれ、今はこの瞬間を楽しむしかないか。

もともと身重であるからして、それほどダイープな楽しみ方は出来るはずもなく。

完全に風雨が収まるまで夫婦でいちゃいちゃし、気づけば時刻は夕方。

窓を開ければ日差しも弱まり、漂ってくる風も若干の冷気を含んでいる。

「…そうだな、今のうちなら行けるな。よし、行こうか」

「え？ 行くなってどこへデスか？」

不思議そうに首を捻る切歌を車へ詰め込み、藤堯は車を飛ばす。

目的地が近づくにつれ、切歌の表情にも理解の色が広がった。

駐車場に車を止め、連れだつて目的の場所まで歩くと、そこには既に先客がいた。

「あら、貴方たちも来たの」

マリア・カデンツァ・イヴと月読調。

「そりやお盆だからね」

挨拶を返し、藤堯は買っておいだ菊の花を墓石の前に添えた。

『ナスターシャ・セルゲイヴナ・トルスタヤ ここに眠る』

墓碑銘はない。月の軌道修正を行い世界を救ったその行動は巷間

には知られてはいない。

それでも彼女の行動を、藤堯は憶えている。

直接言葉を交わすことこそなかったが、おそらくナスターシャ教授もこの世界と人類を愛していたのだろう。

「…ママ」

切歌がつぶやきしやくりあげる。

レセプターチルドレンたちは彼女の忘れ形見であり大切な家族だ。

「御報告が遅れて申し訳ありません」

藤堯は墓石に語りかける。

「このたび、オレは切歌ちゃんと結婚させて頂きました」

本来なら、もっと早めに墓前に報告にくるべきだった。

その詫びも込めて、藤堯は心から祈る。

切歌ちゃんのことはオレが幸せにします。

ですから、どうか安らかに眠って下さい…。

少々長いほど手を合わせてから振り向くと、

「来年は三人で来られるデスね！」

お腹に手を当てた切歌がにぱつと笑顔を見せてくれる。

「…あら、私たちはカウントしてくれないのかしら？」

「切ちゃんはまだもう私たちはいらなくなつたの？」

「そ、そんなつもりで言つたんじゃないデス！」

マリアと調に拗ねたように言われ切歌は狼狽。

その三人の様子に、墓の下のナスターシャ教授も自分と同じく苦笑しているに違いないと藤堯は確信を抱く。

宥める意味も込めて、四人で近くの個人経営のレストランに入り、早めの夕食をご馳走した。

これから仕事があるとのマリアに調もくつついてタクシーへ乗り、藤堯は切歌と車で帰る道すがら。

「…今年の商店街のお祭りも楽しみデスね〜」

車窓から設置準備を始めている会場を眺め切歌が言う。

「納涼祭か」

赤信号に車を停めて藤堯も見れば、盆踊り用のやぐらもいよいよ組

みたてられているようだ。

「それなんだけど、切歌ちゃん。今年はお祭りに出るのはやめておこう」

「はいッ!?　なんでデスとツ!?!」

「この商店街のお祭りも、年々人手が多くなってきているだろうが、人混みでお腹とかぶつけちゃあ…」

藤堯としては、至極当たり前に切歌の身体を気遣った上での提案だった。

「そんなの大丈夫デスよ!」

思いのほか強い口調で反論されて面食らう。

「いや、いくら切歌ちゃんが大丈夫だっていつてもね」

「アタシはママになるんデス!　だから子供のことだって守れるデスよ!」

「その子供がまだお腹で小さくて心配だから言っているのであって」

「朔也さんはまだアタシを子供扱いするんデスか!?!」

微妙に議論が噛みあつてない。

そのまま妥協点は見いだせず、車は家に到着。

「っーん」

不機嫌そのままに顔をそらしたまま切歌は車を降りていつてしまふ。

「…まいったな」

藤堯は頭を搔く。

考えてみれば、切歌とケンカらしいケンカをしたのはこれが初めてではないか?

もつとも藤堯とて本気で怒っているわけではない。

確かにあやすような言い回しになってしまったのは、切歌の指摘する通り子供扱いと思われるでも仕方なかったかも。

溜息をつき、藤堯は己にとって現在唯一のパパ友の携帯番号をコールする。

『…なるほど。おまえのところもそうか』

藤堯の話を一通りきいたあと、風鳴弦十郎は太い声で唸るように言った。

「え？ おまえのところも、つてことは司令の方も？」

『うむ。クリスくんも商店街の夏祭りに行きたいと言っではいるのだが…』

クリスに至っては妊娠八か月である。身重具合で言えば切歌の比ではなく、夏祭りに出る危険性も段違いだ。

藤堯がそう共感すると、弦十郎は実に苦しげな声を出している。

『そこそなんとかしろと言われてしまっつてな』

「はあ…」

『ともあれ、藤堯の事情も把握した。明後日まで待っていてくれ』

…なぜに明後日？ と思わなくもなかったその当日がやってくる。

ここ数日、切歌のテンションは目に見えて低い。

一応、藤堯が声をかければ普通に受け答えはしてくるのだが、どこか居心地の悪さを感じるのは否めなかった。

大声を出したり物に当たったりしないのは、彼女なりに胎教について配慮しているのかも知れないな。

そんな風に切歌をいじらしく見ていた藤堯に、弦十郎に本部まで来いと呼び出しがかかる。切歌も同伴するようにとのこと。

そう伝えると、切歌自身は乗り気ではないようだが、司令からの通達とあつては無碍に出来ない。それでも乗り込んだ車で、未練たつぷりの声がこぼれている。

「…夏祭り、楽しそうデスね…」

切なそうな呟きが胸に刺さった。

いっそやっぱり連れていってやろうかな、と藤堯の心が揺れたが、まずは呼び出しの件を片付けなければ。

現行のS・O・N・G・本部は次世代型潜水艦内部に設置されて

おり、平常時であれば潜水艦は秘密ドッグに係留されている。

切歌を伴い、そのドッグに足を踏み入れるなり、藤堯は目を見張る。

「これは…!!」

追従するように切歌も感嘆の声を上げていた。

「ふああああああ…！」

広大な整備ドッグの周辺に張り巡らされた幾つもの提灯。どこからか流れてくるお囃子の音。

そしてその中心には大きなやぐらがそびえている。

「おう、来たな藤堯ッ！」

法被姿の弦十郎が片手を上げて挨拶してくる。

「司令、これは…!?!」

「なに、嫁さんを市井の祭りに行かせられないとあれば、本部で祭りを  
してしまおうという寸法だ」

藤堯は合点が行く。なるほど、明後日まで待てというのはこの準備  
のためだったのか。

「ここであれば、人混みや余計なアクセシブメントの心配もあるまい？」

破顔する弦十郎。

「切ちゃん、おそかったね」

声のする方向を見れば、浴衣姿の調がかけよってくる。

「ほら、切ちゃんも着換えよう?」

こちらを振り向いてくる切歌に頷くと、調に手を引かれて嬉しそう  
に行ってしまった。

「…どうやら切歌くんの機嫌も直ったようだな」

「おかげ様で」

心の底から藤堯は胸を撫で下ろす。

「それにしても…」

チョコバナナ、焼き鳥、金魚すくいと実に夏祭りに相応しいライン  
ナップの出店が幾つも立ち並んでいる。

ただ、そこで働いているのは市井の職人ではない。ほとんどが見覚  
えのある人間で、S. O. N. G. 職員ばかりだ。

「福利厚生の一環でやってみるか!と提案したら、意外とみんなして

ノリノリでな」

朗らかに笑う弦十郎に、藤堯も苦笑で応じた。

まったくこのノリの良さは、トップの感化力に負うところが大きいだろう。

「で、あれはなんなんですか？」

藤堯はずつと気になっていた会場の一角を指さす。

けっこうな場所をとって設営されているのはどうみてもウォー  
タースライダーだ。

だからといって、とても人間が乗れるような大きさではない。そ  
う、ちょうど猫くらいが乗れそうな…。

正体を見極めようと近づく藤堯の視界に、小柄な少女のシルエット  
が飛び込んでくる。

「あ、司令さん、藤堯さん、お疲れ様ですッ！」

「エルフナインくん、これはもしかして例の流しそうめんのやつか？  
？」

弦十郎が尋ねている。

そういえば藤堯も聞いたことがあった。日本の夏の風物詩を極め  
んと、エルフナインが手製の流しそうめんコースターを作ったとかな  
んとか。

「いえ、今回はそうめんではなく、夏祭り用に焼きそばに改良しまし  
た！」

「…なんだとッ!？」

「スライダーの下部をセラミックでコーティングして過熱することに  
より、頭頂部から流した麺は、途中でこんがりモチモチに焼き上がる  
計算になります」

えへん、とばかりにエルフナインはフラットな胸を張る。

「…ということとは、流れてくるのはソースなのか？」

弦十郎の問いに「はいッ！」と元気よく返事をするエルフナイン。

野郎ども二人、顔を見合わせ異口同音に呟く。

「たぶん失敗すると思うぞ、これは…」

着替えに行った切歌はまだ戻ってこない。

弦十郎と別れて手持無沙汰で会場内をうろついていると、クリスがいるのを発見した。

臨月も近いのでさすがに彼女は浴衣を着ていない。

しかし、もともとの小柄な体型もあいまって、赤いワンピースの腹部はかなり大きく膨らんで見える。

そんな彼女は革張りの豪華な椅子に身体を沈め、浴衣姿の響を顎で使っていた。

「次はリングゴ飴とお好み焼きを頼むわ」

「でもクリスちゃん、食べ過ぎ、食べ過ぎじゃない？」

「あたしじゃねーよ。腹の子が欲しがってたんだ。つべこべ言わず持つてきやがれ！」

その光景をに、藤堯は思わず呟く。

「貫録あるなあ…」

まるで女王のような風格を漂わせるクリスを眺めていると、背後から肩を叩かれる。

振り向くと友里あおいが立っていた。

白地に青い菖蒲の柄の浴衣姿も涼しげで、素直に称賛するしかない。

「…似合ってるじゃないか」

「うふ、ありがとう」

「ころころと笑う友里。」

「時に、参加者はみんな志願してくれているのかな？」

良くも悪くも現総司令にはワンマンなところがある。

もし強制参加だったら気の毒だなど思い、弦十郎には訊けなかった本音を敢えて友里へと投げてみた。

「どうせならって、みんなして結構楽しんでるわよ？」

首肯する友里の意見を裏付けるかのように、その背後を浴衣姿の女性職員たちが笑いさざめきながら歩いていく。



「それならいいんだけど…」

藤堯は椅子に座るクリスの方を見て、

「今回の件は、まあ、雪音さんのワガママが発端みたいなもんだろ？」  
嫁を市井の祭りへ行かせるのは危険だから、いつそ身内で祭りを開いてしまえ。

それを職場で実施するだから、一歩間違えば公私混同のそしりを免れまい。

「女性のワガママにどこまで応えられるかが、男の甲斐性ってやつじゃない？」

笑いながら友里はそう返事をしてくる。

…切歌ちゃんのワガママに応じられなかったオレは甲斐性なしか。  
溜息をつき、藤堯は取りあえずクリスへと挨拶をしておくことにした。

この場での彼女のヒエラルキーの高さからも、当然の選択とも言える。

「こんばんは、雪音さん」

「あ、藤堯さんッ」

「立ち上がらなくていいよ、そのまま、そのまま」

「んじゃ、お言葉に甘えて」

常識と礼儀も弁えており、人望もある。

他人の境遇を思いやることも出来、仲間のためなら身体を張ることも厭わないのが、藤堯の雪音クリスの人物評だ。

そんな彼女が弦十郎に対しても分かり易い矢印を出していたことは、二課内では周知されていた。

気づかぬのは当人二人だけという昔の恋愛ドラマのようなシチュエーションを、女性職員たちは非常に堪能していたらしい。

器量に関しては両名とも申し分ないため、最大の難関と思われた年齢差を乗り越え二人が結ばれたことを、藤堯は雛が孵った時に初めて目にしたものを親と思い込む、いわゆる刷り込み現象ではないかと分析している。

雪音クリスという不遇の少女時代を送った彼女にとって、初めて心

の底から信じられた大人が風鳴弦十郎だったのだろう。

もつともそれは、自分と切歌にも当てはまりそうで決して笑えなかったが。

「はい、クリスちゃん、イカ焼きとタコ焼き持ってきたよ〜！ って、藤堯さん、友里さん、こんばんはッ！」

パタパタと響が両手に獲物を持って駆けてくる。

「こんばんは。…あれ？ 小日向さんは？」

「未来ならいま、切歌ちゃんの着付けを手伝ってますッ！」

時間がかかっているのは、やっぱり妊娠しているからかな？

藤堯がそんなことを考えていると、背後でドン！ と腹の底に響くような大きな音。

振り返れば、やぐらの上で、もろ肌を脱いだ弦十郎が見事なバチ捌きで太鼓を叩いているところ。

笑顔を浮かべて筋骨逞しい腕を縦横に動かすその姿は、異様なほどサマになっている。

「…基本的にド器用な人なんだよな」

カンフー映画を見ただけで超人的な戦闘力を手に入れる弦十郎にとって、太鼓の叩き方をマスターすることなど造作もないことだろう。

少なからず称賛を込めてそういったつもりなのだが、その嫁であるクリスが不機嫌な表情を浮かべていた。

「…ったく、自分だけで楽しんじゃまってるじゃねえかッ」

その言に、藤堯は思わずたじろく。  
そもそもこのこの祭りはクリスのために催したといっても過言ではない。

なのになんという理不尽な。

唾然とする藤堯に、友里が近づいてきて囁くように言う。

「歌詞の文句にもあるでしょ？ 嫉妬は女の花火っていうじゃない」

「いや、そんな楽しそうに言われても」

そもそも、同性である女性本人から言われてもなあ。

「お待たせしたデェス！」

ようやく切歌が戻ってきた。

遅かったね、と出迎えて、藤堯は即座にその理由を悟る。

しかし、につこりと笑うと、持っていたハンカチでその唇の端についたソースを拭ってやった。

恥らう切歌だったが別に咎める気持ちはない。祭りを堪能してくれて、機嫌を直してくれただけで十分だ。

「はい、切ちゃんの分だよ」

遅れてやってきた調が、リング餡を渡してくる。

受け取った切歌と、「朔也さん、半分こにするデス！」などとやりとりしていると、やぐらの上で弦十郎が良く通る声を張り上げた。

「諸君、楽しんでくれているかッ!? ここで、今夜のスベシャルゲストを紹介しよう!」

その声に応じるように、やぐらの周辺からスモークが溢れる。

おまけにレーザーサイトも連動して縦横無尽に張り巡らされる中、やぐらの上に輝くような長い髪を翻す人影が。

「狼狽えるなッ! お祭り仮面とは私のことよッ!」

オカメのお面をかぶって法被を着てはいるものの、恵体に聴き慣れ過ぎた声。

「なにやってるんだろ、あの人は…」

見慣れたシルエツトに藤堯が呟けば、

「今日、とても大切な仕事が入っているって言ってたけど、これのこと…?」

調も首を捻ってる。

ただ、切歌だけが異様に高いテンションで興奮していた。

「ふおおッ! お祭り仮面! いったい何者なんデスか!」

「…本気で言ってるの切ちゃん?」

ともあれ、会場内にクリスタルボイスで北海盆歌が響き、弦十郎が太鼓を叩く。

やぐらの周囲を浴衣姿の職員たちが踊り回る。

一緒に踊る切歌と調を眺めつつ、藤堯はしみじみとぼやいた。

「ビルボードチャートを制した歌姫が日本の田舎のローカルソングを

熱唱するなんて、これはもうわっかんねえな…」

出店の金魚すくいや射的も楽しみ、ほとんどの食べ物も制覇した切歌は、お土産に綿あめの大きな袋も担いでご満悦。

店じまいした職員たちも焼き鳥片手にビールを交わすなど、賑やかで和やかな空気が会場内に漂っている。

そんな会場の光景が一瞬で切り替わった。

吊るされた提灯はそのままに、上空にあるのは無機質の天井ではなく、星の瞬く高い夜空。

そこに甲高い音を引きながらゆらゆらと火柱が立ち昇り、爆発。

夜空に絢爛と咲いた大きな花火に、全身を揺らすほどビリビリとした空気の振動まで伝わってくる。

もちろんここは屋内なのであるが、現地にいると錯覚してしまうほどの臨場感。

「どうだ？ 音響に関しても多少工夫してみたぞ？」

いつの間にかやぐらを降りた弦十郎が、額の汗を拭いながら言う。

「…なんという異端技術の無駄遣い…！」

装者の戦闘シミュレーションにも使用されている疑似環境形成プログラムは、元F・I・Sから回収した技術を流用した物。今見ている花火も、それに由来するものだろう。

思わず藤堯はそう呟いてしまったが、考えてみれば何も対聖遺物や対ノイズだけに使用を限定する必要もないことに気づく。

こんな風に平和的に活用することこそが、本来的な使用方法なのかも知れないな。

夜空には次々と大輪の花が咲く。

誰もがうっとりで見蕩れ、その迫力に身を委ねる中、隣に立つ切歌が口に手を添えて叫んだ。

「た~~~~やま~~~~!!」

「それを言うならたまやだよ、切ちゃん!」

「デス?」

なお、やぐらの上のお祭り仮面は盛大にコケた模様。

ちなみに、エルフナイン発案の焼きそばスライダーは、響を除いて女性陣に大不評だった。

流れてくる焼きそばを取る際に、ソースが飛び散って浴衣を汚してしまうからだ。

なので響はシンフォギアを着装して一人黙々と食べていたのとこの。

## 第14話

帰宅途中の商店街を歩いていると、菓子店のショーウィンドウが目についた。

こんな時間にも関わらず名物のケーキが残っている。それも二つ。

「すみません、二つともください」

藤堯は迷わず財布を取りだして購入。

ケーキの入った箱をぶら下げながら、以前の自分だったら決して買わなかっただろうなと苦笑する。

むしろだいたいこのレシピを推察、分析し、自作していたと思う。

「オレも変わったもんだねえ…」

そう呟く藤堯自身、自覚はなかったが、その足取りは軽く表情もにやけている。

自分が変わった理由は分析するまでもなかった。

今の家には、帰りを待っていてくれる人がいるのだから。

自宅のドアを開ければ、ピンクに黒ラインの小振りのスニーカーが玄関先に揃えてあった。

これは切歌の所有物の中で見たことはない。となれば来客であつて、この靴のコーディネートが似合う少女は一人しか記憶になかつた。

「やれやれ、調ちゃんが来ているのか」

こりや、オレのぶんのはケーキはお預けかな？

頭を搔きつつ、藤堯は靴を脱ぐ。

それから帰りの挨拶の声を放った。

「…ただいま〜っと」

しかし、返事はない。

どうしたんだろうと歩を進めれば、キッチンから何とも温かいハミングが聞こえてくる。

「おさ〜んどん、おさ〜んどん♪」

そつと覗き見ると、予想通りに私服姿の月読調が居た。

切歌と二人並び、流し台に向かい合っている。

その二人の後ろ姿が、まるで姉妹のようになりしっくりとしていて、藤堯は見蕩れてしまった。

続いて、切歌がせつせと夕食の準備をしてくれていることに胸がいつぱいになってしまい、声をかけあぐねてしまう。

「おさ〜んどん、おさ〜んどん♪」

なおも歌いながら、調はぐつぐつ音を立てる土鍋へレンゲを差し込む。

すくった汁をふ〜ふ〜と冷ましてから口に含んで一言。

「…うん、思った通りの味が出た」

「いやいや、調。ここで隠し味の投入デスよ！」

宣言するように胸を張った切歌は、次々と手に持ったものを土鍋へ投入。

「コーンクリームにパクチーを入れて！ トドメはチョコレートデース！」

「そ、そんなにアレンジして大丈夫なの切ちゃんツ!？」

「料理は愛情、女は度胸ツ！ って朔也さんが言っていたデース！」

おい、オレはそんなこと一言もいった記憶がないぞツ!？」

廊下の壁越しに心の声を叫ぶ藤堯に気づくはずもなく、切歌は土鍋の蓋を閉めている。

「これで煮込めば出来上がりデース！」

「煮込めば煮込むほど美味しくなるものね」

いえーい！ とばかりにハイタッチで手を打ち鳴らす二人。  
何を作ってるかよく分からないけど…まあ、楽しそうだなによりだな。

そんな感想を抱きつつ、副菜のポテトサラダを作り始めた二人に今度こそ声をかけようとしたところ、調が思いもがけないことを言い放つ。

「…切ちゃんは、藤堯さんのどこが好きなの？」

「全部デスよ！」

即答する切歌に、藤堯は言葉を呑みこむ。

「朔也さんは頭もいいし、料理も上手デスし、カッコいいデスよ？」

あまりに明け透けな切歌の答えに、藤堯は思わず赤面。

すると調が訝しげに首を捻る気配。

「かっこいいかなあ？ わたしは緒川さんの方がかっこいいと思うけど」

「そうデスね、緒川さんもカッコいいデスすね！」

「…切ちゃんは司令もかっこいいと思う？」

「カッコいいデスよ！」

「ウエル博士は？」

「何おバカなこといつてんデスカ調え？」

「うん、いつもの切ちゃんて安心した」

苦笑する調だったが、切歌の答え自体に納得したわけではないらしい。

「切ちゃんにとって、緒川さんも司令もかっこいいんだよね。だったら切ちゃんが最初にデートしたのは藤堯さんじゃなくてその二人だったらどうなったのかな？」

「へ？」

その質問に、切歌のきよとんとした気配。

廊下で聞き耳を立てる藤堯もビクツと身体を震わせる。

そもその初デートに至る経緯が、消去法的にオレにお鉢が回ってきただけ。

確かに緒川がいれば、オレの替わりに切歌ちゃんとデートしていた



かも知れない…。

「うーん…」

切歌が腕を組んで考えこんでいる。

その反応に、藤堯も一抹の不安を覚えていると、

「どう、切ちゃん。答えはでた?」

「答えてっぺゆーか。そもそも調の質問の意味が分からないデスよ」

「え? だ、だから…」

「緒川さんも司令さんも料理デキるんデスかね? ピアノ弾けるんデ

スかね?」

「…それは知らないけど」

「出来たとしても、朔也さんほどアタシを甘やかして、そしてアイしてはくれないデスよ」

につこりと笑い、切歌は自らのお腹に手を当てている。

ゆったりとしたワンピースの腹部はだいぶ膨らんでいた。

「……………」

唇を噛む調。

どこか悔しげな、そして悲しげな表情を浮かべ、黒髪の少女は呟く。

「もし」

「もし?」

「もし、切ちゃんとケンカして、家を飛び出して本部へ行ったのがわたしの方だったら、どうなっていたんだらう…?」

あの時、藤堯は切歌と出会った。

それが切歌でなく調だったとしたら。

…オレは調ちゃんとデートしていただろうか?

でも、彼女はそんな明け透けに悩み事を他人に訴えてくるタイプではないと思うし…。

「その仮定は無意味デスよ、調」

そんな彼女の懊悩を、笑顔で吹き飛ばす切歌がいる。

「例え調が朔也さんとデートをすることになっても、今と同じでなーんにも変わらないんデスから」

「変わってない? そんなことない! ぜんぶ、全然変わったんだよ、

「切ちゃん！」

半ばベソをかけた調が、叫ぶように言う。

慟哭するような彼女の様子に、藤堯も同情出来た。

世の中に不変のものはない、などと大人らしく諭すには、この最近の彼女たちを取り巻く環境の変化は急激にすぎるだろう。

なのに、金髪の少女の方は、実に不思議そうに首を捻っている。

「デス？ 調もいるし、マリアもいるし、何か変わったデスか？」

「切ちゃん、藤堯さんと結婚しちゃったじゃない…ッ」

「ああ、結婚したデスね！ それにお腹にベイビーもいるデスッ」

いひひつと照れくさそうに笑う切歌に、調は半ば呆れたような視線を向けて、

「この間まで、切ちゃんと一緒に暮らしていたんだよッ!? 二人で一緒にッ！ それなのに…ッ！」

「ひよつとして、調は寂しいんデスか？」

「寂しいよッ！ 寂しいに決まっているじゃない…ッ」

うつむく調。

そんな彼女を優しく抱きしめる切歌。

「ごめんなさいデス。アタシもそんな調に寂しい思いをさせてるなんて思わなかったデス…」

「切ちゃん…」

くすくすんと鼻をすする調。

その身体をさらに強く抱きしめ、華奢な肩にアゴを載せて切歌は囁く。

「大丈夫デス。アタシにとって調は大切な家族のままデスから…」

「…藤堯さんよりも？」

「順番なんてないデス。藤堯さんも、マリアも、ママもセレナだって、みーんな同じくらい大切な家族デスよ」

諭すように言う切歌は、少し大人びて見える。

調は涙を拭いながら笑う。

「なんだか切ちゃん、お姉さんみたい…」

「当ったり前デス！ アタシは調より一つ年上のお姉さんなんデスか

らねッ」

藤堯の記憶が確かなら、そのやりとりこそが、全ての元となったケ  
ンカの原因のはず。

しかし今度は調は言い返しはしない。

「本当にわたしは切ちゃんのことを大好きだよ…」

切歌の肩に顔を埋めて甘えるような声を出す。

「それに、もうすぐアタシはママにもなるんデスからねッ」

えっへん！と誇らしげにそう続けた切歌に対し、調は表情を曇らせ  
た。

その変化に、切歌もさすがに不審そうな顔つきになる。

「どうしたデス、調？」

「だって…悔しいんだよ」

「何がデス？」

「わたしがいくら切ちゃんは好きでも、子供まで作れないもの…」

「あ…」

さすがに切歌も困惑した表情を浮かべた。

世間的にはジェンダーフリーの考えも普及し、同性婚も浸透してい  
るが、さすがに同性同士での妊娠、出産は不可能な現状である。

「…でも、響さんと未来さんあたりなら作っちゃいそうデスけどね」

熱い風評被害を口にしたあと、切歌は調の顔を覗きこむ。

「なんならどうデス？ 調も朔也さんにアイしてもらいますデスカ  
？」

「え…ツ？」

調の髪が逆立ち、顔がたちまち真っ赤に染まった。

「き、切ちゃん、何をいつているのツ!？」

「え？ 調もママになりたいんデスよね？」

「それは浮気だよ不倫だよ略奪愛だよ切ちゃんッ！」

「だって調と朔也さんは家族デスよね？ 家族同士で愛し合うのは何  
も問題ないと思うんデスけど？」

あらん限りの不貞のワードを並べる調を不思議そうに眺める切歌。  
物陰でそれを見ている藤堯も、穏やかな気持ちではいられない。

…それって近親？ いや、重婚になるのか？ とうか、切歌ちゃん、ちよつとばかり家庭内の博愛主義が爆発しているッ！

「…悪くないかも」

頬を染めぼそりと呟く調に、藤堯は絶句。

「デスデス！ 朔也さんもきつと調を大切にしてくれるデスよ！」

満面の笑みを浮かべる嫁を驚愕の目で見てしまった藤堯を、誰が責められよう？

そんな藤堯の心情など露も知らず、調は悪戯っぽい笑みを浮かべて、

「でも、わたしは独占欲が強いから、切ちゃんから藤堯さんを取っちゃうかも」

「デースッ!? それはちよつと困るデス！」

「いつそ藤堯さんを M a p p u t a t s u にして仲良く二人で分けてみる？」

「さすがにそれじゃあ朔也さんも死んじゃうデスよッ!」

「エルフナインに相談してみれば、錬金術でなんとかしてくれるかも」  
「デスカね？」

調の提案に、切歌は割と本気で考えこんでいるように見える。

…オレはプラナリアか何かかッ!?

さすがに色々洒落にならない会話だ。そろそろ割り込もうかと藤堯が思案していると、調はゴホンと咳払い。

「まあ、冗談はこれくらいにして」

冗談なのかよッ！

触っていい？ と前置きして、調は切歌の腹部へと手を当てた。おっかなびつくりの手つきに、その眼差しはひたすらに優しい。

「切ちゃんはママになって、わたしはおばさん、か…」

「デス？ 調もこの子のママになって欲しいんデスけど…」

「…何いつているの切ちゃん？」

「調だけじゃないデス。マリアもこの子のママになって欲しいんデスよ」

戸惑ったような表情を浮かべる調だったが、切歌の物言いはあくま

で真剣。

やがて、調の顔に穏やかな笑みが広がっていく。

「そっか。切ちゃんと一緒にわたしもママになれるんだね？」

「そうデス！　…早く元気に産まれるデスよ？　たくさんママが待っているんデスからね」

「そうだね、切ちゃんの子供なら、わたしの子供も同じなんだよね…」  
しみじみとそう呟いて、照れ隠しのように調は室内に視線を巡らし  
ている。

その視線が藤堯を見つけたのは、偶然というより必然だろう。

「…や、やあ。ただいま」

「ふ、藤堯さん、いつからそこにッ!？」

目にも止まらぬ速さで包丁を手にとった調は、指の先にのせてくる  
くると回転。

「返答しだいによつてはButtagiriですッ!」

顔を真っ赤にし、物騒な台詞とともに調は臨戦態勢。

「た、たつたいま帰ってきたばかりだよ!?　本当だよッ!？」

命の危険を感じた藤堯が咄嗟に嘘をついたのもむべなるかな。

「あ、朔也さん、お帰りなさいデゥス!」

そんな剣呑な空気に全く頓着せず抱きついてくる切歌。

「うん、ただいま。はい、これ、お土産のケーキ」

「嬉しいデスッ!」

受け取って、切歌はその場でくるくると回転。

短い喜びの舞いを披露したあと、藤堯を向いてにぱつと笑う。

「調と一緒に晩御飯を作ったデスよ!　早く手を洗ってきて下さいデ  
ス!」

不承不承銚ほじを収めたらしい調と一緒に食卓に着く。

テーブルの上にデンツ!　と土鍋を置いて、茶碗と小鉢が配られ

た。

さつそく食べるデス！ と蓋を開けようとした切歌を制し、藤堯は調へと向かいあう。

「えーと、その、調ちゃん…？」

藤堯自身、月読調という少女に対し、強い負い目を意識している。彼女の最愛の人とでもいうべき切歌を娶ってしまったからだ。

同時にそれは、調との縁戚関係を結ぶことにもつながっているわけだが、彼女の藤堯に対する態度は、お世辞にも柔和とは言い難い。

その気持ちが分かるだけに、どうにか改善しなければと常日頃考えていたわけだが、今日はその絶好の機会だと思おう。

「いつも切歌ちゃんの面倒を見てくれて、ありがとうね」

「御礼を言われるまでもないです。わたしが切ちゃんの面倒を見るのは当たり前のことですから」

あくまでそっけない調の態度に苦笑する。

「いや、本当に感謝しているんだぜ…？」

返事はない。調はただじーっとした眼差しを向けてくる。

その視線には、こちらを咎めるような、会話を拒否するような圧力が込められていた。

正面からその視線を受け止め——本音を言えば途中でそらしたくなっただけ——藤堯はゆっくりと諭すように言う。

「調ちゃんが切歌ちゃんを誰よりも大事に思っていることは理解している。」

でも、オレだつて切歌ちゃんのことを世界の何よりも大切なんだ…朔也さん。と感動している切歌の眼差しを敢えて無視して藤堯は言葉を重ねる。

「きみもオレも、切歌ちゃんを大切に思っている気持ちは一緒なんだ。その気持ちつて、喧嘩して相容れないようなものなのかな？」

「……………」

「それにね、きみと切歌ちゃんは家族で、オレは切歌ちゃんと結婚した。となれば、きみはオレにとつても大切な家族なんだ」

「……………」

「これから子供も産まれるんだ。仲の悪い家族なんて、子供に見せたくないよ」

調は顔を伏せ、視線が途切れた。

沈黙は溜息で破られる。

「…わかりました。確かに家族の仲が悪いのは、赤ん坊の教育にも悪いと思いますから」

それから、じろりと藤堯を睨んで調は言ってくる。

「それに、別にわたしは藤堯さんとケンカしているつもりはないんですけど？」

「そ、そう?」

その眼差しだけで神経にクるんだけど。

大人のやせ我慢を發揮し、どうにかその言葉を呑みこむ藤堯。

「わたしにとつても藤堯さんも大切な家族（仮）ということにします」  
「なにそのカツコカリは?」

「でも、家族なら、一つだけ約束して下さい」

「…約束?」

一転して真剣な表情になる調に、藤堯も態度を改める。

「家族同士、嘘はつかない、隠し事はしないこと」

「あ…」

小さく切歌が声を上げた。

その様子を横目で見て、藤堯は調の真意を諒解する。

かつて自分がフィーネの器であると勘違いし、『てがみ』という遺書を残した切歌。

同時にそれは調自身にも当て嵌まり、彼女も命を落とす寸前だった。

そんな苦い経験から、既に彼女たちの二人の中で同じような約束は交わされているはず。

その上で調が申し出てくれたのは、彼女たち二人だけの約束の輪の中に藤堯も入れてくれるということ。

家族として認め合うという意味では、これ以上ない証だろう。

「分かった。家族同士、絶対に嘘も隠し事もなしだ。約束しよう」

力強く藤堯は頷く。反面、

「…でも、仮に約束を破ったらどうなるの？」

そう訊ねずにいられないのは、藤堯の藤堯たる所以か。

「その時は、藤堯さん色々とButtagiriです」

涼しい顔で断言する調がいる。

「え、え？ 色々って、何を？」

「だから色々です」

…この子は本気だ。

うすら寒いものに背筋を襲われる藤堯。

そして、そんな雰囲気の中でもとことん空気を読まない切歌の存在は、逆に救いとなる。

「さあ、難しい話もすんだみたいデスし、ごはんにするデス！」

さっそく土鍋を開け、藤堯の小鉢に中身をたっぷりとよそってくれた。

立ち昇るは鯉節の芳醇な香り。

透き通った和風出汁の中に、煮込まれた様々な具材が沈んでいる。

箸で持ち上げて齧れば、染みこんだ旨味が存分に口いっぱいに溢れた。

熱々の大根を頬張りながら、藤堯は思う。

うん、本当に良く出来たおでんだ。

ゆえに、震える声で尋ねずにはいられない。

「あの、切歌ちゃん。隠し味のコーンクリームとパクチーとチョコ

レートはどこへ…？」

「デスう？」



そして。

「——藤堯さん。さっそく嘘が一つバレましたね」  
「…ひひひひひッ!?!」

## 第15話

その日、S. O. N. G. 発令所は一種の異様な雰囲気に含まれていた。

室内と空気の中にいるのはもちろん総司令である風鳴弦十郎だったが、気配を発しているのは彼自身ではない。

ともあればソワソワと落ち着かない雰囲気は、弦十郎を取り巻く職員たちの放つもの。

なぜにこのような状況に陥っているのかというと、とうとう産気づいた雪音クリスが本部内の医療施設に入院しているからだ。

「あの…司令。やはり、傍についていて上げた方が…」

本日、幾度目とも知れぬ声を上げたのは友里あおいだ。

対して、腕組みをしたまま弦十郎は答える。

「なに、ここもその気になれば一息で行ける近場だ。何も心配はあるまい」

「ですが…」

だったらなおさら子供の生まれる今日この瞬間くらい、ずっと妻の傍にいて上げればいいのに、と藤堯は思う。

友里も、いや、他の職員の気持ちも同様で、皆が口々に有給を取得すればいいのに等声をかけているのだが。

「皆の心遣いはありがたいが、うちの嫁さんの方が付き添わなくてもいいと宣言していてな」

幾度も繰り返している問答なのに、弦十郎の声は穏やかだった。

クリス曰く「出産は女の戦いだッ！ 旦那は自分の戦いをしろッ」  
とのこと。

弦十郎は世界を特異災害から守る特殊部隊の長であるから、自分の任務をあだおろそかにするなというこららしい。

ゆえに、弦十郎自身も、常在戦場の平常心なのに違いない。

不満そうに口元を膨らませ、友里は前を向き直っている。

こと女性目線からは強く進言できるが、結婚も妊娠出産経験もない身では説得力に欠いているからだろう。

結果として、泰然自若とする弦十郎は全くいつもの様相で、その冷静沈着なさまを藤堯は羨ましく思っている。

自分は神経が太くないから、間違はなく狼狽える自信があった。

：切歌ちゃんの時は、きっとオレは動揺しまくっているんだろうな。

そんな風に遠くない将来に思いを馳せていると、司令席のホットラインが鳴り響く。

発令所内に緊張が走る中、きっかり受信音を二つ数えてから弦十郎は受話器を手に取る。

「はい。：：そうか、無事生まれたか」

その声に、発令所内の空気は反転した。

受話器を置く弦十郎に、皆が次々に「おめでとうございます!」と祝福の声をかける。

そのまま一気に祝賀会でも催されそうな雰囲気の中、弦十郎は「みな、ありがとう」と返事はするも司令席から動こうとしない。

「どうしたんです? 赤ちゃんの顔を見にいかないんですか?」

怪訝そうに友里が尋ねれば、

「いや、まだ就業時間中だからな」

さすがにこの返答には友里も血相を変えた。

「妻が自分の戦いを終えたんですよ!? 夫が労わなくてどうするんですかッ!」

「むう」

その迫力にたじろぐ弦十郎に、藤堯も後押しする。

「その通りですよ。こちらはオレたちに任せて下さい。何かあればすぐに呼びますから」

「……」

弦十郎は沈黙するが、その時間は決して長くない。

「…そうか。ならば甘えさせてもらおうとするか」

そういつて毅然と身を翻す様は、全く普段通りで羨ましい。

発令所を出て行こうとする弦十郎の後姿を見ながら、藤堯は自分もあの胆力を真似たいと願う。

直後、ぼこんツ！ という音が響く。

見れば、発令所の扉の隣の壁が人型にくり抜かれていた。

——訂正。あんなの、真似したくでも出来るもんじゃねえ。

「うふ、やっぱり司令も動揺していたのね」

隣席で微笑ましい声を出す友里に、バチバチと機材が火花を散らす壁の穴を見ながら突っ込まずにはいられない。

「いや、あれはそういう問題なの？」

就業時間を終え藤堯は発令所を出る。

ゆるゆると医療エリアへと赴けば、新生児室の前の通りは鈴なりの人ばかり。

先頭には実に女性職員の姿が多く見られた。単純に赤ん坊というだけで、女性は興味をそそられるらしい。

ましてや弦十郎とクリスの子供で双子ということであれば、職員のうち誰もが一目は拝みたいと切望している。

「ふおおおおッ！ 可愛い！ 可愛すぎるツツ！」

かぶりつきで見ているのは、予想通りの立花響。

リディアンから直行してきたらしい制服姿は、隣にいる小日向未来も一緒だ。

藤堯も赤ん坊の顔は見たかったが、他人を押しつけてまで見るつもりはない。

なので遠巻きにしていると、くいくいと制服の袖を掴まれた。

「朔也さんッ」

「切歌ちゃんか」

嫁であるところの暁切歌がこちらを見上げている。

「朔也さんも赤ちゃんを見に来たんデス？」

「ああ。そのつもりだったけどね…」

こんな大騒ぎだから、あとでゆっくりと出直そうかな。

そう切歌に告げると、彼女はにっこりと笑った。

「携帯電話に動画をとってあるけど、見るデスか？」

「へえ？ そうなの？ それは是非」

本日、弦十郎の替わりというわけではないが、クリスの傍でマリアと一緒に付き添ったという。

切歌の差し出してくる画面には、出産間もない双子の赤ん坊を両手に抱きかかえるクリスの姿が映っていた。

赤ん坊を優しくに眺めるクリスの瞳は完全に潤んでいた。

そのクリスの頬に優しく手を添え、一緒に赤ん坊の顔を覗きこみながら「良く頑張ったな」と労う水っぽい弦十郎の声も収録されていた。

全てがなかなかレアな映像記録ではなからうか。

見終えた藤堯は、切歌に更に手を引つ張られる。

「クリス先輩のお部屋に挨拶に行くデスよ！」

「ええ？ オレがお邪魔してもいいもんかな…」

基本的に、出産直後の女性の病室へお邪魔するなど、身内とかのよほど親しい関係ではないと躊躇してしまうところだ。ましてや藤堯は親戚でもなければ男性でもある。

「大丈夫デスよ！ 司令さんもいるデスし」

そりやあ旦那である弦十郎がいるのは当然だろう。

半ば切歌に背中を押されるようにして、藤堯はクリスの滞在している病室の前へ。

ありや、何もお祝いの品を持ってきてないや、と思い至っても手遅れだ。

「…お邪魔します」

室内へと入れば、ベッドで上体を起こすクリスに、そのそばに立つ

弦十郎、椅子に座るマリアの面々がいる。

空調が完全に利いているはずだが、どことなく甘ったるく懐かしい匂いがした。

「ああ、これはお母さんの匂いってヤツだ。」

「お疲れさまです。そしておめでとうございます」

ベッドのクリスと弦十郎へ頭を下げる。

「うむ、ありがとう、藤堯」

「あたしからも礼を言うぜ。切歌がいてくれて助かったよ」

そういつてくるクリスに藤堯は軽く驚いてしまう。

「え？ 切歌ちゃんが何か役に立ったの？」

「…それってどういう意味デス？」

切歌が睨んでくる。

「え、いや、そういう意味じゃなくてね…！」

切歌も妊娠七か月の身重だ。そんな身体の彼女より、身軽なマリアの方が色々と動けるのは自明だろう。

しどろもどろでそう説明する藤堯を援護するように、クリスが口を挟んできた。

「いてもらうだけで良かったんだ。出産は大変だったけど、後輩の前で無様な姿は見せられないからな」

「そうかしら？ パパあ、ママあとか滅茶苦茶に泣き叫んでいたようだけど？」

とマリア。

「ああ？ そんなこと言った覚えはねーぞ?!」

「なら、そういうことにおきましようね」

いなすマリアを横目に、切歌に「どうだったの？」と尋ねてみる。切歌はにつこりとしただけで答えてくれなかった。

そのあと、丁度夕食が運ばれてきたのを機に、切歌と一緒に病室を辞す。

そのまま家に帰る道すがら、切歌が尋ねてきた。

「アタシも本部の病院へ入院するんデス？」

「う〜ん」

藤堯はすぐに返事が出来ない。これはずっと考えているがなかなか難しい問題である。

確かに緊急性や安全性を考慮すれば、S・O・N・G・本部である次世代潜水艦の中ほどの安全地帯は、世界中でも数えるほどしか存在しないだろう。

しかし、今回クリスがその選択を出来たのは、彼女にほとんど身内が居ないからだ。

身内の少なさは切歌もクリスに準じるが、藤堯の方は両親も健在。

出産前後の切歌の見舞いや、孫の姿を一刻でも早く目にしたいのは両親の望むところだろう。

だがS・O・N・G・本部で出産に及んでも、基本的に一般人は訪問することすらできない。

ならば市井の病院という選択になれば、シンフォギア装者である切歌に対する配慮が必要になってしまう。

そこいらへんの警備は弦十郎から大丈夫だと直接請け負ってもらってはいたが…。

とりあえずはつきりとした返事が出来ないまま、手をつないで歩く。

切歌は最近髪を伸ばしている。

全体的に髪が伸びたその横顔は、なんとも大人っぽく見えた。

藤堯は、出産を控えて短くするとばかり思っていたのだが、なんでも短いままの髪型をキープするのも大変らしい。かえって手間がかかるので、敢えて髪を長く伸ばし、後ろで結び上げたりした方が楽な場合もあるそうで、切歌はそれを選択していた。

そんな彼女を引き連れて商店街へ入れば、方々から声をかけられる。

魚屋、八百屋、肉屋、お菓子屋、etc…。みな切歌が利用しているところばかりだ。

「最近、みんなの眼差しがとーっても優しいんデスよ♪」

大きくなったお腹を抱えながら切歌が笑う。

そんな彼女は、お気楽極楽な本来のキャラも相まって、いまや商店

街のマスコットのようだ。

特に買い物もしていないのに「ほら、もってきな」と色々なものを貰ってしまう。

いちいちペコペコと頭を下げて、気疲れしつつも官舎へ戻れば、玄関先にローファーが揃えてあつて藤堯はげんなりとしてしまう。

「お帰りなさい切ちゃん」

パタパタと駆けてきたのはエプロン姿の月読調だ。満面の笑みで切歌を出迎えてくれる。

一応藤堯も出迎えてくれるのだが、向けてくる笑顔は体感温度で20度ほどは差がありそうだ。

「もう、ご飯も出来ているよ」

そう切歌を気遣う調に声をかけてみた。

「そういえば調ちゃんは司令たちの赤ちゃんは見てきたのかい？」

「はい、学校が終わってすぐに」

それなりに返事はしてくるのだが、なんかそっけない印象が捨てきれない。

自宅なのにアウエー感を意識しながら食卓に着けば、

「はい、切ちゃん。鳥胸肉のトマトソース煮に、柚子餡の風呂吹き御大根、それとスープ蒟蒻パスタだよ♪」

「御馳走デクス！」

「はい、藤堯さん。大根の皮のきんぴらに鳥皮のケチャップ炒め。ご飯はレンジでチンしてどうぞ」

「……………」

メニューと待遇に格差を感じるのは気のせいだろうか？

いや、作ってもらっておいて文句をいうのも大人げない。

だいたい切歌に作ってもらっているメニュー自体、低カロリー高たんぱくの妊婦用メニューの見本みたいなものだ。栄養バランス、見た目的にも、ぐうの音も出ない逸品である。

そんな調自身は、涼しい顔でスパゲティナポリタンを食べていた。

「切ちゃん、デザートもあるよ」

「ほんとデスか!？」



「はい、りんご寒天からおからクッキー」

全くの至れりつくせりに、藤堯の介入する隙がない。

まあ、それでも構わないか、と二人が後片付けする後ろ姿を眺めながら、一人食後のコーヒを啜る。

「切ちゃん、お風呂入ろ」

そしてさも当然のようにお風呂セットを持って、調は切歌と浴室へと消えた。

しばらくして戻ってきた切歌がワンピースタイプの寝間着を着ていたのはともかく、調もピンクの水玉パジャマ姿なのに、藤堯は憂鬱な気持ちになる。

「あの、調ちゃん。今日も泊まっていくわけ？」

「あれ？ 言ってませんでしたっけ？」

足しげく藤堯家に通い、夕食や風呂の準備をしてくれるのには感謝している。

同時に、一緒に夕食を食べた流れで泊まっていくことが増えていった。

調も自分にとっては家族同然と藤堯は宣言してしまった手前、邪険には出来ない。

が、結果として切歌と二人きりで過ごす時間は大幅に減っていた。

もともとは切歌も調もこのような生活を送ってきたらしいが——  
—調ちゃんの目的は、オレが切歌ちゃんとイチャつくのを妨害することなんじゃないの？

藤堯の予想は、おそらく当たっている。

入浴後も二人で肩を寄せ合い、生まれてくる子供の命名辞典や、赤ん坊用のグッズなどのカタログを眺めている。本来ならそこそが藤堯のポジションなはずなのだが、あまりにも仲が良さそうな様子に割って入る隙がない。

不承不承風呂へ入って戻ってくれば、

「それじゃあ、藤堯さん、お休みなさい」

調は切歌を伴い寝室へと消えた。

「……………」

見送り、藤堯は無然とする。

身重の切歌はベッドで寝るのは当然として、一緒に調が寝たがれば、やはりベッドを使うしかない。

そして藤堯家の寝室のベッドは、さすがに二人で寝るのでギリギリだ。

来客用の布団もないので、藤堯は仕方なくリビングのソファで横になる。

なんか理不尽だ。オレは家主なのに。

そうボヤいたところで、早く眠らなくては明日の仕事に差し支えてしまう。

いつの間にかこの状況にも慣れつつある自分も嫌だな、と思いながら瞼を閉じた。

肩を揺すられ目を覚ましたのは夜半過ぎ。

「…朔也さん」

枕を持った切歌がこちらを見下ろしている。

「どうしたの、切歌ちゃん？　眠れない？」

寝ぼけ眼をこすりながら尋ねれば、首を振って切歌は小さく笑う。

「朔也さんと一緒に寝ようと思って」

「調ちゃんは大丈夫？」

「調なら、もうぐっすり眠っているデスよ」

「なら、おいで」

身体をずらし、ソファの内側にスペースを作る。

嬉しそうに滑り込んでくる切歌の身体と、ほとんど密着する形になった。そうしないとソファからずりおちてしまう。

切歌の両足が自分の足に。両腕は首に抱きついてくる。

藤堯も切歌の頭を抱きかかえるようにして、その額に軽く口づけ。

本当なら、夫婦の営みとまではいかなくてもせいぜいイチヤツきたいものだが、調が近くにいるとあつてはそれもままなるまい。

切歌の身体の暖かさと柔らかさ、それと彼女の香りを胸いっぱい吸い込む。

しばらく頭を撫でて滑らかな髪感触も楽しんでいたが、気づけば

切歌は実に幸せそうに寝息を立てていた。

藤堯も満たされた気分で瞼を閉じ、再度眠りの世界へ旅立つ。

それから間もなく。

「…あいたあッ!!」

ソファアールから突き落とされる藤堯がいる。

痛む腰を摩りながらソファアールを見れば、元気いっぱい両手を突きだして爆睡する切歌がいるわけで。

どういうわけか彼女は、ベッドだと比較的大人しく寝ているのに、ソファアールで寝ると異様にアグレッシブな寝相になる。

再度ソファアールと一緒に横になっても、またぞろ蹴り落とされたりする羽目になることを、藤堯は経験則で知っていた。

繰り返すが藤堯家に余分な布団はない。だからといって床で眠るのは身体にも悪い。

仕方がないので藤堯は寝室へ赴く。

ベッドでは調が熟睡していた。

そんな彼女をベッドの端へと追いやり、出来るだけ距離を取ってその反対で横になる。

ギョツと瞼を閉じ、それなりに睡眠欲を満たした藤堯の朝は、枕で叩かれて目を覚ますことで始まる。

「ふあッ!」

ばすんばすんと羽毛まくらで顔面を叩いてくるのはもちろん調だ。

「なんでッ! 藤堯さんがッ! 一緒にベッドで寝ているんですかッ!」

そこに騒ぎを聞きつけた切歌もやってくる。

「どうして朔也さんが調と一緒に寝ているんデス!」

二人の少女に責め立てられ、藤堯は眠い目を擦りながらせいぜいボヤクしかない。

「もう何度も同じやりとりしてるんだからさ、いい加減わかってよ二人とも…」

そして玄関から響いてくる保護者<sup>マリヤ</sup>の声。

「おはよう。…朝食の準備は終わったかしら?」

「めんどくさいタイミングでめんどくさい人が朝飯を食べに来ちゃったッ!？」

## アフターストーリーズ

### その1

わたしのパパとママ

私立リディアン音楽院

初等部2年2組

13番

藤堯律<sup>りつか</sup>花

わたしのパパとママはラブラブです。

ママは、いつもパパといちやいちやしようとしています。

パパは、わたしのいる前だと、教育にわるい！とあまりいちやいちやしようとしません。

それでも、わたしのいないところでは、きつと二人でいちやいちゃしているのだ。

ママは、「パパはツンのないツンデレなんデスよ」っていいいます。

それってただのデレデレだと思うのですが。

ママのジョークなのかもしれないんだけど、よくわかりません。

パパは国連というところでお仕事をしています。

世界の平和をまもる、とても大切なお仕事だそうです。

同じ職場で、弦十郎おじさんといっしょです。

弦十郎おじさんは、詩音ちゃんと九音くんのお父さん。

詩音ちゃんはようちえんのころからずっといっしょで、わたしの大親友です。

ちよつとだけ青いかみの毛が、とってもキレイでかわいいんだよ？

リディアンは女の子しか通えないので、九音くんといっしょに通えないのはかなしいです。

近くの公立小学校に通っているのですが、九音くんはカッコいいので女子に人気があります。

この間のバレンタインでは、たくさんチョコをもらっていたみたいだし。

わたしもチョコをあげようとママとがんばって作りました。

でもクラスの女の子に「初恋は実らないんだよ？ 知らないの？」とイジワルに言われて、少し泣いてしまいました。

ママにきいたら、「だいじょうぶです。ママはちゃんと初恋を实らせましたよ？」と教えてくれました。

すてきだなー、と思つて、パパもなの？ つかいいたら、パパは「ノーコメント」だそうです。

ママのお仕事は、よくわかりません。

ママは「うたずきんちゃんを作っているところにつとめているんです」つて言っていたけど。

でもこの間おみやげにもらったうたずきんちゃんのお人形で、新キャラのミドリ子ちゃんは、ママに似ていると思いました。

ママつて、もしかしてモデルなのかな？

わたしには、ほかにママのような人が二人います。

一人は調姉さん。

ママより一つ年下で、ママと姉妹みたいにくらしてきたそうです。

パパをときどきゲジゲジ虫を見るみたいな目で見ているけど、わたしにはとつてもやさしいです。

もう一人はマリアさんで、わたしがマリアさんとよぶと「どうしてマリア姉さんつてよんでくれないの？」と泣かれてしまいます。

でも、マリアさんは世界でも有名な歌手だし、だったらやつぱりマリアさんつてよぶしかないと思うんだけどなあ…。

わたしがそういうと、「みそじにもなつていけずうずうしいぞ、マリア！」つて翼さんがわらいます。

翼さんも、とつても有名な歌手です。詩音ちゃんと九音くんのおば

さんなんだって。

みそじつてなんですか？ つてきいてみたら、翼さんは、女の子と女のきょうかいせんだって教えてくれました。

大人のひとの言うことはよくわかりません。

パパは、お休みの日になると、よく料理を作ってくれます。

すつごく時間をかけて作ってくれる料理を、ママは「おいしいおいしい」と食べています。

わたしはママの作る料理のほうがおいしいと思うんだけど。

こつそりママにそう言ったら「これがパパのあいじょーひよーげんデスよ」とわらっていました。

やっぱり大人がいうことはよくわかりません…。

でも、わたしのパパとママはとつてもなかよしで、とつてもやさしいのです。

なので、わたしも、しょうらいはパパとママみたいになりたいと思います。

さいごに先生へ。

しゆくだいの点数をつけるとき、ちゃんと点数をつけてください。

へいき、へつちやら！ なんてかかれても、よい点数なのかわるい点数なのかわからないです。

## その2 日記7月分前半

7月 8日 (日よう日)

今日、みんなでお買い物にいったときパパに日記ちようを買ってもらいました。

わたしは作文がとくいではないんだけど、パパは少しずつでも書くとうまくなるよと言います。

毎日書くのはめんどくさいって言ったたら、べつに毎日書かなくてもいいよ、それにたくさん文を書かなくてもいいんだよ？ ってわらいます。

ほんとう？ って思っていたら、「ママもむかし日記をつけていたデスよ？」とママも言ってきました。

「そしてデスね、パパのことを好きって書いてたら、それを見たパパが：」と言いかけたんだけど、パパが「わー！わー！」とママの口をおさえてしまったので、それいじょうきけませんでした。

そのうち、またきいてみたいと思います。

そして、今日からこうやって、日記をつけてみたいと思います。

7月 9日 (月よう日)

今日はとくべつになにもないと思っていたんだけど、夕方に、立花先生がかていほうもんにきました。

夕ごはんを食べてかえっていききました。

ママのとくせいカレーはとてもおいしいので、先生もおいしいおいしいと食べてました。少しじまんです。ふふん。

7月 10日 (火よう日)

今日も立花先生がかていほうもんにきました。

夕ごはんを食べてかえっていききました。



夕ごはんはしょうがやきでした。

7月 11日 (水よう日)

今日も立花先生がかていほうもんにきました。

夕ごはんを食べてかえっていききました。

夕ごはんはメバルのにつけにポテトサラダでした。

7月 12日 (木よう日)

今日も立花先生がかていほうもんにきました。

夕ごはんを食べてかえっていききました。

夕ごはんはジャージャーめんに玉子スープでした。

7月 13日 (金よう日)

ほうかご、詩音ちゃんの家にあそびにいきました。

九音くんもいっしょにたのしくあそんでいると、クリスさんがおやつをもつてきてくれました。

クリスさんは、詩音ちゃんと九音くんのお母さんです。

クリスさんは「おばさんでいいよ」ってわらうんだけど、マリアさんよりきれいで、とてもおばさんなんてよべません。

「毎日立花先生がうちにかていほうもんにくるんだけど、詩音ちゃんのところへもくるの？」とたずねたら、クリスさんからくわしくおしえてほしいと言われました。

わたしがせつめいすると、わかった、まかせておけ。とでんわをかけにいったみたいなんだけど、となりの部屋から「このバカ!」「ちつたあじちようしろ!」とか大きな声がきこえて少しこわかったです。

でも、もどつてきたクリスさんは、いつもどおりニコニコとやさしいかおでした。

「すまねえな。これでもうかていほうもんはなくなるはずだ」って言

います。

わたしがよくわからなくてこまっっていると、頭をなでられました。「つたく、切歌も人がいいんだから」ってママの名前を言っていました。家にかえると、立花先生はきていませんでした。

クリスさんの言ったとおりだと思っただけでママにほうこくしたら、「響せんぱいも未来さんがしゅっちょうしててさびしいんデスよ」とわらってました。

「響は立花先生の名前です。」

なんかすごくむずかしい字なので書いてくたびれたので今日はおしまい。

7月 15日 (日よう日)

今日は調姉さんが家にきました。

「律っちゃん、あそぼ」

調姉さんは、わたしのことを律っちゃんってよびます。

ママのことは切ちゃんとよんでいるので、調姉さんのクセなのかもしれない。

わたしは、あんまり子どもっぽくきこえるからイヤだな、って言うたら、

「わたしは律っちゃんのおしめもこうかんしたことがあるんだよ？」ってすらすらとしたむねをはってました。

よくいみがわからないけれど、調姉さんはやさしいので、あんまりもんくはいわないことにしました。

まちへあそびにつれていってかれて、ママにもないしよでいろいろと買ってくれるし。

でも、いつもひるごはんがケーキバイキングなのはイヤだなあ。

7月 16日 (月よう日)

夕方、立花先生がきました。

またかていほうもんかな？　と思っていたら、げんかんでママにペこぺこ頭を下げています。

「ごめんね、しよっけんらんようでした！」

「そんなこときにしないでいいデスよ。今日もごはんはどうデスカ？」

「ううん、これいじようはクリスちゃんにまたおこられちゃうから」  
きこえたことをおぼえているとおりに書いたけど、まちがってないかな？

立花先生はそのままかえっていきました。

もってきたハコはおみやげで、なかみはケーキでした。

ごはんのあとにデザートで食べました。

おいしかったけど、うぶってなりました。

7月 19日（木よう日）

パパが夜にかえってきたのですが、いきなり「でかけよう」とママもいっしょにでかけました。

いったのはカラオケで、夕ごはんもそこで食べました。

でっかいハニートーストを、ママとわけて食べました。とつてもおいしかったです。

ママはとつても歌がじょうずです。きいているとうっとりします。なんかへんてこな歌をうたうことがおおいけれど。

パパは、たまにこうやってママの歌をきかないとぐあいがわるくなるんだって。

どうして？　ってきいたら二人でわらうだけでした。むむむ。

ほかにもきになったことがあったんだけど、ねむくなってきたので今日はこれでおしまい。



### その3 日記7月分後半

7月 20日 (金曜日)

今日はしゅうぎょうしきでした。

校長先生のお話がおわって教室にもどったあと、立花先生からもお話がありました。

家のおてつだいはきちんとすること。

よふかしはしないこと。

べんきようはしつかりすること。

子どもたちだけで shouldn't ところにあそびにいかないこと。

ノイズがでることがあるそうです。

いまはめつたに出ることはないけれど、先生が学生のころはたくさん出たんだって。

もしノイズにあつたらどうするんですか？ って男子がしつもんしたら、先生はまじめなかおでいきました。

「まずはぜんりよくぜんかいでにげること。それから先生をよびなさい」

わたしは、立花先生ならなんとかしてくれらると思って、はいとへんじをしました。

でもわたしと詩音ちゃんがい、みんなはわらつたなあ。先生もなんかきずついたかおをしていたけど。

7月 21日 (土曜日)

今日は、翼さんのライブに、詩音ちゃんたちといっしょにおよばれました。

ライブがはじまるまえにドキドキしていると、ママと調姉さんもいっしょにぼつくすてーじ？ とかいうところによばれました。

すると、そこにはマリアさんがいました。

スペシャルゲストによばれたんだって。

すごくキラキラしたふくをきたマリアさんは、わたしをみつけると

「あら律花、おおきくなったわね」とだっこしてきます。ふわんとお花のいいにおいがしました。

それから「わたしのたんじょう日は来月だからね？ おぼえている？」って5回くらいいわれたっけかな？

ライブはすごいはくりよくで、翼さんとマリアさんのデュエットがさいこうでした。

かえりみちで詩音ちゃんとマネをしました。きーずーなー！

7月23日（月よう日）

夏休みで、しゆくだいに日記もだされたんだけど、もうこうやって書いているのでラッキーです。

ママが「律花だけズルいデス！ ママも夏休みがほしいデス！」ってパパをぼかぼかたたいてます。

パパが「ええ？ しれいのところのキャンプにさそわれているだろ？」って言ってもママはほっぺたをふくらませたままです。

あ、しれいって、弦十郎おじさんのやくしよく？ なんだって。けつきよくパパが「わかったわかった。おぼんの少しまえに、三人で海にいこう」って言ったら、ママはにぱつとわらってパパにチュッチュッチュッチュツしてました。クーラーがついていたのにあつかったです。

7月 25日（水よう日）

今日は詩音ちゃんの家にごはんによばれました。

ママのうんでんする車でいくと、もう立花先生がいました。

「おまえはよんでないんだけど？」

っていいながら、クリスさんが立花先生の頭にフライパンをおきます。

「あちやちやちやちやッ！ やめてクリスちゃんカップになっちゃうよー！」

「つか、なんでジャージすがたなんだおめー」

「先生はいつもスーツだから、きをぬいたかつこうをしたいの！」

なんか口ではいろいろ言いあいしてるけど、クリスさんと立花先生はすつごくなかよしなんじゃないかな？

みななどお皿とおはしのよういをしていると、弦十郎おじさんとパパもいっしょにかえってきました。

「ししよー！」

って先生が立ちあがると、弦十郎おじさんも、

「うむッ！ 響くん！」

なんかのけんぼうみたいにくぶしをかまえています。

そこに九音くんもくわわって、三人でなんかしゅばばばって手と足をうごかしてました。

かつこいいなあ、つてわたしがみていると、クリスさんが三人の頭をじゅんぼんでフライパンでたたきます。

「ほら、いいからはやく手えあらってこいー！」

パパが言うには、弦十郎おじさんは「しじょうさいきよう」だそうです。

でも、クリスさんには頭があがらないみたいだから、クリスさんが「しじょうさいきよう」なのかしら？

クリスさんのつくるごはんはおいしくて、みんなでたくさん食べたと思います。

パパもよっぱらってしまって、かえりの車にのせてもらうときは、弦十郎おじさんにかた手でのせてもらったけど、おうちではママにおんぶしてもらってました。

ママは「パパをおんぶするのは十年ぶりくらいデスね」ってわらってたけど、ちよつとパパはかつこわるかったです。

7月 28日 (土曜日)

夏休みなので、今日はさつそく詩音ちゃんがおとまりにきました。

九音くんもさそつていたんだけど、えーと、男女7さいにしてせき

をおなじゆうせず？ とかいつて、弦十郎おじさんとつくんに行つたそうです。

詩音ちゃんは「さいきん九音はなまいきななの」って言います。わたしもたのしみにしてたのにぎんねんだな。

ママとくせいのお夏やさいかレーを食べていっしょにおふろに入りました。

そのあと、少しだけよふかしてテレビをみていたんだけど、詩音ちゃんがねむそうなのでいっしょにベッドにねました。

詩音ちゃんはすぐにねちやっただけど、わたしはなんだかねむれなくて、ベッドによこになったまま日記を書いています。

となりを見ると、本当に詩音ちゃんはちっちゃくてかわいいなーって思います。

みんなクリスさんのちっちゃいころにそっくりだって言います。すると、しょうらいもクリスさんみたいな美人さんになるのかな？

ようちえんのころから男の子にいろいろとちよつかいをだされて泣かされていたのを、九音くんといっしょにたすけました。

でも、リディアンには九音くんはいないので、詩音ちゃんをまもるのはわたしのやくめだと思います。

詩音ちゃんはやさしいけれどいがいと泣き虫で、おこったところをみたことはありません。

あ、でも一回だけおこったのをみたことがあります。あれはきよねんのバレンタインで、わたしが九音くんにつつたチョコを、詩音ちゃんからわたししてほしいとわたそうとしたとき、クラス

のイジワル女の子たちが言ってきました。

「え？ 男の子じゃなくて女の子にわたすの？ へんなの」「へえ、じぶんでわたささないんだ？ ダサいなー」

「初恋は実らないんだよ？ 知らないの？」

わたしがおもわず泣いちやうといきなり大声がしました。「むれすずめどもがぺちやくちやとー！ 人のこいじをじやまするやつはうまにけられてしんじまえー！」

びつくりして、わたしも詩音ちゃんが言ったとは思いませんでし



た。

他にも、

「あたしのさかさうろこにふれたのだ。それそうおうのかくごはできているのだろうか？」

「律花をいじめるやからのもとは、ここでまとめてたたいてくださー！」

とか言っていたのかな？

すごいはくりよくだったので、イジワルグループの女の子はみんなしやがんで泣いていました。

すぐに先生がやってきたんだけど、他の女の子たちもいろいろといつてくれて、わたしも詩音ちゃんもちゅういさされただけでおわりました。

かえりみちで詩音ちゃんは「あ、あの、あたしがさつきいったことはナイショにしてね？」と言われたので、これは二人だけのヒミツです。

きつとわたしのためにおこってくれた詩音ちゃんのことをわたしは大好きです。

でも詩音ちゃんは「お父さんと同じくらい律花ちゃんのが好きだよ」って言ってくれるけど、それってビミョー？

## その4 日記8月分前半

8月 3日 (金よう日)

今日は、夏休みのしゅくだいの工作で、ブローチをつくりました。ママといっしょにヒマワリの形をしたのをがんばってつくりました。

二つ作って、上手にできたほうをマリアさんのたんじょうプレゼントにするつもりです。

たんじょうびの日にはケーキもやくつもりだけど、マリアさんはよろこんでくれるといいな。

8月 7日 (火よう日)

今日はマリアさんのたんじょう日です。

プレゼントをもってホテルへ行ったら、すごいドレスをきたマリアさんがいました。

「ごめんなさい。今年はおなたたちだけとゆつくりするつもりだったけれど…」

とあやまられました。

マリアさんはゆうめいじんなので、いろんな人がとまっているホテルでたくさんおいわいしてくれるらしいです。

「しかたないデスね」

ママといっしょにプレゼントをわたしてかえりました。

マリアさんはとてもよろこんでくれて、ブローチをドレスのむねのところへつけてくれました。

おうちへかえってテレビをみると、マリアさんのたんじょう会が生ほうそうされててびっくりしました。

とてもひろい会場で、きらきらしたふくをきた大人のひとがたくさん。

テーブルの上のごちそうもすごいです。

マリアさんがテレビがめんいっばいに出てくると、わたしの作った

ブローチもうつりました。

テレビの中のマイクをもった人が『あら、そのブローチは？』って  
ききます。

マリアさんはにっこりとわらって『さいこうのたんじょうびプレゼ  
ントです』っていつてくれたのはうれしかったな。

そのあと、なんかすごくきんピカのゆびわとかつけた男の人が、マ  
リアさんにすごく大きなほうせきみたいなネックレスをわたしてい  
ました。

男の人がネックレスをかけようとして、わたしのブローチをはずし  
てぼんとなげつちやたとき、マリアさんがものすごいビンタをしまし  
た。

テレビがまつくらになって、こわれちゃったと思ったけど、少しし  
たらなおりました。

あとでマリアさんから「ごめんねごめんね」とママにでんわがきた  
みたいけど、わたしはねていたのでよくわかりません。

8月 8日 (水よう日)

今日は、ママと調姉さんといっしょに、近くの夏まつりに行くこと  
になりました。

わたしはあたらしいゆかたを作ってきせてもらって、ママたちもゆ  
かたをきました。

二人とも高校生のころに作ったゆかたなんだって。

ママは「ちよつとむねがくるしいけれどきれたデース！」とニコニ  
コしてたけど、調姉さんは「よゆうでできた…」となんか少しかなし  
そうなかおをしました。

おまつりの会場で、詩音ちゃんともあいました。

わたあめ、チョコバナナ、やきそば、かきごおり、りんごアメ。  
おいしいものがたくさんです。

なかでも、ママがかつてきてくれたタコやきが、なかにおつきなタ  
コが入っていていちばんおいしかったです。

「おみせのおじさんが教えてくれたデスけど、足が24本もあるタコがみつかったそうデスよ！」

ママがそういつていたけど、ほんとうかなあ…？

8月 10日 (金よう日)

明日から弦十郎おじさんたちとキャンプです。

山で虫とりや川でおよいだり、バーベキューもするそうです。

九音くんから「ぼくのたからものを見せてあげるよ」といわれているのでたのしみです。

8月 11日 (土よう日)

朝はやくから、みんなで車にのってキャンプへいきました。

行くときはみんなで歌をうたったのがすごくたのしくて、あつというまにキャンプ場へついたと思います。

「みんな、おそいよ！」

キャンプ場へついたら立花先生がいました。未来さんもいっしょです。

未来さんは立花先生のおよめさんだそうです。

女の子どうしでけっこうできるの？ ってパパにきいたら「親友のじょういごかん」なんだって。

よくいみがわからないって言うとき、大人になればわかるそうです。詩音ちゃんにもわかる？ ってきいたら「いわゆるえるじーびーていーみたいなの？」って言うてたけど、これもいみがわからなかったな。

テントを四つくらいたてたあと、ママたちは火をおこして、パパとわたしと詩音ちゃんて川へつりにいきました。

弦十郎おじさんと九音くんは山へいったみたいです。

マスっていう魚が、みんなで6ぴきくらいつれました。

キャンプ場へかえると、九音くんたちももどってきて、弦十郎お

じさんが大きなイノシシをかかえていてびっくりしました。

「これで肉はたりるだろう」

弦十郎おじさんはわらうんだけど、クリスマスさんがこまったかおをします。

「つてゆうかだれがさばくんだよ、これ？」

すると未来さんが手をあげました。

「わたしができますけど」

「さすが未来、わたしのよめ！」

立花先生はおよろこびです。

そんな立花先生は、教育にわるいつてクリスマスさんにたたかれてました。

イノシシをさばくところも、なんか教育にわるいつてみせてもらえませんでした。

キャンプファイヤーをかこんでみんなで食べたイノシシのやき肉とおなべはとてもおいしかったです。

ごはんがおわつてあとかたづけをしたあと、九音くんがたからものを見せてくれました。

「…なにこれ？」

なんかすぐくきたないふくでした。

「ブルース・リーのきていたどうぎだぞ！」つて九音くんはむねをはつていたけど、よくわかりません。

でも、パパが「かんでいしよもついているしほんものだ…」つておどろいていたからすごいのかも。

ママが「いくらするんデス？」つてきいたら、九音くんは「ずっとおとしだまをためて買ったんだ！」だって。

「あのじいさんも、まごにぞうよせいぎりぎりのこづかいわたしてくるんだよなあ…」

クリスマスさんがこまったかおをしていつていたけどどういういみなんだろ？

「おれのむすこながらほめるべきかあきれるべきか。まあ、あとすうひやくねんくらいすればせいいぶつになるかもしれない」

弦十郎おじさんもいつしよにこまったかおをしてみました。

「そのころはあたしたちはだれもいきちやいないよ」ってクリスマスさんがあきれがおでいって、九音くんはだいじそうにたからものをしまつてました。

そのあと、ココアをのみながらマシユマロをやきました。

やいたマシユマロをバスケットにはさんで食べるととてもあまくておいしかったです。

「ねえ、律花はしようらいなんになりたいインデス？」

いきなりママがきいてきました。

「うーんと、お花やさん？」

わたしはヒマワリが好きなのでそうこたえました。

「んじや、詩音、おまえはなにになりたい？」

クリスマスさんがそうきくと、詩音ちゃんはちっちゃな声でぼつりといいました。

「お父さんのおよめさん……」

「そいつはうれしいな」って弦十郎おじさんはわらいます。

「でも、こんなとうへんぼくのおっさんにほれるといろいろとくろうするぜ？」

クリスマスさんもわらってました。

するとなぜか立花先生がおおわらいしました。

「さすがクリスマスちゃん、せつとくりよくがぼくはつしているツ！」

「……うるせえー！」

クリスマスさんがもっているマシユマロをびしぼしとなげて、それを立花先生がぜんぶ口でキャッチしたのがおもしろかったです。

そして次はいよいよ九音くんです。

詩音ちゃんがお父さんのおよめさんになりたいといっていたのをきいて、九音くん、ようちえんのとくにけっこんのやくそくしたのおぼえているかな、わたしも九音くんのおよめさんになるって言っておけばよかったかな、もしかして律花ちゃんとけっこんって言ってくれるかなってドキドキしていると、九音くんがいました。

「ぼくはえいゆうになるツ！」

えいゆうってなんだろう？　ってわたしが少しがっかりしていると、大人のひとたちがいつせいにコーヒーをふきだしてました。

どうしたんだろうって思っていたら、子どもたちはもうねなさいってほみがきしてテントへいれられました。

まだ八時くらいなのでねむくないので、こうやって日記をつけています。

いっしょのテントの詩音ちゃんに「えいゆうってなに？」ってきいたら、ヒーローのことだそうです。

九音くんはヒーローアニメとかせいぎのみかたとか大すきだからなー。

山の夜はしずかで、詩音ちゃんはすぐにねちやいました。

大人のひとのヒソヒソばなしがきこえてくるので少しメモしてみます。

「…まさかな」

「それでもいちおうしらべてみてもらったほうが」

「こんどえるふないんにそうだんしてみるわ」

えるふないんてだれなんだろう？　ってきになったけれど、わたしもねむくなってきたのでおしまいにしたいと思います。

明日のキャンプのつづきもたのしみだな…。

## その5 日記8月分後半

8月 12日 (日曜日)

キャンプ二日目で、朝早くから弦十郎おじさんにつれられて森のおくに行きました。

「よし、ここならたくさん虫がいそうだな」

昨日、九音くんとイノシシをつかまえたときにめぼしをつけていたそうです。

「ちえすとツー!」といって弦十郎おじさんがふとい木をたたくと、木がびりびりとふるえて、虫がぼとぼとぼとーってたくさんおちてきました。カブトムシとクワガタムシもいっぱいいます。

でも、ケムシやムカデもたくさんおちてきて、詩音ちゃんは泣いちゃいました。

弦十郎おじさんが詩音ちゃんをだっこしてなぐさめているとなりで、九音くんも「ちよつせえ! ちよつせえ!」と木をたたいてました。

なんでちよつせえなんだろうと思ったけど、なんだかわたしもマネしたくなって、テントのところにもどってラジオ体そうするとき、九音くんといっしょに「ちよつせえ!」とかけ声をかけながら体そうしました。とつてもたのしかったです。

でも、なんかクリスマスさんはこまったかおをしてたんだけど、なんでだろ?

あさごはんを食べて、それからみんなで川あそびをしました。

クリスさんが水でつぼうでハチをやつつけたのはすごかったなあ。

立花先生が川の真ん中で足ぶみすると、ぶわーっと川の水がとんで、魚もたくさんとんできたのはおもしろかったです。

お昼はその魚をみんなでやいて食べて、テントをかたづけかいてさとなりました。

かえりの車の中でわたしはねむっちゃったみたいで、目がさめたらおうちのソファアーでした。

九音くんと詩音ちゃんにバイバイできなかつたのはざんねんだな。



また来年もみんないっしょにキャンプにいけたらいいな、と思います。

8月 13日 (月よう日)

今日は、パパとママといっしょにはわいわんホテル？ とかいうところにとまりにきました。

りっぱなホテルの前に、まっしろいすなはまが広がっていてびっくりです。ぷらいベールとびーちとかいうんだって。

みんなでみずぎにきがえておよぎにいったんだけど、パパはすぐにひかいでねちやいました。

「パパは今日もうんてんしてつかれてるんデスよ」

ママがそういつてねかせてあげるようにいったので、ママと二人であそびました。

あ、ねているパパはくびだけ出してすなにうめてあげました。

夜はバイキングで、おいしいりょうりがたくさんです。

デザートまで食べておなかいっぱいでいると、なんかショーがはじまりました。

どこどこってタイコ之音に、なんかたくさんの男の人たちが火のついた長いぼうをクルクルとふりまわしてダンスをしてかつこよかったです。

そしたら、みていたお客さんたちがステージによばれて火のついてないぼうをわたされました。

みんなくるくるとまわそうとしてしっぱいしてばかりです。

するとママもよばれました。

ママもしっぱいするかな、と思ってドキドキしていたら、ママはすごいきおいでクルクルとぼうをまわしてびっくりです。男の人たちよりじょうずだったんじゃないかな？

みんなからすごいはくしゆをされながらママはステージからおりてきました。

「むかしはもっとうまくできたんデスけどね」

びつくりしているわたしに、ママはこうも言ってました。

「ママはぼーるだんすもできるんデスよ?」

ぼーるだんすってなんだろう?って思っている、ママはパパに、まだ教育にわるい! っっておこられてました。たのしかったけど、またママのナゾがふえた夜でした。むむむ。

8月 14日 (火よう日)

ホテルからかえってきてから、おぼんなので、夕方にみんなでおはかまいりにいきました。

パパとママといくと、もう調姉さんとマリアさんもいます。

マリアさんがわたしのプレゼントしたブローチをつけてくれていてうれしかったな。

おはかをまえに、みんなで手をあわせておいのりしました。

このおはかには、ママたちのお母さんのナスターシャさんがねむっているんだって。

すると、わたしにとってはおばあちゃんなのかしら?

わたしが生まれる前になくなってしまったそうだけど、えいぞうとかはたくさんのこっているそうです。

「律花が大きくなったら教えてあげるわ。ママがしてくれたことを、色々ね」

マリアさんがそういつて頭をなでてくれました。

ママも調姉さんも泣きそうなかおをして、なんだかちよつとかなしくてさみしい一日でした。

8月 20日 (月よう日)

今日は、初めてパパの職場に見学に行く日です。

本当は詩音ちゃんもいっしょに行くはずだったんだけど、カゼをひいちやっておやすみです。

だから九音くんと二人きりで、デートみたいでドキドキしました。パパの職場は、すぐくでつかいお船です。

せんすいかんって言って、海の中にもぐれるんだって。

中はとつても広くて、いろんなけんきゆうしつとかたくさんあります。

その一つで、なんか九音くんといつしよにけんさをうけました。

「ごめんなさいね、ほんぶようのあいしーちつぶを作るから」って言うてたのは友里さん。

弦十郎おじさんのぶかなんだって。

なんかちゆうしやみたいなのをさされてチクリとしたけど、血ともでなかつたのでへいきへっちやらです。

「九音くんも律花もえらいな」

パパが食堂でおひるごはんをごちそうしてくれました。とつてもおいしかったです。

食後のコーヒーをのんでいると、キョロキョロしていた九音くんが小さな声でいってきました。

「律花ちゃん、みた？」

「みたって何を？」

「さつき、ろうかを小さな女の子が歩いていったんだけど」

そういわれても、見てなかったので知らないというしかありません。

わたしたちと同じで職場見学なのかなあ、と思っていたら、九音くんに手をつかまれました。

「ちよつとトイレ行ってきます」

ろうかに出ると、九音くんはずんずんと歩いていきます。

わたしが、トイレはあっちだよ？　といつてもきいてくれません。

「たぶんこつちだとおもうんだけど…」

って、だいぶ遠いところまで歩いたと思います。

なんか大きなとびらの横に、ぱそこんみたいにキーボードがついてました。

行き止まりだから帰ろうよ、とわたしはいつたんだけど、九音くん

はぽちぽちとキーボードをさわっています。それでも開かないので、いきなりたたいたのにはびっくりしました。

「お父さんが、きかいはたたけばなおるッ！　　っていった」そうです。

そしたら本当にとびらが開いたので、二度びっくりです。

「へえー、本当にたたくとなおるんだなあ」

と九音くんもおどろいてました。

でも、キーボードはへこんでなんかバチバチいつているし、なおすというよりこわしていたんじゃないかなあ？

しばらくいつたらまたとびらがあつて、九音くんも「やっさいもっさい！」っていつてまたたいてました。

わたしがちよせえーじゃないの？　　つてきいたらもうふるいんだつて。

そうやって、とびらを10こくらいあけたと思います。

なんかどんどん暗くなってきたので、九音くん「もう帰ろう」つてもう一度声をかけたときでした。

「なんでこんなところにこどもがいるんだゾ？」

いきなり、まっかなかみの毛にギザギザの歯の人が立っていて、きぜつしちゃうかと思いました。

まるで絵本で見た赤オニみたいで、わたしはこわくて何もいえません。

「わるい子はたべられてももんくはいえないんだゾ」

ピカピカしたつめもすごくのがつていて、ああ、本当にわたしは食べられちゃうんだ、となみだが出たとき、九音くんが大きな声をあげました。

「わあ、おねえさんのつめ、うるヴありんみたいでちようかつこいい！」

なんか赤オニもびっくりしたみたいです。

そしたらまたべつの人の声もきこえてきて、わたしは今日で一年ぶんくらいびっくりしてしまっただと思います。

「だいじょうぶですよ、ミカ。その子たちはたいせつなおきやくさま

です」

なんかおさげのかみの毛の女の子が立っていました。

「はじめまして。ボクはエルフナインといいます。九音くんは律花ちゃん、ようこそ」

この子がパパたちのいつていたエルフナインって人なんだって、いま日記を書いていて気づきました。

わたしと九音くんが入っていったのは、そのエルフナインって人のけんきゆうしつだったんだって。

そこでお茶とおかしをこちそうになったんだけど、わたしは赤オニの人がこわくてなにをお話したのかあまりおぼえていません。ほかにもギザギザ歯の青オニみたいの人までいたし。

だから、パパがむかえにきてくれたときは、だきついて大声で泣いてしまいました。

そして九音くんは、弦十郎おじさんにすごいゲンコツをおとされました。

パパは「かつてに知らない場所にいつちやダメだよ」とわたしをしかったあと「これから少しずつ、律花にも色々教えてあげるから」と頭をなでてくれました。

色々ってなあに？　ってきいたら、それもふくめて色々なんだって。

パパの職場からの帰り道、九音くんから小さな声で「またエルフナインちゃんのところにあそびにいこう」ってきそわれました。

オニの人たちがこわくないの？　ってきいても、九音くんはエルフナインちゃんはちよーかわいいってしか言わないのですごくもやもやします。

まだへんじはしてないけど、こんど詩音ちゃんにそうだんしてみようつと。

## その6 日記9月分前半

9月2日 (月よう日)

今日から二期です。

二期は、遠足や運動会もあるのでたのしみです。

朝礼で、校長先生から、だれもびようきやけがをせず夏休みをすごせましたね、とほめられました。

だれもちこくしなかったのもえらいってほめてもらっていると、立花先生がちこくして校長先生におこられてました。学校にくとちゆうで、高い木からおりられなくなったネコをたすけていたんだつて。

おうちにかえってママにはなしたら、「響さんらしいデス」ってうれしそうでした。

ちこくしたのにうれしそうなんてヘンじゃないの？ ってママにたずねたら、律花もそのうち分かるデスよって言われました。

さいきん、よく同じことを言われるような気がします。

どうすれば、はやく分かれるようになるのかな？

9月5日 (木よう日)

今朝、テレビをみていたら、マリアさんが出てきてびっくりしました。

なんかとつてもゆうめいなシェフさんと『こんやく』したんだつて。こんやくしたつてことは、けっこんしておよめさんになるつてことなんだよね？

けっこんしきとかによばれるのかしら、とドキドキしたんだけど、ママとパパは二人でなんだかむずかしい顔をしています。

「こんどはだいじょうぶデスカね？」ってママが言つてたのが気になつただけで、学校に行く時間だったのでくわしくきけませんでした。

学校でも、マリアさんのはなしでおおさわぎでした。

マリアさんは歌手でもゆうめいだけど、テレビのコマーシャルでもひっぱりだこなんだって。

くうきせいじょうきのコマーシャルにでたときは、その商品がバカうれしたってパパが言っていました。クラスの男子もよく給食を食べ、  
「しかもおいしい！」ってマネしてるし。

そんな大人気のマリアさんは、わたしがようちえんのときにフケイさんかんで来たことがあるそうです。

わたしはよくおぼえてないけど、大きわぎになったみたい。

秋の運動会にこつそりきてくれないかな、なんておもったけど、こんやくしたらむりだらうなきitto。

9月9日 (月よう日)

今朝のテレビにもマリアさんが出ていました。なんか『こんやく』をかいしようしたんだって。

テレビの中の人は大きわぎで、きつと学校でも大きわぎなんだろうなああってわたしが思っていると、パパとママはまたむずかしい顔をしてました。

学校にいったら、やっぱり大きわぎで、おとなしいのは詩音ちゃんくらい？

そして家に帰ったらマリアさんがいたので、わたしは一日で二回びっくりです。

「おかえりなさい、律花」ってマリアさんは頭をなでてくれたけど、なんか元気がありません。

やっぱり『こんやく』をかいしようしたからかな？

そう聞いてみようかな、と思ったら、マリアさんはママにぶつぶつ言っています。

「…わたしに料理させないなら、わたしよりおいしい料理を作ってくれなきゃ！」

なんかおこっているみたいです。

「マリアはりそうが高すぎデスよ」ってママが言うと、パパは「このば

あいは、高いってよりヘンなんじゃないか？」って小声で言っていました。

そんなマリアさんは、パパの作った料理やおつまみをモリモリ食べてました。

「あーもうー、おいしいな、ちくしょう」

そしてお酒もたくさんのだみたい。

わたしがまだねる時間にもなっていないのに、ぐーぐーとテーブルでねてしまいました。

ママはそつとマリアさんの体に毛布をかけていました。

なんかよくわからないけど、大人ってたいへんなんだなあって思いました。

9月13日（金曜日）

今日は立花先生のたんじょう日なので、詩音ちゃんの家でみんなでおいしいパーティをしました。

ママといっしょにとびきり大きなチーズケーキをやきました。

詩音ちゃんとクリスマスさんは、こっちもおおきなチョコケーキです。

それと、学校ではわたせなかつたので、詩音ちゃんといっしょにおこづかいを出し合ってたかったプレゼントをわたしました。

立花先生はプレゼントをあけると、すぐにサクランボのヘアピンをつけてくれました。

「ありがと〜！ 先生、かんげきだよ！」

立花先生は、わたしと詩音ちゃんをぎゅつとだききしめて、

「二人とも、ほんとうよい子だね〜。わたしの家の子どもにならない？」

つてきいてきました。

すると「おまえバカもやすみやすみええ！」ってクリスマスさんがおこつて、ママも「だいじな一人むすめをあげられるはずないデスー！」って大きな声を出します。

「わかってるよ、じょうだんだつてば〜」



立花先生はわらって手をふっていたけど、あとで未来さんにもおこられたみたい。

パーティには調姉さんとマリアさんもきて、とつてもにぎやかです。

弦十郎おじさんの手品もたのしかったけど、調姉さんがヨーヨーをりょう手でクルクルと回してたのはとくにすごかったです。

とつてもたのしいパーティでした。

9月15日（日曜日）

今日は詩音ちゃんと九音くんとわたしの三人で、パパの職場へあそびにいきました。

前にきたときより、なんか広くてしずかです。どうして？　ってパパにきいたら、日ようでお休みなので、ふだんより人は少ないんだって。

パパにつれられて、前にはみられなかったばしょをたくさん見せてもらいました。

大きなおふろにでっかいプール、ゲームセンターまであってびっくりです。

コンビニまであって、パパがなにかおかいものをしているあいだに、九音くんにかたをたたかれました。

「エルフナインちゃんのところへいこう」

わたしはあんまりいい気分じゃないんだけど、詩音ちゃんもいくというのでついていきました。

「たぶんこっちだとおもうんだけど…」

つて九音くんがあるいていくと、前みたいにキーボードのついたでっかいとびらがありました。

九音くんがやっさいもっさい！　つてたたこうとしたら、スツとひらいてエルフナインちゃんが立っています。

「きょうはみなさんできてくれたんですね。こちらへどうぞ」

エルフナインちゃんにあんないされてへやに入ると、この間見た赤オニさんに、青いオニさんもならんで立っていたので、わたしはヒザがガクガクふるえてなきそうになっちゃいました。

「律花さん、だいじょうぶですよ。こちらはミカです」ってエルフナインちゃんが言ってくれるけど、「ますたーのおきやくさんはたべたりしないゾ」赤オニのミカさんのツメはやっぱりおっつかないです。

「そしてこちらはガリイです」

エルフナインちゃんが青オニの人をしようかいして、青オニの人も「ガリイちゃんですよ」とあいさつしてくれたとたん、九音くんが大こうふんです。

「うおー！がりがりい!? まるすくりーげ? ぱんつあーくんすと!?!」

「…なにいつてるのかしら、この子?」

わたしもなにをいつているのかさっぱりわかりませんでした。

そのあと、みんなでまるいテーブルにすわっておちやをのみました。

あまいココアはおいしかったけど、なんだかねむくなってきちゃいました。

「ああ、そこで横になってもいいですよ」

エルフナインちゃんにいわれて、おへやのすみのソファアにゴロンと横になりました。

そのままウトウトしていると、三人が何かしゃべっているのが聞こえます。

「ほう。まだチビすけのぶんざいでいきていたか」

「キサマこそな、このイカズゴケ」

「ふっ、えいゆうはしないんですよ」

「おまえはだまつてろ、さんした!」

「ひ、ひどい…」

なんかみんなしておっつかない声で、こうやっておもいだして書いてるけど、いみふめいです。

なにをはなしてたんだろ?

そして、わたしが目をあけると、しらないおばさんがわたしのかみ

の毛をなでていました。

なんか左の目にくろいがんたいをしてました。

知らない人とはお話をしちゃいけないって先生からもいわれてたけど、とつてもやさしそうなえがおです。

「あなたが切歌のむすめですか」

って、ママの名前をいってました。だから、ママのこと知っているんですか？ ってきいたら、「ええ、とてもよく」だって。

ママの知り合いならお話してもだいじょうぶだとおもって、いろいろとお話しました。

がっこうのこと、ともだちのこと、もちろんママや調姉さん、マリアさんのこともたくさん。

そうしたら、またねむなくってきちちゃって、おばさんがひざまくらしてくれました。

「いつでもあなたたちのことをみまもっていますよ」

ニコニコしながらおばさんはわたしの頭をなでてくれて、詩音ちゃんにかたをゆすられて目をさましたらもういませんでした。

「おばさんは？」とエルフナインちゃんや詩音ちゃんにきいても首をふっていました。

もしかしてゆめだったのかしら？

そのあと、パパがおむかえにきて、エルフナインちゃんのところから帰りました。

なんかミカさんとガリイさんを見て、パパが「ひっ」と声を上げていたのは、ちよつとかっこわるかったです。